
雉野ゆいら
金蘭の王国
君とはじまりの約束を
角川ビーンズ文庫

金蘭の王国
君とはじまりの約束を

薙野ゆいら

BEANS BUNKO
15459
角川ビーンズ文庫

金蘭の王国

君とはじまりの約束を

薙野ゆいら

15459

角川ビーンズ文庫

金蘭の王国

君とはじまりの約束を

序　章	はじまりの約束	5
一　章	理から外れしものたちよ	7
二　章	薬師と組み紐	52
三　章	舞い降りる炎	82
四　章	彼は誰	112
五　章	心の在り処	147
六　章	炎の行方	181
終　章	今はただ、理の外で	238
あとがき		250

登場人物紹介



翔波（しょうは）
綺理たちの幼なじみの正三位乾術師。冬惺に絶対の忠誠を誓う。

冬惺（とうせい）
白桜王家・春怜王の弟。綺理のいとこで、護国大将軍の位をもつ。

綺理（きり）
瑛国の大貴族・玉造家の姫だが、毒薬の調合が趣味の型破りな少女。

本文イラスト／香坂ゆう

序章　はじまりの約束

世界の淵源の海――淵海。

人の住む大地を浮かべ、天の下に果てしなく広がる、とろりとした泥の青海原。

そんな海の上に、あかがね色に染まった満月が昇っていた。

月明かりに照らされた泥の海、光のささぬ鬱蒼とした夏の森。その境界に子供の声が響く。

「……るな、来るな、化け物……っ」

声の主は、岸辺にへたりこむ黒髪の少年だった。少年の端整な顔は恐怖に彩られ、見開かれた琥珀の瞳は、淵海からはい上がってきた巨大な妖を凝視している。

闇が獣の姿をとったようなその妖は、水音を立てながらゆっくりと歩んできた。妖が近づくにつれて岸辺の土が泥に変わり、生あたたかい空気はますます湿り気を帯びていく。

妖が足を止め、体の一部を腕のように伸ばした。腕の向かう先は、少年のそばに倒れている二人の子供。二人を喰らおうとするかのようなその動きに、少年は瞳を凍りつかせた。

「やめ、ろ……離れろ……。こいつらから、離れろ――……！」

妖を払いのけようと身を乗り出す。その細い体にも、妖の腕がぐるりとからみついた。

「――――！」

生ぬるい泥にのみこまれる感触に、少年の喉から声にならない悲鳴がほとばしる。
「子供らよ。見せよ、さらせよ、その心――」
耳元でくぐもった声がして、胸の奥底をあばかれるような嫌な感覚が少年を襲う。
少年は絶叫し、泥の中でもがいた。しかし唇からこぼれるのは助けを求める言葉ではなく、かたわらにいる二人の幼なじみの名前。
絶対に守らなくてはならない大切な二人――泥にのまれつつある金髪の少女と銀髪の少年に、黒髪の少年は必死で手を伸ばす。届かない、届かない、この手は泥しかつかめない――。
やがて泥は、潮が引くように少年たちから離れていった。
力を失って仰向けに転がる少年に、妖は静かに言った。
「……そうか、　　が望みか」
その声は先ほどとはやや違い、なにか奇妙な響きを帯びていた。
「ならば叶えてやろう。その望み、その願い、必ず成就させると約束しよう」
宣言すると同時に妖の巨体が縮み、異形の獣から人の姿へと変化していく。凝った闇のような体が、抜けるように白い肌と白い装束、風になびくつややかな髪になっていった。
ぞっとするほど美しい童子に化けた妖が、少年を見下ろして薄く笑う。その瞳が翡翠色に輝くのを見て、少年は琥珀の双眸を泣きそうに歪めた。
（俺たちは……俺が、この化け物を……）

一章　理から外れしものたちよ

乾いた白砂の敷かれた街路を、一匹の虎猫が軽快に駆けていた。
小ぶりの巾着を口にくわえているというのに、猫の足取りはまったく乱れない。露店が所狭しと並び、大勢の人々が行きかう昼下がりの西市を、すいすいと進んでいく。
人間を馬鹿にしたようなその後ろ姿を、二つの人影が早足で追っていた。
金髪の少女と黒髪の少年である。
どちらも年の頃は十六、七。細い筒袖の上衣に丈の短い袴、粗い絹布のくつと、王都に住む貴族にしてはかなり活動的な装束に身を包んでいる。身のこなしも軽く、二人はなかなか器用に雑踏をすり抜けて進んでいた。
とはいえ小走り以上の速度は出せず、とうとう少女のほうが焦れたようにぼやいた。
「あのにゃんこ、こっちが小回りきかないからってなめてくれちゃって……」
「そう焦るな、綺理。どうせ勝負をしかけるのは市を出てからだ」
一歩後ろを行く少年に冷静に言われ、綺理と呼ばれた少女はむうと頬を膨らませた。
くるくる変わる表情と、生気に満ちて輝く緑の瞳が印象的な、溌剌とした少女だ。腰まである明るい金髪を結わずに流し、瞳と同じ深い緑色の碧玉で飾っている。少女の機敏な動きに合

わせて、上衣の飾り紐の端が生き物のように踊った。
「だって三人で市をまわるのなんて久しぶりだったのに、あの引ったくりにゃんこのせいで台無しになったのよ？　ああもう、腹立つっ。かわいいから許すけど」
「確かに。どこかの動物好きが無防備に野良猫とたわむれようとした挙げ句、巾着を奪われるという事態にならなければ、今頃はのんびり刀剣を見てまわっていたな」
「う。ご、ごめんね冬惺。実は怒ってる？」
淡々とした言葉に、綺理は従兄にして幼なじみの少年をこわごわ振り返った。
冬惺はつややかな黒髪と、冷たく端整な容貌の持ち主だ。髪を高く結い上げて腰に太刀を帯びるという武官の装いが、切れ長の瞳と相まって、見る者に鋭利な刃のような印象を与える。
彼は金色がかった琥珀の瞳で綺理を見返し、にやりと笑った。
「ああ怒っている。だが、かわいいから許す」
「っ!?」
「というのは冗談。ここ最近、兄上の補佐で王宮にこもってばかりだったからな。こうやってかけずりまわるのも楽しいさ。昔に戻ったようで」
「……あ、そう」
熱くなった頬が瞬時に冷え、綺理は肩を落とした。
冬惺にとっては、ただの幼なじみ相手だから言える軽口。甘い意味も深い意味もない。そう

とわかっていながら動揺してしまった自分が悲しい。

「……うん、まあ、楽しんでるならいいんだけどね。……あ、そろそろ？」

市の西端を示す旗が視界に入り、綺理は冬惺に目配せした。

「だな。そこの小路から倉町に追いこむ。十数えたら走るぞ」

了解、とうなずくと、心の中で数を数えながら人ごみをかきわけていく。八で雑踏を抜け、九で市の端にたどりつき、十で二人同時に走り出す。

「待ちなさい、この盗人にゃんこぉおおお！」

白砂を蹴って一気に速度を上げた綺理。その異様な気迫と異常な加速度に、猫はぎょっとしたようだった。今までの悠長な歩みから一転、すっころぶような勢いで逃げはじめる。逃走する猫、追う二人。体の割に大きな巾着をくわえているので、猫のほうが分が悪い。直線の路地を駆けるうちに、両者の距離はじわじわ縮まっていく。

「それを返しなさいったら。おとなしく返せばなにも……って、どこ行く気よこら！」

標的がつきあたりを曲がらず、築地塀に跳びのって直進するのを見て、綺理は叫んだ。

「立体で逃げるなんて卑怯者ー！　どうする冬惺、別の道からまわりこむ？」

「一度でも目を離せば見失う！　このまま追いかけるぞ！」

冬惺は答えると、ぐんと足を速めて綺理を追い抜いた。壁を蹴って身軽に体を持ち上げ、築地塀の屋根に上る。同時に半身を返し、右手を塀の下に差し伸べる。

「綺理！」
「ありがと！」
壁に足をついて跳び上がり、冬惺の手をつかむと、綺理の体はふわりと浮いた。そのまま引き上げられ、築地塀の上にすとんと降り立つ。
「わ、けっこう高い。でもここからなら作戦通り翔波のところまで追いこめそう。ふふふー、逃がさないわよこの泥棒にゃんこ――――！」
綺理は鮮やかな緑の瞳で前方の猫を見据え、冬惺とともに塀の上を猛然と走り出した。

春怜王治世九年――。
瑛国の王都、輪瑛は平和だった。
金蘭王家が『白桜』と『紅楓』の二家に分裂して以来、長く続いていた王位争いの内乱も、一年前の戦でほぼ決着がついている。戦の危機は遠ざかり、気さくで民に人気のある白桜王家の王のもと、王都に住まう人々はようやく訪れた平穏をかみしめていた。
――ごく一部の者たちには、既にその終焉がひたひたと近づいていたけれど。

「翔波！　今、猫がそっち行くから準備して！」
唐突に降ってきた少女の声に、倉町の小路に立っていた翔波ははっと顔を上げた。

くせのある銀髪を首の後ろで一つにまとめた、おとなしげな顔立ちの少年だ。瞳の色は銅鏡のような青銅色。南方渡りの片眼鏡で右目を覆い、立派な朱塗りの碁石を数個手にしている。

翔波は、校倉造の正倉の上から一匹の猫が飛び下りてくるのを認め、右手を構えた。

「天滅還海――」

極限まで縮めた呪文を唱え、猫に向かって碁石を三つ投げ放つ。

「制せよ、転ぜよ、弾けよ！」

命じる声に応じて、碁石から紺碧のもやのような物が噴き出した。

もやの正体は、碁石に憑いていた泥の妖、淵妖だ。

淵海より来たりし、泥を本性とする妖たちは、次々に猫に襲いかかる。足にまとわりついて動きを止め、転ばせて向きを変えさせ、ある地点――碁石を並べた円の中へと弾き飛ばす。

「――爆ぜよ！」

仕上げとばかりに翔波が叫ぶと、円陣の碁石からも淵妖が飛び出す。直後、碁石から派手な音と青い光が放たれ、それを至近距離でくらった猫は目を回して気絶した。

「やった、大成功！　さすが翔波！」

猫に続いて正倉の屋根から飛び下りてきた綺理が、手を叩いて歓声を上げた。その隣に下り立った冬惺も、猫から巾着を取り上げつつ言う。

「術の発動がまた速くなったな。おまえが正三位乾術師の昇級試験に、賄賂も口添えも脅迫

も裏技もなしに合格したというのを、ようやく信じられそうだ」

「そりゃどうも。綺理が無邪気な分、君の褒め言葉は毒にまみれて聞こえるね。たまには普通に褒めようよ冬惺。従者の手柄を素直に賞賛できるってのも、良い主人の条件じゃないか」

翔波は冬惺の従者だが、こちらも幼なじみの気安さでさらりと切り返す。その足元で、碁石から出てきた淵妖たちが地面に吸い込まれて消えていった。

彼が先ほど使ったのは、乾ノ術の一種、使役術。

乾ノ術とは、乾いた世界である天上から詠唱によって乾ノ力を得て、さまざまに行使する術のことをいう。炎を生み出し、雨や霧を晴らし、人の世界に悪影響を及ぼす湿ノ力を払い、その湿ノ力の塊ともいうべき淵妖を退治する術だ。

使役術は言うなれば淵妖退治の応用。骨董品に憑くような力の弱い淵妖に、「力を貸すなら退治しないで淵海に戻してやる」と取り引きを持ちかけ、彼らを短時間使役するのである。

この大地は淵海の上に浮かんでいるので、役目を果たした淵妖は、地面にしみこむようにして故郷の泥の海に還っていく。

「冬惺もありがとね。猫を傷つけないですむ作戦を、わざわざ考えてくれて」

綺理は失神した猫を抱き上げてにっこり笑った。

ただ巾着を取り返すだけなら、待ち伏せなどせずとも猫めがけて乾ノ術を放てば事足りる。あえてそれをしなかったのは、猫に大火傷を負わせないためだ。

「その猫だけど」
突然、翔波が硬い声を出した。彼の片眼鏡が、昼の日差しを受けて鋭く光る。
「――淵妖に操られている」
綺理と冬惺の表情がこわばった。

王都、輪瑛は平和だ。
多くの寺院が建ち並び、乾ノ力に満ちあふれた街はどこもかしこも乾いている。
淵妖は体が乾くと滅びてしまうので、王都には近づこうとしない。淵妖憑きの物品が外から持ちこまれることはあっても、勝手に暴れ出すことはない。
――それが、ほんの少しずつ綻びはじめている。

「……確かか、翔波？」
冬惺が低く問い、翔波が彼の手の中の巾着を見つめてささやく。
「うん。その中の、市で買った螺鈿の帯留めに淵妖が憑いていたんだ。泥の姿のまま動けるほど強い淵妖じゃないから、猫を足代わりにする気だったんだろうね。見たから間違いない」
瞬間。
冬惺の琥珀の瞳が、ほんのわずか、痛みをこらえるように細められる。

十年近く前から彼を知る綺理でなければ、まず見逃していたほどのかすかな動きだ。綺理は彼の硬質な横顔を見つめ、猫を抱く腕に力をこめた。

（冬惺……やっぱりまだ自分ばかりを責めてる。七年前のあれは、私たち三人みんなの意思でやったことなのに……）

「乾ノ力の強い王都でこんな……くそ、昔より限界が来るのが早まっているのか……？」

「ね、冬惺。それはまた後で考えよ？　今はほら、帯留めに憑いてる淵妖をなんとかしないと。操られたままじゃ、猫がかわいそうでしょ？」

苛立たしげにつぶやく冬惺を、綺理は急いでさえぎった。駄目押しするように「ね？」と微笑んでみせると、冬惺はふっと息を吐き、巾着から問題の帯留めを出した。

「……そうだな。これごと斬るにはもったいないし、翔波、任せる」

三人の中で乾術師なのは翔波だけだ。綺理も冬惺も、中級貴族である鏡作家の翔波よりずっと高貴な家柄の出なので、潜在的な素質は高いはずなのだが、初歩的な乾ノ術すら使えない。

――否。正確には、綺理には一つだけ行使できる術がある。

しかしかつてその術で大惨事を引き起こしたことを思うと、気軽にもう一度試すわけにはいかない。また、その術にまつわる特殊な事情により、綺理は対外的には乾ノ術を使えないことにしていた。

「わかった。依代から落として退治するから、人が来ないかだけ見張ってて」

翔波は乾ノ術の効果が上がるよう日なたに立った。綺理が猫を地面に下ろして見張りにつくのを確認すると、帯留めを手に、すっと息を吸う。

「天に坐すは乾ノ眷属、海に棲まうは湿ノ眷属、地上に在るは人の生。これ即ち万物の理なり」

翔波の手のひらで帯留めが震え、紺碧のもや――淵妖があふれ出る。

「理から外れしものよ、理を知れ」

パキン、と土器を砕いたような音がした。

流動的に動いていた淵妖が宙で固まり、ざらりと砂になって崩れる。

滅びた淵妖の残滓が乾いた風にさらわれていくのを見送って、翔波は真剣な顔で綺理に向き直った。淵妖の隠形を見抜く特異な力を秘めた右目を、片眼鏡ごしに示して言う。

「綺理、これからはできるだけ僕たちと行動を共にしてくれないか？　一緒にいれば、もしまた淵妖が現れても僕がすぐに見つけられるから、君を守りやすい」

「う、うん。……私だけだもんね。一人じゃ淵妖をなんとかできないのは」

しゅんとした綺理の頭に、冬惺がぽんと手のひらをのせた。

「ああ。だから遠慮なく守られていろ。俺と翔波がいれば、並の淵妖ごときに危害を加えられる心配はない。……警戒すべきなのは、むしろ人間のほうだ」

綺理と翔波は、冬惺の硬い顔を同時に見やった。

「淵妖が現れ次第すぐに対処して周到に立ち回らないと、俺たちのまわりに淵妖が集まってきていることがばれる」

低い声に、再び空気がずんと重くなる。

目を覚ました猫だけが、どこ吹く風とばかりにのん気に伸びをしていた。

王都、輪瑛は平和だ。

――その平和を保つためには、ここにいてはならぬ者たちがいる。

綺理の正式な名は、玉造の綺理という。

莫大な所領を有し白桜王家とも縁続きにある大貴族、玉造家の次女である。

そんな高貴な出自の割に綺理が深窓の姫君に程遠いのは、北部の田舎育ちだからだ。

現在、輪瑛の玉造邸に仕えている家人も、北部の玉造の里にいた頃に綺理のおてんばぶりに慣らされた者が多いため、公的な場でさえ姫君らしくしていればあまりうるさくは言わない。

なので綺理が屋形車や馬を使わずに徒歩で帰宅しても、家人たちはさして驚かずに出迎えた。

「お帰りなさいませ、姫さま。おや、これは冬惺さまに翔波どの！　よくぞいらしてください

ました。今宵はこちらにお泊まりになりますか？」
「ああ。悪いな、先触れもせずに押しかけて」
冬惺が顔見知りの家令に声をかけると、彼は微笑んで丁重に一礼した。
「なにをおっしゃいます。王弟にして護国大将軍にあらせられる御方の前に、閉ざす門などございませんとも。それに冬惺さまは、玉造家のご家族にも等しい御方ではありませんか」
冬惺は白桜家の三兄弟の末っ子で、長兄春怜の即位にともなって九年前に王弟となった身だ。しかし南部出身の白桜王家は北部での勢力基盤が弱い。そこで北部とのつながりを強めるための布石として、冬惺は綺理や従者の翔波共々、玉造の里で育てられたのである。
よって玉造家の家人は、王弟が突然訪問しても大騒ぎしないでくれるので、密談しに集まった身としてはありがたい。綺理たち三人は離れの部屋にこもり、抑えた声で話しはじめた。
「……王都に住みはじめてから一年、か。もう少し長くいられると思っていたが……」
「今までの経験からすると、最初の兆しがあってから半月が限度だよね」
翔波が片眼鏡の銀鎖をもてあそびながら言った。なんの限度かは、問うまでもない。
（私たちがここにいられるのは、長くてもあと半月……）
綺理たち三人は七年前、あることをきっかけに少量ながら湿ノ力を放つ体質になった。
ゆえに一所に長期間とどまっていれば周囲に淵妖が集まり、災いが起きてしまう。今回は妙に早かったが、今までなら一年半から二年で最初の異変が起きていた。そして、それでもなお

その地に居続ければ、おそらくそこは湿ノ力が強まりすぎて泥の海と化す。
「……でも冬惺。急いでよそに移るにしても、護国大将軍が王都を離れて平気なの？」
「当面は戦の気配がないからな。俺がいないだけですぐに実務が滞るような無能な部下は使っていないし、俺のほうはどうとでもできる。――それよりも、おまえたちだ」
冬惺の声の調子がわずかに変わったのを感じ取り、綺理と翔波は瞳を翳らせた。自分たちはこの声を知っている。この声に続くやりとりを、もう何度も繰り返してきた。――今もまた。
「せっかく王都に落ち着けたのにまた……すまない」
咎人のような声で言う冬惺に、綺理は胸がぎゅっとしめつけられた。
（そんなこと言わないでほしいのに。……そんな辛そうな顔、しないでほしいのに）
腕を組んで壁にもたれている彼を、綺理はまっすぐに見上げる。
「そんなの冬惺が謝ることじゃないよ。それに私、三人一緒ならどこに行ったっていいもん」
力をこめて断言すると、冬惺の目許がほんの少しやわらいだ。
「同感。僕は冬惺の従者だから、なにがあろうと君たちについていくまでだし。だいたいさ、災いが起こる前に三人で王都を出ようっていうのは、一年前から決めていたことじゃないか」
「翔波の言うとおりだよ。それにほら、移動するっていっても、前までと違って兵に追われながらの逃避行じゃないでしょ。冬惺のおかげで瑛国もずいぶん平和になったから」
一年前まで、瑛国には内乱の嵐が吹き荒れていた。白桜と紅楓――金蘭王家から分かたれた

二つの王家の勢力が各地でしのぎを削り、一時は玉造の里も危険にさらされた。そのため綺理たち三人は、紅楓の手の者から逃れるために何年も地方を転々としていたのである。

そんな内乱に事実上の終止符を打ったのが、当時十六歳の冬惺だ。

冬惺は劣勢に立たされていた白桜の陣容を立て直し、王都に攻め上ってきた紅楓の軍勢を完膚なきまでに打ち破った。その戦功により、彼は武官の最高位、護国大将軍に叙せられたのだ。

――出生に関する疑惑のせいで上級貴族からはなにかと疎まれている冬惺だが、兵や民の間では常勝将軍として人気が高い。

「旅なら慣れてるし、私も剣の稽古を続けていたから体力には自信あるし、地方に行けば珍しい植物とか食べ物とか景色とか王都にはない楽しみも……って、だから、その、私はいいの。住めば都っていうけど、私にとっては冬惺のいる場所が都だから。心配なのは、ただ、冬惺のほうが王都を出るの嫌なんじゃないかなって……」

必死に言い募る綺理の頭を、冬惺は礼を言うように優しくなでた。ごく親しい者にしか見せない、作り笑顔ではない穏やかな笑みを浮かべる。

だが綺理がときめく間もなく、彼はいつもの意地悪な口調に戻って言った。

「そうでもないさ。俺も王宮の馬鹿どもと相手に腹芸合戦するのは飽きてきたからな。だがな、綺理。おまえの言い方だと、単に物見遊山気分で浮かれている能天気娘のようにも聞こえるぞ。もう少し賢そうに装える言い方を考えたほうがいい」

「……冬惺もひねくれてるのがばれない言い方を考えたほうがいいと思うの。――て、なんでいきなり髪をぐしゃぐしゃにするのよ！」

金髪をかき回す手を止めようとじゃれあっていると、翔波が声を立てて笑った。

空気がふっと明るくなる。根本的なことはなにも解決していないけれど、それでも綺理は冬惺が自然に笑顔をのぞかせるのを見てほっとした。そうなると王都を離れる算段について相談するのも、昔三人で遊びの計画を立てたときのようで、不謹慎だけど少しわくわくする。

――このときはまだ思いもしなかったのだ。次の異変が、あれほど早く起ころうとは。

翌日の暮れ方、綺理たちは輪瑛の職人町の小路を歩いていた。

冬惺が休みを取って出歩けるうちに旅支度をしようと、朝からあちこち回っていたら、夕方になってしまったのだ。斜陽に赤く染まった白砂の上に、三人の影が黒く長く伸びている。

「……一応聞くが、綺理、おまえはさっきの薬屋でいったいなにを買った？」

裏通りの薬屋から十分遠ざかったところで冬惺に問われ、綺理は指折り数えた。

「えっとね、乾宝薬を十七種類と水薬を三種類。二割が傷薬の材料で、一割が解毒剤かな」

乾宝薬とは乾燥させた薬の総称だが、王都でないと手に入りにくい種類のものが多い。今の



うちにとあれこれ買ったので、綺理の腰の大ぶりの巾着はぱんぱんに膨らんでいる。
少年二人はなんともいえない顔になった。再び冬惺が口を開く。
「……残りの七割は」
「毒」
花が開くような笑顔で綺理が答えると、翔波がなにもないところでつまずいた。
「……っ、君の独特な趣味は僕らもよく知ってるつもりだけど、せめて嬉しそうに言うのはやめないかい!? まったく、なんで君はそんな物騒なものに興味を持っちゃったんだよ……」
「え？ だって、毒って浪漫があるじゃない」
普通に答えたら、二人から生ぬるい目で見られた。微妙に身を引かれた気もする。
「もちろん猛毒を実際に使ったりはしないわよ。でも、これと同じ毒で古代の征服王が倒れたんだなーとか、百年前のあの武将の暗殺に使われたのは症状の記録からしてこの毒かなーとか、この丸薬一つが凄まじい威力を持ってるんだなーとか、想像の翼が羽ばたくでしょ？」
語っていたら心が浮き立ってきた。綺理はつい目を輝かせ、翔波に迫る。
「それに猛毒を毒見木の根に吸わせると、効能に応じて葉っぱとか幹の形が千変万化するのよ。なんだか素敵じゃない？ 薬の名前も、龍鱗石とか月狂人参とか、聞くだけで、字面を見るだけで心が躍らない？」
「なんで僕にだけ同意を求めるんだよ。さりげなく失礼じゃないか!?」

「だって翔波も骨董品を見ると目を輝かせるから、通ずるものがあるでしょ？」
「ない！　僕が骨董品を集めているのは淵妖を封じる器に使えるからだし、骨董好きはまっとうな趣味だろ。見た目が乾燥コウモリな気色悪い薬に浪漫を感じるのとは次元が違う！」
「あのコウモリの干物もどきだって貴重な乾宝薬なのよ。擬蝙蝠といって、幻覚――」
作用が、と続けようとしたときだった。
聞こえた。
〈キリ〉
はっと、綺理は棒立ちになった。様子を察して立ち止まった冬惺の袖をつかむ。
「空耳、だったかもしれないけど、近くにいるのかも」
淵妖、と口の動きだけで伝えると、冬惺と翔波が一様に険しい顔になる。
「待って、今ちゃんと聞いてみるから」
小声で言って、綺理は目を閉じた。聴覚に集中し、感覚を研ぎ澄ましていく。
ねぐらに帰る鳥の声、家路を急ぐ人々のざわめき、貴人の乗る屋形車を引く馬のいななき。
――それらの音が、ある瞬間を境にふっと消える。
外界の音が聞こえなくなった代わりに、綺理の耳にはこの世ならぬものたちの声が届く。
〈クルヨ〉〈クルヨ〉〈追ッ手ガクルヨ〉
ささやく声は、弱く小さな淵妖たちのもの。人には聞こえぬはずの彼らの声を、綺理は七年

前のある日を境に聞けるようになった。集中していれば、かなり遠くの声を拾うことも可能だ。
（この小淵妖たちがいるのは輪瑛の市壁の外ね。それにしたってずいぶん近い……）
〈アイツナラ捕マエラレルカナ〉〈捕マエロ〉〈捕マエロ〉
〈あいつって誰？〉
淵妖の声を真似て会話に紛れこむと、小淵妖たちはこちらが人間だと気づかずに応じる。
〈追ッ手ダヨ〉〈強イヨ〉〈強イヨ〉〈――キタヨ〉
だしぬけに小淵妖の声が遠ざかり、ひと際禍々しい吠え声が西から近づいてきた。
〈――逃ガサヌゾ、逃ガサヌゾォッ！〉
憎しみのこもった咆哮にぞくりとして、綺理は耳をふさいだ。実際にはふさごうと思っただけで淵妖の声がかき消え、街の喧騒が戻ってくる。
「強いのが近づいてきてる。西――西海門！」
抑えた声で叫び、綺理は走り出した。後ろには当然のように二人の足音が続く。
（こんなに次々に淵妖が現れるなんて、冗談じゃないわよ！）
進行方向から聞こえてきた喚声に、綺理は唇をかんだ。
災いを招いているのが自分たちならば、自分たちで片をつけなくてはならない。
それが綺理たちに課せられた義務で、――きっと、罰なのだろう。

輪瑛五大門の一、西海門の門前広場に、非常事態を告げる銅鑼の音が鋭く鳴りわたる。
「閉門！　閉門！」
櫓門の上にいる門衛が叫び、鉦の打たれた大扉がゆっくりと閉められてゆく。
門の外、夕暮れの西海道を必死に走ってくる旅人たちは、その光景に半狂乱になった。
「ひいっ、ま、待ってくれ！」
「お助けを！　閉めないでくれ！」
彼らの背後には、熊に化けた大きな淵妖が迫っていた。闇が凝ったような異形の熊は、不ぞろいな六本の足をべちゃりべちゃりと動かして旅人の一群を追いかける。
不意に、人々の最後尾にいた若い男が転んだ。幼い子供を背負い、負傷した足を引きずって走っていた男だ。彼は迫りくる淵妖に恐怖の声を上げ、せめてもと子供を抱えこむ。
綺理たちが西海門に駆けつけたのは、まさにそのときだった。
「突破する！　綺理は人々を、翔波は淵妖の牽制をしろ！」
冬惺が短く指示を飛ばし、三人は半ばまで閉ざされた門を一息に駆け抜ける。
「おまえたち、なにを……っ」
「私は玉造の綺理です！　私を外に出したまま閉門できるものなら、やってみなさい！」
振り返りざま、綺理は威圧的に叫んだ。瑛国屈指の大貴族、玉造家の名に門衛がひるむ。

広場にいる群衆からも、「玉造の姫!?」「では陛下の従妹君の……」というどよめきが漏れ、閉じかけていた大扉が止まった。逃げてきた人々は、希望に目を輝かせてそこに殺到する。

彼らとすれ違いながら、翔波がありったけの碁石を淵妖めがけて投げた。

「天滅還海！　障せよ！」

しかし今は日暮れどき。太陽から来る乾ノ力が弱まり、術の効力も落ちている。「天に滅ぶか淵海に還るか」の脅し文句に応じず、碁石に宿ったまま沈黙を保つ淵妖も多かった。

それでも五、六の紺碧のもやが碁石から噴き出し、転んだ男の頭上で障壁となる。淵妖の太い足が、男の背にかかる寸前で弾き返された。

障壁はすぐさま地に消えたが、淵妖は綺理たちの存在に気づいてか、大きく後ろに退く。

冬惺と翔波がすばやく淵妖の前に立ちふさがり、綺理はへたりこんでいる男に駆け寄った。

「あなた、こんな怪我で走ってたの？　動かないで。今、止血するから」

懐から手袋を出し、甲に刺繍されている薬師の紋を見せながらはめる。薬師の位自体は、毒薬調合という趣味が高じてとったものだが、相手に治療の腕を信用させるには便利な品だ。

てきぱきと手当てを始めた綺理に、男は抱えていた子供を焦った様子で差し出した。

「き、君っ、そんなことよりこの子を！」

「その子？　首筋に桔梗形の黒斑、典型的なオカトトキ病の症状ね。ぐったりしているけど一刻を争うものではないし、後でよく効く乾宝薬を処方してあげるから心配ないわよ」

「違う！　この子を連れて早く逃げろ！　日が沈んだら乾ノ術は使えなくなるんだぞ！」
そう言う男も乾術師のようだった。男の懐からのぞく組み紐からは、従五位――十段階の最下位の乾術師であることを示す、滑石製の大ぶりな丸玉が下がっている。
「だ、駄目だ。もう日が……っ」
乾術師の男は西の空を見て時間切れを悟り、顔を絶望に歪めた。――そこに。
「大丈夫」
綺理の落ち着いた声に重なって、太刀の鞘を払う澄んだ音がした。
「冬惺が使うのは、乾ノ術じゃないから」
いぶかる乾術師に背を向けたまま、冬惺が静かに太刀を構える。残照が彼の端整な横顔を照らし、太刀の刃を鋭利にきらめかせた。
「来るがいい、理から外れた泥の化け物」
冬惺が挑発するように言い、日没時を待っていた淵妖が濁った声でうなる。
六本足をうごめかして突進してくる異形の熊に、綺理たちの背後で悲鳴が上がった。
全員、淵妖に踏み潰される――。乾術師の男、門衛、門内に逃げこんだ旅人たち、広場の群衆、その誰もがそう思った瞬間。
淵妖の巨体に白い光が走った。
目にも留まらぬ速さで振り下ろされた白刃が、淵妖を縦一文字に斬り裂いたのだ。

異形の熊は綺麗に左右に割れ、綺理たちの脇へそれて街道の側溝に突っ込む。
「淵妖を、斬った……!?」
泥を斬るという神業に、観衆の間に衝撃が走った。愕然とした人々の視線の先で、冬惺は一陣の風のように駆ける。
半分の体で起き上がった淵妖。その片一方との距離を一気に詰め、薙ぎ払う。続いて冬惺は体をひねり、真後ろから迫ったもう半分の淵妖をも斬り伏せた。
四つに刻まれて弱体化した淵妖は、輪瑛から吹く乾いた風に怯えて散り散りに逃げていく。一拍置いて、呆気にとられていた観衆から爆発的な歓声が上がった。
「お見事。でも少し目立ちすぎたね」
喝采を背中に聞いて、翔波が口笛を吹いた。冬惺は刀身にからんだ泥を払いながら、彼を軽く睨む。
「言うな。反省はしていないが、後悔はしているんだ」
「まあ、目立ちたくないっていうなら私が名乗った時点で手遅れだったと思うけど……」
乾術師の応急手当てを終えて立ち上がった綺理に、冬惺は渋い顔で群衆を示した。歓声の波が引いた門前広場には、先ほどまでとは別種のざわめきが広がりつつある。
「おい……淵妖を斬れるほどの剣の腕って、まさか……」
「玉造家の二の姫様がご一緒におられるということは、本当に……」

「いや、だけど違うだろ。金髪じゃないから……」
「馬鹿、知らないのか。将軍閣下は王族でも髪は黒なんだよ」
「え!?　おい、将軍ってまさか、あの将軍閣下か？　去年、紅楓の軍勢が攻めてきたときに輪瑛を守ってくださった、あの!?」
　ささやきがどよめきに変わり、人々が次々に跪いていく。集まってきた野次馬がその人垣をさらに厚くしていく光景に、冬惺は辟易とした様子でぼやいた。
「だから面倒なんだ。なまじ顔が売れたり、噂に尾ひれがついて泳ぎだしたりしたら、道を歩きにくくなるしな」
「確かにね。綺理、その点は君も他人事でないんじゃないかい？　高貴な方々は大変だね」
「う、そうだった。さすがに輪瑛でまでおてんばの噂が広まったら、玉造家領にいるお父さまにも連絡がいくよね。うわー、大目玉食いそう……」
「安心しなよ。もしそうなったら、僕たちも綺理と一緒に怒られてあげるから」
　三人が小声でそんな会話をしている間にも、門内ではざわめきが波及していく。群衆の間で交わされる言葉の一部は、乾術師の男の耳にも届いたのだろう。彼はぽかんと開けていた口をがくんと閉じ、おそるおそるといった風情で冬惺を仰いだ。
「あ……あの、将軍閣下とは……もしや……」
　冬惺はため息をつき、太刀を鞘に収めて短く名乗る。

「白桜の冬惺」

白桜。二つに分かれた金蘭王家の片方にして現瑛国王の家名に、乾術師はぴきっと音を立てて固まった。そこに、翔波が従者としての口調で言い添える。

「こちらの御方は、瑛国王春怜陛下の弟君にして護国大将軍、冬惺公閣下にあらせられる」

「――――た、たたた大変失礼をいたしましたあっ！」

ようやく現実感を取り戻したのか、乾術師は勢いよく頭を下げた。そればかりでなく、文書用の竹筒を冬惺に差し出してまくしたてる。

「さらなる無礼を承知でお頼み申し上げます、将軍閣下！　私は白桜の忠実な臣であります木取家の者。このたびは慈悲深き陛下に、淵妖に襲われた里をお救い願いたく、木取の里よりはるばる参りました。なにとぞこの書状を陛下のお目にかけてくださりますよう……！」

淵妖。その単語に綺理はぎくりとした。横目で冬惺をうかがうと、彼はすっと表情を消して嘆願書の納められた竹筒を受け取った。

「わかった、必ず兄上のもとに届くようはからおう。どの道、この騒ぎの顛末を報告しに行く必要があるからな。――そういうわけだ、綺理、翔波。このまま王宮へ向かうぞ」

遅れて西海門に到着した兵に、木取の乾術師と病気の子供を施薬寮に運ぶよう命じ、綺理たちは屋形車で野次馬の群れを抜けて王宮へ入った。しかし平服のままでは王宮内を歩き回れない。さしあたり嘆願書を侍従に託し、三人は冬惺の使っている殿舎へ服装を改めに行った。

――それが一刻ほど前のこと。

綺理は王宮仕えの侍女によって、念入りに着飾らせられていた。

長い純白の裳に、紅系の紗の上衣を淡色から濃色まで何枚も重ねた、優美な衣裳である。帯は幅広のものと細いものを重ねて締め、組み紐と白玉をあしらう。首飾りは水晶製。結い上げた金髪を飾るのは、銀糸の組み紐と紅玉髄の玉だ。

（公式の謁見じゃないんだし、こんなに気合い入れることないと思うのにな。……でも、ちょっと派手だけど綺麗……よね？　そういえば冬惺に正装姿を見せるのって久しぶりだし……）

これから深刻な話をするのだとわかってはいるものの、綺理はついそわそわしてきた。そして案内された王の私的な客間へと足を踏み入れ、――固まった。

「やあ、しばらく会わないうちに一段と綺麗になったね、我が麗しの従妹姫。紅の薄様の衣を可憐にまとった君の姿は、まるで花の天女が地上に舞い降りたようじゃないか」

無駄にきらきらしい長身の青年、もとい、瑛国王春怜が腕を広げて立っていた。

白桜の春怜――冬惺の十歳上の兄。金蘭王家の特徴である金髪と琥珀の瞳を兼ね備えた彼は、その瞳の色以外、冬惺と似たところがない。冬惺の整った面差しが冷たく静かに感じられるの

に対し、春怜の甘い美貌には、いるだけでその場が華やぐような派手さがある。
なによりも冬惺と違うのは、この王が自他ともに認める女好きだということだ。
いつものことながら延々と続く美辞麗句に、綺理が反応できずにいると、春怜の背後で席を立つ音がした。黒と深紫の武官礼装に身を包んだ冬惺が、二人の間に割りこんでくる。
「兄上、冗長で寒いだけの挨拶はもう切り上げてください。聞くに堪えません」
末弟の容赦ない台詞を、春怜は「やれやれ、無粋だな」と慣れた様子で受け流した。
「冬惺、おまえがそっけなさすぎるのだ。おまえは美しく着飾った女性を前にして、『綺麗だね、よく似合っているよ』の一言くらい言えないのか？」
「言えません。俺は正直者ですから」
（ひ、ひどい。そりゃお世辞を言わない人だって知ってるけど……）
にべもなく答えられて綺理は傷ついたが、冬惺の言葉には続きがあった。
「綺理によく似合うのは紅ではなく緑か萌黄です。俺が見立てればもっと綺麗になりました」
（……！）
現金なもので、綺理の心は一瞬で浮上した。冬惺の言動にいちいち一喜一憂させられて、自分でも馬鹿みたいだとは思うが、こればかりはどうしようもない。
「ほほーう、見ていないようで実はよく見ているな。なるほどなるほど」
「なにがですか兄上。変な笑い方はやめてください。――全員揃いましたし、始めますよ」

その言葉を皮切りに綺理たちは席につき、西海門での一件について話しはじめた。
もっとも説明役は冬惺のみで、綺理はほとんど椅子に座っているだけ。浅縹の文官服に着替えた翔波は、人払いのされた部屋の中、立ったまま黙々と給仕をしている。
一通り聞き終えると、春怜は閉じた檜扇を顎に当て、憂えげに眉をひそめた。
「そうか、仮にも王都の門外で淵妖騒動とはな。……実に見たかった」
悔しそうにうなずきながらの感想に、冬惺が円卓の反対側から冷ややかな視線を送る。
「俺も残念です。もし兄上があの場にいたら、色ボケ馬鹿王が淵妖に蹴り飛ばされて宙を舞う様を楽しく見物できたでしょうから」
「おいおい冬惺、私は自慢の弟の勇姿を見たかったのだぞ。先に蹴られてしまったら意味がないだろう。で、どうだい、綺理。私の弟は恰好よかったかい？」
「それはもちろん――って、陛下！　私たちはそんな話をしにきたわけじゃありません！」
うっかり本音を漏らしかけた綺理は、照れ隠しの意味もこめて慌てて叫んだ。茶のお代わりを注いでいた翔波にくすりと笑われたが、冬惺の手前、平静を装う。
「ふふ。陛下なんて他人行儀だね、綺理。お義兄さまと呼んでくれてもかまわないのに」
「綺理、名前も頭も常春な男のたわ言にかまうな。兄上、まともな会話をする気がないのなら俺たちは帰りますよ。報告の義務はもう果たしましたから」
そう言って本当に席を立ちかけた冬惺を、春怜は「まあ待て」と真面目な声で制した。

「おまえは木取の嘆願の件が気になっていたから、わざわざ口頭で伝えにきたんだろう。そう急かさずとも話してやる。――鏡作の、君も座れ。許す」

家名で呼ばれた翔波が、一礼して空いた椅子に腰かける。改めて四人で円卓を囲むと、春怜は檜扇を二、三度開いたり閉じたりし、おもむろに切り出した。

「実を言うとだな、木取家の所領に限らず、一月ほど前から北部一帯で異変が起きているとの報告が寄せられている。ああ綺理、お父君の玉造家領は無事だから安心をおし」

彼は綺理を見てそう付け加えたが、安心している場合ではない。綺理は瑛国の地図を思い浮かべ、春怜が指折り挙げていく地名を当てはめてみた。

（……嘘、けっこうな範囲じゃないの。少なくとも十七家の所領にまたがってるわ！）

それだけの地域でなにが、と青くなった綺理の隣で、冬惺がすっと目を細めた。

「そんなことだろうと思っていましたよ。最近、王宮内が妙にあわただしいですから。俺に情報がまわってこなかったということは、乾術師の職分にかかわる異変ですね？」

春怜は首肯し、酒杯をかたむけながら詳しく語りはじめた。

現在、北部の一帯では湿ノ力が急速に強まっているのだという。

――この地上において湿ノ力が強まるとは、滅びと同義。日用品が一晩で腐ったり錆びたりすることに始まり、倉の穀物に黴が生え、農作物が根腐れして枯れ、病が蔓延し、家々を苔が覆いつくし、地面が泥沼に変わっていく。

既に十以上の村がそうして滅び、なお多くの村々が同様の危機に瀕しているらしい。
「そこにきて例の木取の嘆願書だ。先にざっと目を通したがなかなか壮絶だったぞ。湿ノ力に侵されて里の者がばたばた寝ついたところに、淵妖が大挙して押し寄せたらしい」
綺理は木取の乾術師が連れていた子供を思い出し、はっとした。オカトトキ病は湿ノ力が強いところで流行する病気だ。乾宝薬を使うか、乾燥した場所で静養する以外に治療法はない。
「普通はばらばらで行動するはずの淵妖が、集団になって一所を襲う。淵妖が人間を追って輪瑛に近づく。どちらも通常では考えられんことだ。ゆえに私は――」
澄んだ音を立てて酒杯を卓に置き、春怜はその言葉を口にした。
「《契約者》が現れたのでは、と考えている」
「――――っ！」
綺理と、冬惺と、翔波。息をのむ音が三つ重なった。

《契約者》。それは己の欲望のために強大な淵妖を地上に放った、業深き者のこと。
――本来、淵妖は淵海に在るべきもの。それが地上に来るというのは世の理に触れる。理を大きく乱すことになるからか、あまりにも力の強い淵妖は地上に上がることができない。もし上がれたとしても、姿を保っていられずすぐに淵海に戻ってしまうのだという。
そうした大淵妖を淵海から招き寄せ、地上で姿を保つすべを与える。その代償として大淵妖

に己の願いを叶えさせる。そんな呪われた《契約》を結んだ者が、《契約者》である。

「……でも、私、それはおとぎ話だと思ってました。だって……」

綺理は膝の上で拳を握り、なんとか無難な言葉をしぼり出した。冬惺が続きを引き取る。

「……兄上。《契約》の方法は、遥か昔に失われたとされていますよね？」

「建前上はな。だが、どこかで今も密かに伝えられている可能性は高いぞ。なにより、《契約者》が現れて意図的に北部の異変を起こさせているものと考えれば、状況にぴたりと合う」

伝承いわく、《契約者》が現れた村は泥に沈む。大淵妖は他の淵妖を集めて手下として使う。大淵妖は非常にずる賢く、人に化けて世を乱す。

「西海門に淵妖が現れたのも、木取の乾術師の口を封じるためだったと私は見ている。もし嘆願書が届かなければ、異変の裏に《契約者》や大淵妖がいようとは思いもしなかったからな」

まったく愉快な話だ、と春怜は心底不愉快そうにぼやいた。それから、綺理たち三人の顔色がよくないのに気づいたのだろう。統治者の顔から兄や従兄の顔に戻り、明るく言った。

「そう心配するな。おまえたちが昔過ごした玉造の里は、木取の里からはだいぶ離れている。北部の異変も、いずれ乾術師の大部隊を派遣すれば解決に向かうだろう。――もし本当に《契約者》がいたとしても、すぐに捕まって処刑されるさ」

快活に笑う王に、綺理たちは「そうですね」と作り笑顔で応じた。そして三人はその演技を、

王の客間を辞し、玉造家へ向かう屋形車に乗るまで続けたのだった。

扉を開けた途端鼻腔をくすぐる、乾いた薬の臭い。引き出し一つ一つに薬種の名が書かれた薬箪笥。作業台にのせられた調剤器具と生薬。梁から所狭しと吊り下がる草や根や木皮。薄暗い蔵の中を見回して、幼なじみの少年たちは口々に言った。

「毒蔵だね、これは。どう見ても」

「この蔵一つで王都を滅ぼせそうだな」

「失礼ね。薬になる物だってあるのよ。あ、そのへん素手で触らないでね。猛毒だから」

注意する綺理のほうは、この蔵に入るときの常で、細袖の上衣に前掛け布という薬師の作業服に着替え、手袋をはめている。

この蔵は玉造邸の隅にある綺理の薬房だ。本当は素人を薬房に入れるのは褒められたことではないのだが、危険度の高すぎる密談をするにはここ以上の場所はない。なにしろ壁が厚くて声が外に漏れにくい上、蔵の内容物を知る家人は絶対に近づこうとしないのだ。

ここにある鉱物薬の中には、引火すると激しく炎を上げる種類の物もあるので、綺理は気をつけて灯明台に火を移した。そして扉を閉め、かんぬきをかけると、いきなり本題に入る。

「――ねえ、春怜陛下の言っていた《契約者》のこと、どう思う？」

冬惺は腕を組んで薬簞笥にもたれかかり、言葉を選ぶようにゆっくりと答えた。

「それについてはあいつに確認しなければなんとも言えない。だが北部の異変を起こしているのが誰であれ、俺たちが早急に王都を離れねばならないということに変わりはないんだ。まずは予定通り王都を出る算段をつける。どうにかしてあいつを呼び出すのは、それからだ」

「だけど三人一緒にっていうのは難しくなったね。僕はお偉方にとってはいつ死んでも困らない鏡作家の生き残りで、しかも正三位乾術師だ。きっと北部に派遣される乾術師の一人に」

「させない」

ため息混じりに言う翔波を、冬惺が遮った。

「おまえは俺の従者だ。俺の許可なく派遣などさせるものか。誰がなんと言おうとな。――どんな状況になろうと、おまえと綺理だけは俺が守る」

反論を許さぬ口調で彼が言い切った、直後。

「相変わらず必死だな、少年は」

からかうような声が降ってきて、三人は弾かれたように顔を上げた。

隅の大きな薬簞笥の上に、いつのまにか一人の少年が座っている。年の頃は十ほど。帯からひょうたん水筒を下げているのを除けば、良家の子息のような雅やかな身なりだ。

うなじで一つに結われた髪は、金と銀が一房ずつ交じったつややかな黒。瞳は鮮やかな翡翠



色で、空恐ろしいほど整った完璧な美貌には、童形にそぐわぬ老成した表情が浮かんでいる。
「真羅！」
「お久しゅう、玉造のキリ。少年と従者も、顔を合わせるのは一年ぶりだ」
友好的な笑みを見せた神出鬼没な少年に、冬惺が冷たく問う。
「ずいぶんとはかったような頃合いで現れたな。いったいなにを企んで来た？」
「いきなりご挨拶だな、少年。なにをもなにも」
彼は軽く肩をすくめ、薬簞笥の上からふわりと飛び降りた。そして、
「私が自分の《契約者》の様子を見にきてはおかしいのかね？　《契約者》諸君」
真羅――七年前に綺理たち三人と《契約》を交わした大淵妖は、そう言って悠然と笑んだ。

その旅人が玉造の里に来たのは、七年前――綺理が九歳になった年の夏だった。
春怜王治世二年。内乱が沈静化し、王弟の冬惺が玉造家で養育されていた頃のことである。
「これは……ずいぶんと立派な勾玉ですね」
薄汚れた旅装束の男は、自身の指先ほどの上質な翡翠の玉をしげしげと眺めて言った。

「マガタマ？」

「ええ、小姫君。獣の牙のように曲がっていて、丸く膨らんだところに孔が開いたこんな玉のことを、勾玉と言うのですよ。玉造の里でももう作られていないと思っていましたが……」

返された勾玉を受け取った綺理は、冬惺と翔波の三人で目配せし合った。

この珍しい形の玉を見つけたのは、里から少し離れた山奥の洞窟。大人たちからは近づくことを禁止されていた場所だった。そのため玉造家の邸の者や里の民には玉のことを質問できず、村はずれの道ばたで休んでいた旅人をわざわざ選んで聞いたのである。

子供たちのばつが悪そうな顔に気づいたのか、旅人は深くかぶった笠の下で小さく笑った。

「若君方がどこでこれを手に入れたかは聞かないでおきましょう。代わりに旅の語り部らしく珍しい話をしましょうか。――勾玉がなんの形を真似て作られたのか、わかりますか？」

「瑛国の形か？」

即答した冬惺に、旅人は正解とも不正解とも言わなかった。日陰の石に腰かけたままかたわらの低木の葉を二枚取り、勾玉の形にちぎる。

「今は昔、乾ノ神と湿ノ神は力を合わせ、天上と淵海の間に『地上』をお創りになりました。淵海の泥を乾かしてできた二つの島――北瑛島と、南晶島です」

旅人は足元の水たまりを淵海に見立て、二枚の勾玉形の木の葉を互いに点対称になるように浮かべた。綺理たちがしゃがんで水たまりを囲むと、彼は小枝を一本拾って木の葉を示す。

「ところが神々は地上をお創りになるのにたいそう疲れ果ててしまいました。そこで乾ノ神は眷属の乾ノ神衆に天上を任せ、南晶島のどこかで、湿ノ神は眷属の淵妖に淵海を任せ、北瑛島――この瑛国がある北瑛島のどこかで、それぞれ眠ってしまわれました」

綺理はあからさまにがっかりした。珍しくもなんともない、誰でも知っている国産みの物語だ。だがそれだけに、旅人の次の口上には興味を引かれた。

「勾玉はこの二島の形を模したもの、というのが表に伝わる物語。表があれば裏もある」

そこで旅人はぐっと声を落とし、思わず身をのり出した三人に秘密めかしてささやく。

「本当はこれは、――釣り針、なんですよ」

「釣り……針？」

綺理は手の中の勾玉を見下ろし、また顔を上げた。旅人と目が合う。

今までは笠に隠れていたが、微笑む旅人はまだ若く、ひどく美しい顔をしていた。澄んだ赤褐色の瞳にのまれたように見入っていると、旅人の形のよい唇が動いた。

「そうです。勾玉は釣り針、淵海からさだめを釣る針。榊の枝を釣り竿に、乙女の髪を釣り糸に、勾玉で釣りをなさいませ。月影さやかな望月の夜に、淵海に釣り糸を垂らしませ」

歌うように紡がれる言葉が、綺理の耳に染みとおる。

「さすれば善事が釣れましょう。良き運命が釣れましょう。いかなる願いも叶いましょう」

（願いが……叶う……）

ぼうっと聞いていた綺理は、しゃん、と鈴の鳴る音で我に返った。旅人が、十二の鈴がついた語り部の杖を地面についたのだ。隣では冬惺と翔波も夢から覚めたような顔をしている。

やがて冬惺が立ち上がり、綺理と一歳違いとは思えぬほど大人びた口調で言った。

「――なかなか面白かった。旅の語り部どの、今宵の宿を探すなら玉造家の邸に来られるがよい。白桜の冬惺の名を出せば、叔父上は快く招き入れるだろう」

頭を垂れた旅人をそのままに、冬惺は歩き出す。綺理と翔波も彼にならって立ち上がった。年少の二人が追いつくと、冬惺は肩越しに笑んだ。悪だくみを持ちかけるときの笑顔だ。

「翔波、次の満月はいつだ？」

「明日！　試してみるのかい？　また夜中に邸を抜け出す作戦を考えないとね」

翔波がにやりと笑い返し、綺理も声を弾ませる。

「私、榊の木があるところ知ってるよ。この前一緒に笹舟を作ったところから……」

「姫さまぁああっ！」

不意にあぜ道の向こうから侍女の声がして、三人はひゅっと首を縮めた。綺理付きの侍女が全速力で走ってきたかと思うと、綺理の腕をがっちりととらえて荒い息をつく。

「また男の子のようなりで出歩かれて！　さあ、お邸で箏の教師がお待ちかねですよ。……冬惺さまがたも、下々の子のように野山で遊ぶのはたいがいになさってくださいね！」

邸へとぐいぐい引きずられそうになり、綺理は焦った。遊ぶのもいたずらをするのもいつも

三人一緒なのに、今回だけ仲間はずれなんて絶対に嫌だ。不安になって二人を見た綺理は、冬惺が片目をつぶりながら襟紐の端を引っ張るのに気づき、ぱっと顔を明るくした。

——今のは、『後で森の奥の廃屋で落ち合おう』の合図だ。

後でちゃんと遊びの計画に加われるとわかると、綺理はおとなしく侍女についていった。歩きながら侍女がお小言を言うのもほとんど気にならない。——だいたい邸の大人たちは、二言目には「そんなにおてんばでは求婚してくださる殿方が現れなくなってしまいますよ」と言うけれど、綺理は冬惺以外の求婚者なんて欲しくもなんともないのだ。

（願い事、冬惺はなにを願うのかな。私は冬惺の願い事が叶うならなんでもいいけど……）

明日試す秘術のことを考えてうきうきと歩きながら、綺理はふと後ろを振り返った。

あの美貌の旅人が、杖の先で木の葉を水たまりに沈めている。そういえば彼の名も、彼がどこから来てどこへ行くのかも聞いていなかった。

——結局、彼は玉造の邸へは寄らず、その日のうちに街道のほうへ行ってしまったと聞く。

勾玉の形をした北瑛島には、紐を通す孔にあたる位置に、閉じた泥の海がある。内淵海だ。綺理たちの暮らす玉造の里は、内淵海の南東の岸からそう遠くないところにあった。

あかがね色の満月の夜、三人は密かに内淵海のほとりにやってきた。もちろんここも来てはいけない場所だ。淵海に落ちた人間は、二度と地上に戻ってこられなくなるのだから。

「――よし、できた。二人とも、願い事をなににするか決めたか？」
旅人から教えられた通りに釣り具を作った冬惺に、綺理と翔波は大きくうなずいた。
「うん！　冬惺こそ、土壇場になって願い事を忘れちゃだめよ」
「あはは。あったね。あのときは君が思い出している間に流れ星が流れちゃったんだっけ」
「この……うるさいぞ、おまえたち。ほら、ここ持て。――準備はいいな？」
岸辺に座って三人で釣り竿を握り、勾玉の釣り針を淵海に落とす。翡翠の輝きがとろりとした泥に消え、釣り糸にした綺理の金髪が月光を弾いて光った。
ほの赤い月光と神秘的な儀式に、いやが上にも期待が高まり、綺理はどきどきして待った。ほどなくして、榊の枝の釣り竿にかすかな震えが伝わってきた。三人が固唾をのんで見守る中、淵海の表面がゆらりと揺れ――、
突如、それが淵海を割って跳び出してきた。
紺碧の泥の化け物、淵妖。
――綺理の意識は、そこで途切れている。
勾玉は魔が玉、禍事を釣る玉。――大淵妖を淵海から釣り上げる釣り針。
次に綺理が目を覚ましたときにはすべてが終わり、東の空はもう白みはじめていた。

綺理と翔波は、冬惺の口から、自分たちが大淵妖と《契約》してしまったことを知った。

己を釣り上げた勾玉を核にして、地上でも保てる姿を得たという大淵妖。彼は、七年前からまったく変わらぬ美しい童子姿で、長櫃の上に片膝を立てて座った。

「時候の挨拶くらいすべきとは思っていたのだが、輪瑛に入ると喉が渇くものでつい足が遠のいていたのだよ。すまなかったね、今までは三月に上げずに顔を見せていたのに」

普通の淵妖が恐れる王都の乾いた空気を「喉が渇く」の一言ですませ、真羅はひょうたん水筒と杯を出してのん気に一献傾けた。芳醇な酒の香りが、薬の臭いに混じってふわりと広がる。

彼はいつも唐突に現れては、自分の好きなようにふるまい、適当に世間話をしていくのだ。

「……あのね、真羅。挨拶とかそういう問題じゃなくて」

「なんだね、キリ。心配しなくても私は君たちと同程度しか湿ノ力を放っていないから、乾宝薬がすぐに湿気ることはないよ。それとも夕方街中で君の名を呼んだことのほうかね？」

「！　じゃああの声はあなただったのね。でもどうしてあそこで私に声をかけたの？」

「――。助けてほしかったから、かな」

真羅はわずかに間を空け、小首を傾げて答えた。思いがけない言葉に綺理は目を丸くする。

（私たちに木取の乾術師を助けさせたくて警告したってこと？……って、それなら！）

「真羅。北部の異変を起こしている大淵妖っていうのは、あなたではないのね!?」

一番確認したかったことを口にすると、真羅のほうも翡翠の双眸を軽く見開いた。

「なんだ。それでは北部の件は私が教えてやるまでもなかったのだな。安心したまえよ、キリ。私はその件にはかかわっていない。……信じていない者が過半数のようだがね」

彼の視線をたどって振り返ると、冬惺と翔波が探るような目で真羅を睨んでいた。二人は綺理と真羅の間に割って入り、冷ややかに問う。

「君が本当のことを言っているっていう証拠は？」

「従者、大淵妖は《契約》した相手には嘘をつけないのだよ」

鷹揚に答えた真羅に、冬惺が流れるような動きで太刀を抜いた。

「その情報自体が嘘でないという証拠は？　――忘れているようだが、俺はどこかの大淵妖の気にじかに触れた影響で、淵妖を斬れる特異体質になっているんだぞ？」

喉元に切っ先を突きつけられた真羅は、口に運びかけていた杯を下ろし、ため息をつく。

「少年も忘れているようだが、この私は淵源の海のそのまた深淵から生まれ来た大淵妖、『真理を網羅する者』真羅なのだよ？　並の淵妖ならともかく、私は君の刃など恐れはしない」

「恐れはしないが、まったく斬れないというわけでもなさそうだな。試してみるか」

「ちょっ……冬惺、やめなさいったら！」

綺理は急いで冬惺の腕にしがみついた。空いているほうの手で真羅をびしっと指さす。
「こういう普通の脅迫がきかなそうな相手のときは、誘導尋問でさりげなく情報を引き出すのが定石でしょ。それか信用して警戒を解いたふりをして、なごやかに話しながらこっそり相手の飲み物に口のすべりがよくなる薬を混ぜるとか！」
一気にまくしたてると、数秒、沈黙が下りた。翔波が真面目くさってつっこみを入れる。
「駄目だよ綺理。淵妖に毒も薬も効かないっていうのは、乾術師の間では常識だ」
「……いい性格をしているな、君たちは。わかったよ、私としても早く本題に入りたい」
降参、とばかりに真羅が両手を上げる。冗談めかした態度とは裏腹に、表情は真剣だった。
「お疑いの通り、大淵妖は《契約者》に嘘をつける。だが私は君たちには嘘をつかない。もう二度とね。私は北部の異変に関与していないし、君たちが《契約》時にした願い事も異変を望む類のものではない。――が、残念ながら、私は自分の言葉を信じてもらうすべを知らない」
証拠はないが信じてくれと言う。狡猾で人を騙すのが得意なはずの、大淵妖が。
（それに……気のせいかな。今ちょっと寂しそうだったような……？）
内心首をひねった綺理の横で、冬惺が太刀を鞘に収めた。真羅の発言にいちいち疑いの言葉を挟んでいたら、きりがないと気づいたのだろう。翔波も冬惺にならって口をつぐむ。
しかし、真羅が「ではここからが本題だ」と前置きをしてから言ったことは、
「――君たちは《契約》から解放されたいかね？」

「！」

三人に残っていた冷静さを、瞬時に砕いた。

怪しげな旅人に騙されて行ってしまった、禁忌の《契約》。そのせいで綺理たちは、一所に長くいると災いを呼び、その地を泥に沈めかねない存在になった。

ずっと移動し続けていなければならず、大淵妖と《契約》したことが露見すれば死罪。そんな《契約者》のさだめから逃れたいかと問われれば。

「あ……ったりまえでしょ！　よりにもよってあなたがそれを聞く!?」

綺理は怒りに息を詰まらせながら叫んだ。子供の姿だの、友好的な態度だの、一瞬見せた寂しげな顔だのに惑わされそうになっていたが、やはり真羅は意地悪な大淵妖そのものだ。

（私たちの心を勝手に読んで、無理やり《契約》させたくせに！）

翔波も今が昼間であれば乾ノ術を放っていただろう。冬惺に至ってはなにかが臨界点に達したのか、触れただけで切れそうな剣呑な気配を漂わせている。

真羅はこちらの様子に満足したのか、引っぱたきたくなるほど晴れやかに微笑んだ。

「けっこう。ならば耳寄り情報を一つ。――地上から淵妖を追い払いたまえ。悪さをする淵妖を退治し続けていれば、いずれ君たちは《契約》から解き放たれる」

「――え」

予想外の言葉に、綺理の胸を満たしていた怒りが困惑に変わった。

《契約》を終わらせる方法が、ほかの淵妖を退治し続けること。ということは、つまり。

「私たちが《契約》のときに願ったことは、淵妖を倒せば叶うようなものなの？」

「さてね。その件については、願い事に関する記憶を抜け落とした少年を責めたまえよ」

《契約》時に意識があったのは冬惺だけだが、その冬惺の記憶が不完全なので、真羅がいったいどんな願いを叶えると約束したのか綺理たちは知らない。真羅も決して教えてくれないので、「耳寄り情報」の真偽はわからない。

だが真羅が嘘をついていようがいまいが、確かなことが一つある。

「……どういうことだい。君は僕たちに、お仲間の淵妖を退治させたいのかい？」

三人の思いを代表して翔波が言う。対する真羅は、空の杯を指先で独楽のように回した。

「もっと言えば、まず北部の異変を起こしている淵妖たちを退治してほしいのだよ。彼らは少しばかり調子に乗りすぎているからね、――邪魔だ」

ぴん、と杯を弾き上げる。朱漆塗りの小さな杯は、虚空で忽然と消えた。

「昼夜を問わず淵妖を斬り裂ける少年。正三位乾術師にして、淵妖の変化や隠形を見破れる従者。そして淵妖と会話でき、たった一つ特別な乾ノ術を使えるキリ。君たちなら、北で暗躍している大淵妖をなんとかできるはずだ。――さて、どうするかね？」

綺理たちは顔を見合わせた。相変わらず真羅の真意はつかめない。けれど。

（どっちにしろ私たちは王都を離れないといけないし、北部のことも放ってはおけない……）

木取の乾術師の懸命な訴えが耳に蘇る。病に冒された子供の黒斑が目に浮かぶ。春怜から聞かされた北部の窮状。綺理たちにはそれをなんとかできる力があると、真羅は言う。

ならば綺理がとる道は一つで、それは冬惺と翔波も同じはず。ただし。

「……自分からおまえの手のひらで踊りに行くと思うと、凄まじく嫌だ……」

冬惺がやはり三人の思いを代表してつぶやき、真羅が「だろうね」と楽しそうに笑った。

二章　薬師と組み紐

薫風吹きわたる青空の下に、一筋の道が続いている。

新緑の林に開かれた幅の広い街道、西海道。よく整備されたその道を並足で行く綺理は、周囲にひと気がなくなるのを待って、馬を並べる冬惺に声をかけた。

「ねえ、そろそろ教えてくれない？　どうやったらこんなに早く王都を出立できるの？」

薬房で真羅の話を聞き、異変を鎮めに北部へ行こうと決めてから四日。

三人は早くも馬上の人となっていた。

仮にも王弟と大貴族の姫が長旅に出るというのに、翔波以外に供はいない。出立は冬惺の寝起きする殿舎からで、見送りもなし。むしろ人目を忍ぶような旅立ちだった。

これはひょっとして『身分を隠しての旅』を通りこして『出奔』というのではなかろうか――と疑いの眼を向けた綺理に、冬惺は「各方面に話をつけてある」と平然と答えた。

「俺は叔父上から、留守中の綺理の監督を一任されているからな。その俺が『極秘任務で旅に出ることになったので、その間綺理に白桜王家の氏寺にこもって無事を祈っていてほしい』と言えば、玉造家から文句が出るはずがないだろう」

綺理の父、玉造家当主影珀が所領に戻っているのをいいことに、家人を騙したらしい。

「……それって見ようによっては、冬惺が周りを欺いて私を誘拐したことにならない？　それにあなた自身はちゃんと王都を離れる許可を得ているんでしょうね」

冬惺は答える代わりに銅鏡を投げてよこしてきた。手のひらに収まる大きさの、身分証として用いられる青銅鏡だ。裏側に孔の開いた鈕というつまみがあり、組み紐が通されている。

綺理は組み紐の部分をつかんで器用に受け取り、裏側を見る。

「？　なんで私の名前が彫られ……って、ちょっと、この模様……」

絶句した綺理に、一行の先導をしていた翔波が振り返った。彼は手綱をめぐらせて馬を寄せてくると、片眼鏡をかけて綺理の手元をのぞきこむ。

「四鳳凰竜瞳鏡！　巡察使の身分証じゃないか。しかも本物！」

「偽物であってたまるか。俺と綺理は巡察使として北部に派遣されることになった」

冬惺がさらりと言った。翔波と綺理は銅鏡から顔を上げ、半眼になって彼を見る。

「どんな手品を使ったら手に入るんだよ、こんなもの」

「白状しなさい。あなた、またなにか無茶やったでしょ」

巡察使とは、地方領主の行状を見てまわる国王直属の監察官である。領主の不正や悪政を暴くのが主な仕事になるため、必要に応じて素性を偽って潜入することも認められている。さらに賄賂等を防止するため、巡察使職を拝命したこと自体を秘して王都を発つのが慣例だ。

隠密の類と違って権限が大きく、めったに置かれないはずの官職なのだが。

「……別に種も仕掛けもない。ただ、淵妖退治にかける熱意を認めさせただけだ」
そう言う冬惺の目が一瞬泳いだ。綺理と翔波は眼光をさらに険しくする。
やがて冬惺は無言の圧力に根負けし、三日前の殿上会議の模様から話しはじめた。

「冬惺、おまえが北部の異変を解決するだと？　はっ、乾ノ術を使えない白桜の面汚しが、大きな口をたたくようになったものだな！」
「おや、兄上。私よりほんの六年早く生まれただけで、もう耄碌されましたか？　その白桜の面汚しが淵妖を斬れること、ご承知のことと思っておりましたが」
冬惺は椅子に深々とかけたまま、非の打ち所がないほど礼儀正しい笑顔を作ってみせた。
「兄上、なんならこのまま施薬寮へ行かれてはいかがです？　馬鹿につける薬はなくとも、物忘れに効く薬は処方してもらえるかもしれませんよ？」
春怜王が席を外している今、冬惺が「兄上」と呼びかける相手は一人しかいない。白桜王家の三兄弟の真ん中、夏憬である。直情径行な夏憬は、弟の慇懃無礼さにいきりたった。
「兄に向かってなんだその言い草は！　少しばかり珍しい芸を身につけただけで偉そうに！」
冬惺の淵妖を斬る力は、綺理や翔波の持つ特異な力と同じく、真羅の強大な気に触れた影響

で得たものだ。だが冬惺はそれを鍛錬の成果と偽っており、いまだに疑われたことがない。

（単純馬鹿次兄をここまで挑発すれば、そろそろか……）

冬惺が脳裏で計算をめぐらせたとき、思惑通り横合いから声がかかった。

「まあまあ、夏憬殿下。たかだか十七の子供を相手に、そうむきになられますな。ここは若さゆえの大言と思うて、寛大に聞き流してさしあげてはいかがです？」

不仲な王弟たちをたしなめるふりをして冬惺に嫌味を言ったのは、王妃の父である大臣だ。

夏憬は舌打ちして椅子にかけ直したが、その間際に侮蔑の言葉を投げるのを忘れない。

「冬惺。おまえのように生意気なやつは、父上の血筋にも母上の血筋にもいないはずだがな。市井での下賤のようなふるまいといい、いったい誰に似たのやら」

自然、議場中の視線が冬惺の黒髪に――金髪の王家にあっては異端の色に、集中した。

――冬惺が先代白桜家当主の子ではないらしいというのは、上級貴族の間では公然の秘密となっている。

決定的な証拠はない。先代妃自身は白桜家の傍系の出なので金髪に琥珀の瞳をしていたが、血縁に黒髪がいなかったわけではないので、子が黒髪になる可能性もある。その先代妃が産褥で身罷ったため真相はうやむやにされたままだ。しかし生前の彼女の品行を知る者は、冬惺の黒髪こそを不義の子の証ととらえている。

夏憬や大臣に追従して、日頃から冬惺を目の敵にしている者たちがさざめきはじめた。

「お情けで白桜を名乗っているだけの子供が、陛下のご寵愛をいいことに増長して……」
「かえって北部で痛い目の一つも見てきたほうがいいのでは？」
「そもそもなぜ北へ行きたがるのやら。乾術師としての無能ぶりをさらけ出すだけだろうに」
「いやいや。乾ノ術を一切使えないという引け目から、逆に背伸びしているのでしょう」
聞こえよがしにささやかれる、悪意のこもった言葉の数々。
けれどそれすら今の冬惺には計算のうち。笑顔を崩さぬまま、穏やかに言う。
「鈍いですね、みなさん。察してくださいよ。私はここでみなさんの腐った顔と向き合っているより、北部で淵妖の大群を眺めていたほうがずっと目の保養になると気づいただけです」
議場が凍りついたように静まり返り、――次いで怒号で満たされた。

「やってくれたな、このやんちゃ坊主め」
その日の夕刻、冬惺は春怜の私室に呼び出されていた。
「私が諸寺院との合議を進めているうちに、一騒動起こしたそうだな。『冬惺公を先遣隊として内々に北部へ派遣してくださるよう』と、凄まじい剣幕での上奏文がきたぞ」
春怜は卓上に広げた巻紙を示し、ため息をついた。上奏文の荒々しい筆跡からは、「行った先で野垂れ死んでしまえ、くそがき」という筆記者の本音がにじみ出ている。
「異変のことを教えた翌日にもうこれとはな……。護国大将軍ともあろう者が危地にとびこみ

たがるなど。まさか、戦がなくて暇だから武者修行に出たくなった、とでも言うつもりか？」

呆れきった様子で言われ、冬惺はきょとんと目を丸くした。

「それこそまさかですよ。兄上まで、俺が本気で大淵妖を退治しに行く気だと騙されてくれたんですか？　俺はそこまで自信過剰じゃありません」

綺理や翔波でなければ見抜けないほど完璧な演技で、いけしゃあしゃあと続ける。

「俺は、貴族衆の注意が異変に向いているこの隙に、北部の内情を探りに行きたいんです。異変が起きているのは、紅楓家領からそう遠くない地域ですから」

二つに分かれた金蘭王家のもう一方――紅楓家は、王位争奪戦には敗北したものの北部の一角をいまだに勢力下においている。そればかりか、白桜方の貴族の中にも紅楓家に気脈を通じている者がいるとの噂が前々からあった。

弟の言葉に、春怜は熟考しはじめる。それをみはからって冬惺はずる賢い笑みを浮かべた。

「俺を巡察使に任じてくだされば、彼らの足元を探ってきますよ。そして兄上は、お気に入りの弟をまんまと追い出した貴族連中を叩く口実を得る。おまえたちが『白桜の面汚し』などと言って追い詰めたから、冬惺は王都を出て行かざるを得なくなったんだ――とね」

「おまえは……いや。……とにかく、本当に淵妖と戦うようなことはしないんだな？」

「ええ、そちらは後から来る乾術師部隊に任せます。……実は綺理が、薬師として北部の状況を放っておけない、家出してでも冬惺について行く、と言い張っていまして。綺理が一緒に

来るなら、あいつを危険な目には遭わせられませんから。自重しますよ」

「な……なんてあくどいの。悪賢すぎるわ……！」

綺理は手綱を握る手をわなわなと震わせた。だから言いたくなかったんだとばかりに首をすくめた冬惺を、きっと睨む。

「完っ全に詐欺じゃないの。よりにもよって陛下まで騙すなんて！」

「それに君、綺理の同行を認めなきゃ危ない真似するって陛下を脅したよね？　最初から危険な淵妖退治に行く気満々のくせに、よくやるよ。うちの閣下はどんどん性格が悪くなる……」

二人から説教を食らった冬惺は、言い訳がましく口を開いた。

「……別に、全部が全部嘘というわけじゃない。綺理に関しては本当のことを言った」

「そりゃ私だけ王都に残っても意味ないし、いざとなったら家出する覚悟くらいは……」

「そこじゃない。おまえを危険な目には遭わせられない、のほうだ」

綺理は思わず息を詰まらせた。

翔波が口笛を吹き、冬惺はそちらを怪訝な目で見てから続けた。

「本当は綺理を危ない場所に連れて行くこと自体嫌なんだが……行くからには俺が全力でおま

えを守る。もしも危険が迫ったら俺の背の後ろに隠れろ。そこが一番安全だ」

さも当然そうな声音に綺理はどぎまぎし、どんな表情をすればいいかわからなくなる。

「あ、あの、冬惺。わ、私は、冬惺がいるなら怖いことなんてなにも……て、ああっ。さては冬惺、誤魔化す気でしょ！　そうよ、あなたまた貴族の方々を怒らせて。これ以上自分の立場が悪くならないように気をつけて立ち回りなさ――逃げるなあっ」

無言で馬を道の端に寄せた冬惺を追い、綺理も馬を寄せていく。

「こらっ、耳をふさがないの。目的がなんであれ、手段はちゃんと選びなさいってば。私をだしにするとか、方法はいろいろ――」

馬上から手を伸ばした綺理は、次の瞬間、逆に冬惺に手首をつかまれた。

え、と驚いて身を引きかけたが、冬惺の真剣なまなざしに出会って動けなくなる。

「これからも」

宣言するような声音に、綺理の心臓がとくんとはねた。ただしそれは、不安からくるもの。

「――目的がおまえなら、俺は手段を選ばない」

まるで恋人をさらう男のような台詞。だが冬惺の言わんとすることが正確にわかってしまった綺理は、ああやはり、と胸が苦しくなった。

おまえや翔波にかかわることなら、俺は自分を顧みない。手段も選ばない。冬惺が言ったのはそういうことだ。そしてその言葉の奥底にある思いは、おそらく親愛の情だけではない。

『……ごめん、二人とも。俺のせいだ。俺がやろうって言い出したから、そのせいでおまえたちまで《契約》に巻き込んだ……っ！』

七年前のあの夜が明けたとき、冬惺は血を吐くような声で綺理たちに謝った。冬惺だけの責任じゃないと何度も言ったのに、罪を負うべきは自分だと。禁忌を犯させた償いは必ずすると。

冬惺の心は、あのときから少しも動いていないのだ。

綺理が許しても、翔波が許しても、冬惺だけは決して冬惺を許さない。

（《契約》がある限り、冬惺は――）

「あー、お取り込み中のところすまないが、ちょっといいかね？」

唐突に真後ろから声がかかり、綺理はぎょっと振り向いた。

馬の背に積んだ薬箱の上に、一匹の子狐がちょこんと座っている。

今の声はこの子狐の位置から発せられたとしか思えない。狐色の尻尾を揺らし、翡翠色の釣った目を細め、自分の体の半分以上もあるひょうたん水筒を背負ったこの子狐から――。

「真羅、君、そんな姿に化けることもできたんだ」

翔波が片眼鏡に子狐の姿を映し、いきなり正体を見破った。

子狐姿の真羅はおやと目をしばたたき、狐らしさのかけらもない動作で腕を組む。

「もっと驚いてほしかったのだがね。この私の変化ですら、ショウハの力の前には無用か」

「あのね、私でもわかるわよ。目の色とひょうたん水筒の時点で壊滅的に怪しいもの」



「そうか、淵妖ならばこの変化でたやすく欺けるのだが。……ときに君たち、忠告を二つ。馬上でいちゃつくのは少々危険だよ。どちらかの馬が急に走り出したらどうするのかね？」

言われて、綺理は自分たちの状況を思い出した。冬惺に手首をつかまれて互いに鞍上からのり出し、かなり接近しているというこの状況。確かに恋人同士のたわむれにも見えるが、

「……別に、いちゃついてたわけじゃないもん」

実際に甘い空気がなかったので、赤くなるよりむなしくなる。

綺理の心中も知らず、冬惺は手を離すと真羅に冷めた目を向けた。

「言っておくが真羅、俺はその手の冗談が大嫌いだ。翔波、この狐、燃やしていいぞ」

「了解。綺理、薬箱が焦げたらごめん。――天にありては万物を照らす御光、地上に」

「待ちたまえ！　私もその手の暴力的な冗談は嫌いだ」

本当に火球を放つ呪文を唱えはじめた翔波に、真羅は綺理の肩の上に避難してきた。本性は泥のくせに、綺理の頬に触れた毛はしなやかでふさふさしている。

（わ、気持ちいい。……というか、す、すごく触りたい）

綺理は子狐の背をおそるおそる撫で、うっかりときめいた。なんてやわらかい毛並み。

「――じゃなくて、さっき忠告を二つって言ったわよね。もう一つは？」

「そうそう、この先の関所は張られているよ。誰が放った密偵かは知らないが、旅に余計なおまけを引き連れて行く気がないのなら、一度脇街道にそれることをおすすめする」

真羅の言葉に、冬惺が目許を険しくする。

「……翔波、脇街道の道順はわかるな？　先導しろ。そちらまで張られないうちに、とばす」

翔波がうなずいて馬を走らせ、綺理と冬惺がその後に続く。

風を切って馬を駆りながら、綺理はふと疑問に思った。いつまでたっても、肩の上から子狐真羅の重みが消えない。常ならば、もうどこかへ姿を消す頃合いなのに。

「どうしたの、真羅。まだなにか話したいことがあるの？」

「いや。私も旅のお供をすることにしたのだよ。一応、君たちをけしかけた責任があるからね」

こともなげに言った真羅に、冬惺が条件反射のように冷たいまなざしを向けた。

「俺は旅に余計なおまけを引き連れて行く気はない！」

「つれないな、少年は。私がいればよい戦力になるよ。それに狐姿の私は綺理の襟巻きにもなる。これから行くのは北だろう？」

「これから来るのは夏なのよ！」

綺理は反射的に叫び返したが、内心では真羅が一緒の旅もそんなに悪くないと思っていた。

そうなのだ。大淵妖といっても真羅が悪事を働いているのは見たことがないし、彼には何度か助けてもらったことだってある。彼が自分たちを《契約者》にした張本人だとわかっていても、綺理は昔からどうにも真羅を憎めないのだ。……困ったことに。

わめく人間たちと子狐を乗せた三頭の馬は、砂塵を立てて北へと向かって行く――。

北瑛島を勾玉にたとえると、王都輪瑛があるのは曲がった尾の先のほう。その輪瑛の西海門を基点とした西海道は、勾玉の腹に沿って――北瑛島の西岸に沿って北へと延びている。

変則的に脇街道へそれつつ西海道を下っていくと、道はすぐに砂塵を立てなくなった。数日も行けば路面はじっとり湿った土になり、さらに行くと水たまりが目立つようになる。王都から遠ざかるほど湿ノ力が強くなり、空気も水気をたっぷり含むようになってくる。

こうなると王都に住む貴族のような長い裳や袴、袖と脇をきっちり縫い合わせた上衣をまとう者は、町中でも見かけない。人々は泥はねの心配がない丈の短い裳や袴をはき、単衣の上には、袖と身ごろを組み紐でつないだだけの風通しのよい上衣を着ている。

王都を発ってから馬で七日。木匠家領内の町に着いた綺理たちも例外ではなく、通気性と運動性に富んだ装束を身に着けて市を歩いていた。

「暑い……。まだ夏前なのにこんなに空気がべたつくって、どういうことよ……」

「単にここも湿ノ力が強まっているんだろう。綺理、あまり頭が悪く見える質問をするな」

「はいはい。それより遅くなっちゃったけど、翔波と真羅、待たせてるかな」

翔波が必需品を買い足しに行っている間、綺理と冬惺は情報収集にいそしんでいたのだ。
結果わかったのは、異変の起きた地では多くの民が村を捨てたこと、彼らが他家の所領に流入し混乱を招いていること、――木取の里はとうに滅び、生き残りの住人も離散したこと。
（乾宝薬が軒並み高騰してたから、湿ノ力に起因する病が蔓延してるのもほぼ確定でしょ。病名が確認できたら処方箋を書いて送らないと。もう、現地の薬師はなにをやって……あれ？）
考えながら歩いていた綺理は、はたと隣に冬惺がいないことに気づいた。
はぐれた。そう思い至り、瞬時に青ざめる。
（迷子になる！　冬惺が！）
剣術に長け、将としても優れ、口も悪知恵もよく回る冬惺の、ほぼ唯一といっていい弱点がこれだ。彼は筋金入りの方向音痴で、一人で外を歩かせるとすがすがしいほど鮮やかに迷う。遭難する前に見つけなければ、と走り出そうとした矢先。
「綺理！」
髪と袖を一緒に引かれ、綺理は小さく悲鳴を上げた。振り返ると、今まさに捜しに行こうとしていた人物が、しまったという表情で立っている。
「悪い。髪まで引っ張るつもりはなかったんだが、指が引っかかった」
「冬惺！　あなたね、子供じゃないんだからちゃんとついてきてよ。はぐれたら最後、絶対に待ち合わせ場所に戻れないくせに」

心配かけないで、と口を尖らせると、冬惺は不服げな顔になった。
「さして広い市でもないのに、そう簡単にはぐれてたまるか。俺は道は見失っても綺理を見失うことはない。おまえは見つけやすいしな」
確かに。布に包んだ大ぶりの薬箱を背負い、剣を帯びた少女など、ほかにいるまい。
ぐうと押し黙った綺理に、冬惺は一本の組み紐を掲げてみせた。
「今そこでこれを買ってきたんだ。やる。髪を下ろしたままでは暑いだろう？」
ほら、と無造作に投げ渡され、綺理は慌てて両手を出して受け取った。淡い萌黄と濃い萌黄の糸で作られた、『蓬』と呼ばれる色合いの丸打ちの紐だ。――これはひょっとして、あの短時間で、綺理の目と髪に合う色をわざわざ選んでくれたのだろうか？
さっきまで暑かったのが、今は熱い。頬が熱い。胸の奥も火がともったようにあたたかい。
「あ、ありがとう。宝物にするね！」
上ずった声で礼を言うと、冬惺が呆れ顔になった。
「宝物って……鑑定眼ないのか、おまえは。たいして上等な品じゃないぞ？」
「でも大事にするから！　私、好きなの！　――や、あの、好きって、萌黄色がね!?」
動揺のあまりあらぬことを口走りそうになり、綺理は火照った顔を誤魔化そうとうつむいた。
もらった組み紐をまた見つめ、はにかんだ笑みを浮かべる。
そんな綺理を見て、冬惺は琥珀の双眸をやわらかく細めた。

「――従者。あの二人の関係がどうなっているのか、聞いてもよいかね？」
背後の樹上から降ってきた問いに、翔波は守り刀を磨く手を一旦休めた。
「見てればわかるだろ。綺理は冬惺が好きで、冬惺は綺理が幼なじみとして好き。以上」
「しかしだな、私とて人間の習俗について知らないわけではない。『女性が男性の無事を祈るため相手の家の氏寺にこもる』というのは、婚約者同士でする慣習ではないのかね？」
翔波の寄りかかっている街路樹の上から、真羅がまた質問を落としてきた。
綺理が王都を離れる際の偽装工作のことだ。翔波は出立した日の会話を記憶からすばやく引き出し、この大淵妖がかなり最初のほうから盗み聞きしていたことを知った。
「そうだよ。玉造の影珀さまの意向で、あの二人は事実上の婚約者として扱われている。政略結婚としちゃ順当だし……どっちにしろ、ほかに選択肢なんてないからね」
《契約者》の呪われたさだめを負ったままほかの者と結婚など、できるわけがないのだから。
（だけどそのせいであの二人、仲が進展するきっかけがないまま行くところまで行っちゃいそうな気がするんだよなあ……）
翔波は幼なじみたちの行く末を案じ、密かにため息をついた。

「ちょっと、なに笑ってるのよ。結う位置ずれてる？」

もらった組み紐で髪を高く結い上げた綺理は、隣を歩く冬惺を横目でうかがった。

「いや、思い出しただけだ。綺理と最初に会ったときのことを」

脈絡のなさに「はい？」と聞き返すと、冬惺が綺理の金髪を一房つまんだ。

「初対面のとき、後ろからおまえの髪を引っ張っただろう？」

ああ、と思い至る。

十年前綺理は、戦渦に巻きこまれないようにと、母や姉と共に白桜家の離宮に預けられた。そして初日、殿舎の中を一人で探検していたら、突然髪を思い切り引っ張られたのだ。

「廊下の真ん中で大喧嘩したっけねー。あの頃から冬惺は喧嘩も口喧嘩も強かったけど」

六歳の綺理は惨敗し、打倒冬惺を胸に誓った。しかし敵情偵察とばかりに冬惺の後をこそこそついてまわるうちに、彼がいつも一人でいることを知って心配になってきた。

「でも冬惺、なんだかんだ優しかったよね。髪が枝にからまったとき、助けてくれたもの」

偵察開始何日目のことだったか。冬惺を追って離宮の裏山に入った綺理は、髪を木の枝にとられて身動きがとれなくなった。痛いし引っ張っても取れないしで泣きべそをかいていたところに、当の偵察対象が戻ってきて髪をほどいてくれたのである。

『……この前は悪かった。おまえの金髪が綺麗だったから、つい腹が立ったんだ』

その言葉の本当の意味を綺理が知ったのは、もう少し後のこと。あのときは単純に髪が綺麗と言われて気をよくし、また、髪をほどく手つきの優しさに冬惺への好感度が急上昇した。

そうして不意に、自分がこの従兄の仏頂面しか見たことがないのに気づき、――彼をたくさん笑顔にしてあげようと新しく胸に誓ったのだった。

「ああ、あのときな……」

十年たって人並みに笑うようになったその従兄は、ふいと顔を背けた。

「実はあの時点で道に迷っていたから、おまえを助けないと宮に帰れなかったんだ」

「……」

打算的な真実が明らかになった。

「……い、いいもん。助けてもらって嬉しかったことに変わりはないから！」

「そうか。それならほかのも白状しやすくなるな。綺理の七歳の誕生日の――」

「いやああっ、待って言わないで大事な思い出は美しく保たせて！」

綺理は一息に叫んで、急いで耳をふさごうとした。

――その手を途中で止めたのは、聞き覚えのある薬の名が耳に飛びこんできたから。

「宝箭葉！　万病にたちどころに効く乾ノ神の宝の薬、宝箭葉だよ！」

はっと声のほうを向くと、道に並ぶ露店の中に一つだけ人だかりしているものがあった。老若男女の作る垣の内側で、露店の主の男がまた売り声を上げる。

「ついさっき南部から届いたばかりの乾宝薬だ！　高値、品切れに泣いた人にはご朗報！」
「偽物じゃねえのか？　本物の宝箭葉だったらこんな値段じゃ買えねえはずだぞ？」
人垣から野次が飛んだが、店主は落ち着き払ったまま。仕入れた薬をそのまま露店売りしているから、市場税がかからない分こうして安くなるのだと、もっともらしく解説する。
足を止めた綺理は、目をすっと細めて人の隙間から露店を見た。その場ごしらえの簡素な木の台の上に、独特な形状の乾いた葉が数枚、見本として並べられている。
「――冬惺。あなたの助けを当てにして騒ぎを起こしていい？」
「おまえが望むなら。……お人よしに無知の代償を支払わせる類の店か？」
詐欺か、と暗に問われて綺理はうなずいた。背の薬箱を包んでいた布を、そっとはずす。
冬惺にひそひそ声で説明していると、視線の先で人ごみが割れた。薬師の証の手袋をはめた老人が商品台の前に歩み出て、大きく細長い葉を検分する。
「ふむ。一級品とまでは言えんが、確かに宝箭樹の葉じゃな。しかしお若いの、万病に効くとは誇張が過ぎるぞ。宝箭葉の効能は、湿ノ力に侵されてかかる咳病を治すことだけじゃて」
老人の口上に、人々が色めき立った。咳病をわずらう家族を抱えた者が多いのだろう。そうでなくともこのご時勢、本物の乾宝薬を持っていれば必ず値が上がる。人々は店主のかたわらの薬箱を見て商品がいくらもないと知ると、先を争うように露店につめかけた。
そこに、綺理が喧騒を破るように声を張り上げた。

「待ってください！　みなさん、騙されないで！」
群衆がこちらを振り向き、綺理が背に薬箱を負っているのを認めて静まった。人ごみがなんとなく左右に分かれ、綺理と冬惺の前に道ができる。
「人聞きの悪いことを言う娘さんじゃ。このわしが嘘をついたとでも？」
老人があからさまに不機嫌になったが、二人は無視して商品台の前に進み出た。綺理は矢に似た形状の葉を近くで確認し、確信した。思った通りだ。
「これは偽物です。宝箭樹の葉にしては長いし、矢じりに当たる部分が大きすぎですから」
きっぱりと言うと、客たちがざわついた。店主の目が険しくなる。
「……言いがかりをつけて値を下げようってえ魂胆ですかい。ならよそ行って売りますぜ？」
そりゃ困る、と客の何人かが騒ぎ出したが、綺理はやはり無視して続ける。
「形が似ている鳴鏑草に、それらしい色をつけただけのまがい物です。鳴鏑草は催眠効果があるので、服用すると一旦患者の容態が落ち着いたようにも見えますが、病には効きません。それどころかこれは、葉を二枚以上摂取すれば死に至る毒草です」
「いいかげんなことを言うのはやめねえか、小娘！」
客の一人が横合いから綺理につかみかかろうとして、冬惺に阻まれる。冬惺は相手の手首をつかんだまま、群衆をざっと見回した。
「この男、商品を売ってもらわないと困ると騒いだ客、最初に野次を飛ばした者、老いた薬師

を装った男。――全員、この店主とぐるだな。稚拙な詐欺の割に頭数が多い」

彼の挙げた者たちが一様に顔色を変える中、綺理は自分の手袋を取り出しながら言う。

「一つ。本物の宝箭葉なら日光に当たると丸まってしまうので、露天でのこんな売り方はできません。二つ。本物の薬師の手袋なら、甲の刺繍はそんなに雑じゃありません」

薬師の紋が丁寧に縫い取られた手袋をはめて、ぎくりと手を隠した偽薬師を指さす。

「三つ。私はひよっこ薬師ですが、毒薬に関する情熱は人一倍あります。鳴鏑草のような調合しやすい毒草を見間違えることは、絶対にありません！」

「知識」と「情熱」を豪快に言い間違えたが、そこを気にした者はいなかった。客たちは詐欺師集団に白い目を向け、誰か警兵を呼んでこいと通行人に叫ぶ。

進退窮まった詐欺師たちは、逃げ道を開こうと得物に手を伸ばした。

老人のふりをしていた偽薬師が仕込み杖を抜く。同時に冬惺が、つかんでいた手首を放して男を突き飛ばし、すばやく偽薬師に足払いをかける。

「伏せろ綺理！」

鋭い指示に綺理がしゃがみこむと、頭上で風がうなった。冬惺が太刀を抜き、商品台の向こうの店主の手から短刀を弾き落としたのだ。

陽光に煌めく白刃に、一拍遅れてあちこちで悲鳴が上がった。集まっていた人々や近くの露天商人が、押し合いへし合い詐欺師たちの刃から逃れようとする。

露店のそばにいた三人の詐欺師を、冬惺が次々に蹴倒して昏倒させる。残りは人ごみの中にいた三人――と綺理があたりを見回すと、彼らは二手に分かれて遁走しようとしていた。

（まずいわ、あれじゃ怪我人がでる！）

男たちが群衆に向かって刀を振り回すのを見て、綺理は慌てて背中の薬箱を下ろした。右へ行く二人は冬惺に任せ、自分は左に逃げる男のほうへ走る。走りながら腰の剣を抜き、絹帛を巻いた柄を両手で握る。

男の刀が通行人にかかる寸前、綺理は無我夢中で両者の間にとびこんだ。

金属音。男の刀が綺理の剣に受け流され、横へそれる。

（う、うまくいった）

稽古通りに一撃をいなせて、綺理はほっとした。

激昂した男が再び斬りかかってきたが、幸いなことに動きがあまり速くない。集中して型通りに対応すれば、実戦経験のほとんどない綺理でも攻撃を受け流せる。

それぱかりか夢中になって剣を合わせるうちに、綺理のほうが押すようになってきた。

（……ええと、ひょっとしてこの相手、見かけだおし？）

そんなことを考える余裕も生まれる。剣を抜いたときは、少しの間しのげればいい程度のつもりだったが、運が良かった。これなら綺理一人でも十分倒せる。

綺理が一歩踏みこんで相手の腹を剣で殴りつけると、男はどうと倒れて沈黙し、群衆から喝

采が上がった。

「従者。君の目から見て、キリの剣の腕はどんなものだね？」

「さっきからなんだよ。今日はやけにからむね、真羅」

翔波は手入れの終わった片眼鏡を装着し、うんざりして言った。だが二人の帰りは遅いし、手入れすべき品ももうない。話でもしていないと暇なのは確かなので、言葉を返す。

「……綺理は強いよ。なにせ、小さい頃からあの冬惺に稽古をつけてもらっているからね。ただ綺理は冬惺を基準に考えているから、あんまり自分を強いと思ってないみたいだけど」

つい自慢するような声音になってしまい、揶揄されるだろうかと真羅のほうをうかがった。しかし樹上の子狐は相変わらずなにを考えているかわからない様子で、——そういえばなぜ彼はわざわざ子狐に化けているのだろうと、翔波は今さらながら疑問に思った。

だがちょうどそのとき道の向こうに綺理と冬惺の姿が見えたので、翔波は暇つぶしの会話を切り上げた。街路樹の幹から背を浮かせ、待ち人二人のほうへ歩いてゆく。

それゆえ翔波の耳には、その後の真羅の独語は届かなかった。

「ふむ。ならば剣を依代にして使わせても……。《調停者》としての資質は十分か……」

真羅は葉陰で翡翠の瞳をきらりと光らせ、身軽に枝から飛び下りた。

綺理と冬惺は警兵が来る前に騒動の場を離れたが、騒動に端を発する面倒事のほうは二人からなかなか離れてくれなかった。

翔波たちと合流した後も、綺理の薬箱の中身目当ての者が入れ替わり立ち替わり寄ってくる。そのほとんどは、投機目的で乾宝薬を求めている者だ。

売れとしつこく迫る者には毒薬しか持っていないと言い張り、力ずくで奪おうとする者は冬惺に撃退してもらい、家族が病気でと泣き落としにかかる者の嘘は真羅に見破ってもらった。大淵妖は自身が嘘つきだからなのか、人の嘘をかなりの確率で見抜く。

その代わり本当に病人を抱えていると判断した場合は、できる限り往診した。

淵妖の隠形をも見通せる翔波の目には、患者のどこに湿ノ力がたまっているかがぼんやり見える。綺理は彼と協力して病名を当て、重病の場合以外はさしあたり対症療法を教えた。

――などということをしていたら、宿に着いた時点で日がとっぷりと暮れていた。

「もうやだ……。南部から乾宝薬を大量に送ってもらって、値段を暴落させてやるー……」

宿の一室で、遅めの夕餉をすませた後のこと。

綺理はぶつぶつ言いながら、確認できた病名と治療に必要な薬名を紙に書き連ねていた。

墨を乾かしてから紙を丸め、竹筒に納めて封をする。明朝、駅家に持っていくつもりで荷物に入れようとすると、横から冬惺が竹筒を取った。

「木匠の所領なら文使いのつてがある。宿の者に道案内をさせて、今夜中に出してくるさ」

「冬惺、それなら僕が。そういうことは従者の仕事――あ」

主に続いて椅子から立とうとした翔波が、途中で動きを止めた。冬惺は彼の銀髪頭を竹筒で軽く叩き、にやりと笑う。

「思い出したか間抜け。宿に入ったときの触れこみは、流しの乾術師さまと薬師さまとただの用心棒。使いに出るなら俺が一番自然だ。――おまえたちは先に休んでいろ。明日は朝早くにここを発って、木取の里の様子を確かめに行くからな」

王弟にして武官の最高位にある彼は、大儀そうな様子もなく部屋を出て行く。扉が閉まり、足音が聞こえなくなると、翔波は椅子に腰を下ろして綺理に向き直った。

「ごめん。二人きりにさせてあげようと思ったのに」

「あ、そういうこと？……気遣いは嬉しいけど、どっちみち二人きりにはならないような」

言って、綺理は寝台の一つに目をやった。そこには童子姿の真羅が腰をかけ、ひょうたん水筒から朱塗りの杯へ、こぼこぼと酒を注いでいる。

「ね、真羅。前から疑問だったんだけど、あなたってお酒しか飲めないの？　お茶とかは？」

綺理がまだ熱い急須を持ち上げ、飲むかと問うと、真羅は翡翠の目をしばたたいた。

「いや、お気遣いなく。酒しか、というか、淵妖にとって力になるのは魂のこもった水なのだよ。丹精こめて造られた清酒、のようにね」

道理で真羅の飲んでいる酒はよい香りがすると思った。かなりの名酒なのだろう。

淵妖の話題に乾術師として好奇心を刺激されたのか、翔波が身を乗り出してきた。

「へえ、初耳だ。心のこもるこもらないが問題なのかい？　水の絶対量とどっちが重要？」

「心のほうが重要だ。淵妖に力を与えるのは美しい玉と人の魂。強い魂のこもった水なら、ごくわずかな量でも渇きがたちどころに癒えるのだよ」

強い魂と聞いてあることを思いつき、綺理は口を開いた。

「それって液体にさえなっていれば、私が情熱をこめて調合した毒薬でもいいの？」

「……。力にはなると思うが、心というより殺意がこもってやしないかね？」

「え？　だってほら、毒薬を中和して処理するのって時間かかるし、せっかく作ったのにすぐ処分しちゃうのももったいないじゃない。だから真羅においしく飲んでもらえるならと……」

「……っ、そこにこもっているのは、もったいない精神だけなのだね!?」

真羅はひょうたん水筒をひっつかむと、ふっと虚空に姿を消した。

「あ、逃げた！　どうせ毒がきかないんなら、飲んでくれたっていいのに。ねえ翔波？」

綺理は口を尖らせて翔波に同意を求めた。が、こちらの男も返答から逃げ、「そろそろ寝る支度しようか」というそらぞらしい台詞で誤魔化したのだった。

夜半――、綺理は声が聞こえたような気がして目を覚ました。

簡素な寝台の上で身を起こし、寝ぼけまなこで室内を見回す。綺理の隣の寝台は空。部屋の反対側の二つの寝台では冬惺と翔波がぐっすり眠っている。

窓側に目をやると、格子窓の一つが開いており、そこに小さな人影があった。

「……真羅、戻ってきてたの？　今の声、あなた……？」

窓のへりに腰かけていた真羅が振り返る。暗がりでも輝く翡翠の瞳が、わずかに細められた。

「いいや、私はなにも言っていないよ。……なにか聞こえたかね？」

「ううん、夢でも見てたみたい」

首を横に振ると、真羅は「そうかね」と言ってまた外を向いた。ひょうたん水筒をそばに置き、酒杯を傾ける。月見酒のつもりなのだろうか。

その背中が心なしか寂しげに見え、綺理は彼のそばに行った。並んで空を仰ぎ、息をのむ。

「あかがねの月……」

磨いた銅のような色の満月。それと生ぬるく湿った風とが相まって、七年前のあの夏の夜を彷彿させる。隣に座る真羅が、あの夜釣り針にした勾玉と同じ色の双眸で月を見上げた。

「地上にとってはよくない月だ。――高く昇った月が赤く見えるのは、淵海から強い気が立ち上っている夜。数多の淵妖が地上に上がろうと、淵海の浅みで騒いでいるしるしなのだよ」

彼の言葉に、綺理はかすかにひっかかりを覚えた。けれどその正体がはっきりわかる前に、別のことに気を取られる。

「あなた、今までなにしてたの？　なんだか髪が乱れてるし、結い紐が泥だらけよ？」

真羅の肩がびくりと震えた。「……さてね」とやや沈んだ声が返る。

ほんの少し手を伸ばせば触れ合うほど近くにいるのに、彼は独りぼっちの顔のまま。まるで出会ったばかりの頃の冬惺のようで、綺理は胸がたまらなく騒ぐのを感じた。

（なんか……放っておけない。――放っておきたくない）

綺理は真羅のほうに手を伸ばそうとして、急に思い立ってその手を引っこめた。

一旦、自分の荷物を探りに戻る。取り出したのは櫛と一本の組み紐。昼間病人を診て回っていたとき、ある家で診察代の代わりにもらったものだ。色合いは『薄色』、つまり薄紫と白。

「ちょうど結い紐にいいのがあるから、真羅にあげる。じっとしてて。やってあげるから」

瞠目して振り返りかけた真羅を押しとどめ、彼の後ろに立って汚れた結い紐を解く。

髪にからんだ細かい枝を取っていると、真羅が気持ちよさそうに肩の力を抜くのが伝わってきた。杯を置いてじっとこちらに身を預けている彼に、綺理はふんわりした気分になる。心地よい静けさの中で、肩甲骨の下まである長い後ろ髪を櫛で丁寧に梳いていく。

「――キリ。玉造のキリ」

ぽつりと真羅が名を呼んだ。ん、と返事をすると、彼はいつになく優しい口調で続ける。

「玉造りにおける錐は、硬く堅い玉にも孔を穿つものだ。たとえ行く先に堅固な壁が立ちはだかったとしても、迷わずに突き進めば君は道を開けるだろう」

大淵妖なのに祝いの詞のようなことを言うんだ、と綺理はちょっぴりおかしくなった。

「迷わずに？」

「迷わずに、揺るがずに。――大切な誰かがいるのなら、その相手への想いも大切にしたまえ。その相手との誓いを、約束を、ずっと忘れずに守り通したまえ」

綺理の胸に、黒髪に琥珀の瞳の少年の姿が浮かぶ。その彼と同じつややかな黒髪を、細い首の後ろで一つにまとめながら、ふとたずねてみた。

「真羅もいるの？　そういう、大切な誰かが」

さてね、と返されるかと思った。だが薄色の組み紐で髪をくくり、紐の余りを飾り結びにして仕上げた頃、真羅はささやくような声で答えた。

「大切な相手との約束のために、私はここにいるのだよ。……キリ、髪をありがとう」



三章　舞い降りる炎

綺理が触れると、家屋の柱だったと思しき木材はぼろりと崩れた。
「これは……思ってたよりひどいわね」
住人に打ち捨てられた木取の里をざっと見回し、綺理は顔をしかめた。
『里』というのは金蘭王朝以前の古代から大集落を形成していた場所であり、乾ノ力を受け取りやすい土地柄であるはず。それがどうだろう。広場は異常発達したシダ植物に埋め尽くされ、家々は苔と蔦に覆われて半ば朽ち、里と森の境界すらわからない有様だ。
いくら木取家が下級貴族で、その里の規模も小さかったとはいえ、湿ノ力の侵食が速すぎる。
（このまま放っておけば一年半……ううん、一年もしないうちに完全に淵海と同化する）
綺理は北部で生まれ育ち、戦乱期には紅楓の追っ手から逃れるため冬惺たちと地方を転々としたこともある。だがこれほどの惨状は、辺境地域でさえ見たことがない。
「わー、植生もまるっきり変わっちゃってる。早世大根に千人殺に辻斬草に……」
「とりあえず毒草なんだな？　採集するな、綺理。行くぞ」
綺理は採集道具を出す前に冬惺に腕をつかまれ、しぶしぶ先へ進んでいった。
泥道をしばらく行くと、綺理たち三人は里の中央にある寺院にたどりついた。

緑に覆われて荒廃しているが、まだ多少乾ノ力が残っているのだろう。傾いた南大門をくぐると若干空気が軽くなり、足場もよくなった。とはいえ、やはり境内にしては湿ノ力が強い。

「淵妖は寺院の奥まで押し寄せたみたいだね。ひどいなこれは。塔が真ん中から折れてる」

翔波の言葉通り、回廊に囲まれた郭の中では、寺院の象徴たる三重塔が倒れて苔むしていた。その後方にある本堂と講堂だけが、屋根から草を生やしつつも原形を保っている。

「どうする？　中に入ってみる？」

この異変を起こしたと思しき大淵妖や《契約者》につながる手がかりが、あるいは残されているかもしれない。綺理がそう目で問うと、冬惺は空模様を確認してからうなずいた。

「そうだな。だが日が落ちる前に町へ戻ったほうが無難ということを考えると、時間の余裕はあまりない。――本堂と講堂、手分けして調べよう」

綺理は翔波と共に、本堂の調査役を振り分けられた。

軋む扉を開けて中に入ると、寺院の匂い――乾術師の使う香の匂いがふわりと漂う。淵妖も堂内までは侵入しなかったようで、床や壁の木材が腐っている様子はない。

後ろで翔波が短く呪文を唱えると、白い光球がいくつも生まれて堂内を照らした。

「わあ……見事な神衆像じゃない」

光の中に浮かびあがった乾ノ神衆の像に、綺理は感嘆の吐息を漏らした。
ほぼ等身大の、金銅製の立像だった。装飾性豊かな鎧をまとい、右手に宝剣を構えた勇ましい青年の姿で、背には光背を兼ねた大きな翼がある。
乾ノ神衆の一にして悪妖悪鬼を討ち滅ぼす武神、大天火雷金翅明王だ。
（こんなに立派な神衆像が残ってるなら、祈る人さえ戻れば里の復興も叶うよね）
祈りとは、いわば誰にでも使える乾ノ術。
人は、乾ノ神衆――乾ノ神の眷属の似姿を作り、祀ることで、天上から乾ノ力を受け取り、地上における乾湿の力の均衡を保っている。多くの祈りが集まれば寺院を中心に乾ノ力が満ちていき、人の住みよいほどよく乾いた土地になるのだ。
綺理も薬箱をわきに下ろし、翔波と並んで神衆像に長い祈りを捧げた。半分は木取の里のために、そしてもう半分は、これからする少々不敬な行為を見逃してもらうために。
「さてと。もし私が本堂の中になにか重要な物を残すとしたら……神衆像の裏？」
祈り終えるなり綺理は台座に上り、炎を模した翼の裏側をのぞきこんだ。
「君さ、苦い薬を出されたら飲んだふりして簞笥の裏に隠すような子供じゃなかった？」
「ううん。昔隠したのは、朱をたくさん入れられた手習いの紙。――はずれ、なんにもなし」
床に下りて首を振ると、翔波が台座の裏側に回って細工を検分しはじめた。
「こういうときはまず台座を調べるのが鉄則だよ。この種の雲形の台座は工程の都合で内部に

空洞ができるからね。……あった、ここで空洞をふさいでいるんだな」
翔波の片眼鏡が光った。手馴れた手つきでこじ開けはじめた彼に、綺理は呆れる。
「なんでそんなに詳しいの。まさかあなた、昔、見たくない物を台座の中に隠してたとか？」
「逆。昔、大事な物が取り上げられないように隠してたんだ」
さらりと返され、綺理は驚いて翔波を見やった。
「どうして。誰かがあなたの大事な物を取り上げようとしたら、私と冬惺が黙ってないのに」
「……うん、知ってる。――僕の言う昔っていうのは、冬惺の従者になる前のことだよ」
翔波は青銅色の瞳を細めて微笑んだ。が、それ以上詳しい話はしない。彼は綺理たちに会う以前、つまり別の主人に仕えていた頃のことを語りたがらない。
（……翔波が昔のことを言わないのって、白桜王家に遠慮してるだけじゃなくて、いい思い出がないからなのかな？　翔波に限って、もうあんまり覚えてないなんてことはないだろうし）
異常に記憶力のよい幼なじみの横顔をうかがっていると、彼の手元で木組みのずれる音がした。小さな羽目板が一枚はずれ、その奥にある黒々とした空洞が口を開ける。
「すごい！　そういえば翔波って、宝探しごっこでも見つけるのうまかったもんね」
「うんうん、存分に褒めたたえて敬って。しかも当たりだよ。中になにか入っている」
翔波が腕を伸ばし、空洞の中からなにか棒状の物を引っ張り出した。
光球の下で見たそれは、古びた巻物。簡素な表装で書名も記されていないが、これは。

「術法書……？」
綺理と翔波のつぶやきは、一言一句違わず重なった。
「なんで、講堂じゃなくてこんなところに？」

講堂内に設けられた書庫で、冬惺は乾ノ術の術法書を繰っていた。
厨子に納められている数十冊の綴じ本は、すべてこの寺院に所属していた乾術師が著したもののようだ。秘術といえるほどの術はなく、記されている呪文も無駄が多い。正五位程度の乾術師でも、ここの術法書にある術はみな使えるだろう。
――けれど冬惺は、ここに載っている一番簡単な乾ノ術ですら使うことができない。
「悔しいのかね？『白桜の面汚し』閣下」
聞き覚えがありすぎるほどある声に、冬惺は視線を頭上にやった。
梁の上に、童子姿の真羅が座っている。里につくなり姿を消したので調査に興味がないのかと思っていたが、一応冬惺たちの後をつけていたらしい。
「なにがだ？　つくづく人を見下すのが好きな大淵妖だな。なんとかと馬鹿は高いところが好き、という言葉を体現したいのなら、俺の視界に入らないところで永久にやっていろ」

「つくづく相手を見下すのが好きな人間だな。伏せ字にするほうを間違えたのは故意にかね？」

「悪意だ。悪意に悪意で返しただけだ。邪魔をするなら淵海にでも失せろ、泥の化け物」

じろりと睨むと、真羅は「怖い怖い」とわざとらしく肩をすくめ、梁から飛び降りた。

真羅が邪魔にならない場所におとなしく座るのを確認すると、冬惺は再び手を動かしはじめた。しかし作業をしながらも、真羅の口にした呼び名が脳裏にちらつく。

『白桜の面汚し』

それは幼い頃から冬惺が周囲に言われ続けていることだ。最初は金蘭王家の金髪を受け継がなかったために、後には乾ノ術を一切使えないために。

――系譜をたどれば白桜家のほうが紅楓家より王位継承権は上。それでも紅楓家が堂々と王位を要求していたのは、白桜家より上位の乾術師が生まれているからにほかならない。

正一位乾術師は数十年に一人しか現れない希少な存在なのでおくとすると、乾術師の実質の最上位は従一位。紅楓の家系ではその従一位乾術師を何人も輩出している。

対する白桜は一階位低い正二位止まり。そこで紅楓家方の勢力は、王位争いが内乱に発展する以前から、「白桜は金蘭王家の血が薄まっている」と盛んに吹聴していた。

そんな状況下で、白桜の直系のはずの冬惺が黒髪に生まれついたのだ。

不義の子であるなら醜聞の種。正しく先代当主の子であったとしても、今度は敵方の主張を

裏付けることになる。どちらにしても、白桜の名に泥を塗る存在には変わりない。

公式には先代当主の嫡出子とされ、しきたり通り名前に季節の字を与えられたとはいえ、そんな冬惺が誰からも疎まれていたのは自然のなりゆきと言えよう。

（……綺理だけは違ったが）

あのまぶしい金髪の従妹だけは、冬惺の髪の色を意に介さずに喧嘩したり、仲直りしたと思えばなにくれとなく話しかけてきたり、一緒に遊んだり、屈託なく笑いかけたりしてくれた。

十歳上の長兄、春怜とまともに言葉を交わすようになったのも、綺理に引きずられて会いに行ったのがきっかけだ。以降、長兄が公然とかばってくれるようになったため、白桜の陣営内での冬惺の立場はようやく安定しはじめた。翔波を従者にしたのもちょうどその頃だ。

それでも陰口は絶えず、とうとう春怜は冬惺を北部で養育させることに決めた。おそらくは政治的理由からだけでなく、末弟を悪意の渦の外でのびのびと過ごさせるために。

そうして三人共に玉造の里へ行き――。

「――真羅。おまえは《契約》のとき、俺たち三人の心を読んだんだろう？」

次の厨子を開けながら、後ろにいる真羅にぽつりと問う。

思い出せない。七年前のあの夏、自分がいったいなにを思っていたのか。

「その通りだよ。私は君たちの心を読み、その中で最も強い願いを叶えると約束した」

真羅の髪の大部分が黒いことから察するに、彼の主たる《契約者》は自分だ。強い願いとは

自分が抱いていたもののはず。そして《契約》が続いているということは、その願いはまだ叶っていないが、叶う可能性が完全に失われたわけでもない。

「答えろ真羅。七年前のあのとき、俺は――」

乾術師になれるようにと願ったのではない。それは確か。大淵妖には決して叶えられない願いだし、十歳を過ぎてから乾ノ術の才に目覚めるということはありえない。

髪が金色になるように、でもない。当時はもう自分の黒髪を嫌悪しなくなっていたから。

では白桜の勝利か。自分は白桜にとって価値のある人間だと、そう誇れるようになることか。どちらも一年前、冬惺の率いる軍が紅楓方に大勝利を収めたときに叶ったと言ってよいし、紅楓との一連の戦に真羅が介入していた様子はない。――ならば。

「俺はいったい、どんな望みのために禁忌を犯した……？」

どんな強欲な願いのために、綺理と翔波を《契約者》の呪われたさだめに引きこんだのか。

古色に染まった静かな書庫で、真羅はいつものように「さてね」とだけ答えた。

ぼろぼろの巻物を広げると、そこには術法が一つ、流麗な筆跡で書かれていた。

綺理と翔波は床に膝をついて流し読みするや、押し黙る。

それは決して秘伝の術を見つけた感慨からではなく。

「……綺理。これさ、君が廃屋を吹っ飛ばしたときのあれだよね？」

「あれよ。この神衆の像に隠してるくらいだから、もしやとは思ってたけど」

あれとは、綺理が唯一使える乾ノ術のこと。

十歳になる少し前、綺理は自分がこの術を使えることを知った。当時はあまりの力の大きさに恐慌状態になり、あたりを炎の海にした挙げ句、冬惺に火傷を負わせてしまったけれど。

（意外とこれ、あちこちに伝わってたのね。呪文の省略ができない術だから当たり前だけど、あのとき唱えたのとまったく一緒……あれ？）

綺理はちょっと離れて巻物を見直した。やはり、違和感がある。

「ねえ翔波。これ、玉造の里で見たのと心得書きのところが違う気がするんだけど」

六年前の記憶なのでだいぶ曖昧だが、翔波なら覚えているだろう。くいと袖を引くと、彼は巻物の製作年代を調べていた手を止め、文面に目を走らせた。

「本当だ。この筆跡の違う部分が丸々一項目多い……けど、なんだよこれ。暗号？」

「天才的な悪筆なんだと思う。……ええと、依代に？　直なる剣を？……剣？」

綺理は思わず、自分の腰に吊してある剣を見下ろした。

――人ならぬ者の声が聞こえたのは、まさにそのときだった。

〈見ツケタゾ〉

ぞくりと、背筋に冷たいものが下りる。
淵妖だ。近い。それも、集中していなくても声が聞こえるほど強い淵妖。
「翔波、淵妖がいる！――冬惺に報せないと！」
綺理は立ち上がるなり床を蹴った。扉に体当たりして本堂を飛び出す。
外は。
外には、紺碧の泥の波が押し寄せようとしていた。
〈イタゾ〉〈イタゾ〉〈見ツケタゾ〉
木陰、岩陰、建物の陰。あらゆる物の陰からじわじわと泥の妖がはい出してくる。
空気が湿り気を帯び、建造物の残骸が急速に腐り崩れていく。淵妖が雲を生み、寺院のあたりだけがにわかに薄暗くなってきた。
（ありえない。なんで、こんなに……！）
この里が淵妖に襲われて滅びたのは一月近く前だ。どうして再び淵妖が大挙して現れる？
「冬惺！　淵妖が来たわ。大群で襲ってきた！」
大声で叫びながら講堂へと走る。後続の翔波が、恐ろしく早口で呪文を紡いだ。
「天にありては万物を照らす御光、地上に来たりて万有を食む牙となれ！」
綺理の後方で熱風が生まれ、炎の塊がわきを駆け抜けていった。火球は二人の行く手に立ちふさがる淵妖と衝突し、相手を砂に変えて消滅する。

太陽が翳っているので効力が落ちているが、翔波は悪態をつく間も惜しんで次の術に移る。
この場で綺理にできるのは、目を閉じずそらさず、状況をよく見ることくらいしかない。
〈囲メ〉〈囲メ〉〈追イツメロ〉
回廊の壁からも、もやのような淵妖がうぞうぞと現れる。逃げ道は自分たちで切り開かない限りない。では逃げるとしたらどこへ？　太陽の出ている場所。日陰が少ない、開けた場所。
（ここは『里』。きっと近くに古代の祭祀場が……え？）
突如、紺碧の妖の姿が綺理の視界いっぱいに広がった。
ひと際大きな淵妖が横合いから間欠泉のように噴き出し、二人に迫る。
（のまれる）
そんな言葉が頭の片隅をよぎった。のまれて、骨まで喰われる。翔波が乾ノ術を放つより、淵妖が自分たちをのむほうが速い。
だが、さらに疾い者がいた。
冬惺。
講堂から出てきた彼が綺理と淵妖との間にすべりこみ、太刀を一閃させる。
一瞬淵妖の動きがこわばったかと思うと、紺碧の体が二つに分かれて形を崩した。そこに翔波の生み出した乾いた風が吹きつけ、淵妖は見る見るうちに砂と化していく。
「二人とも、無事か!?」

駆けつけた冬惺が切迫した声で叫んだ。二人が泥にのまれることなく立っているのを認め、ようやく彼の蒼白な顔に血の気が戻る。

「う、うん。ありがと冬惺。……でもこれから無事じゃなくなりそう」

講堂の前に立つ三人は、数え切れないほど多くの淵妖に囲まれていた。

王都の西海門に現れたものと同級の、いびつな獣形の淵妖が数多くいる。その間には不定形の淵妖が無数にはびこり、ぬかるんだ地面が見えないほどだった。

〈捕ラエルゾ〉〈捕ラエルゾ〉〈我ラガ王ノタメ〉

うねるように響く淵妖の声に、綺理の胸に疑念が浮かぶ。

（この淵妖たち、最初から私たちを狙って来たの？　でもなんで？　王って大淵妖のこと？）

なんにせよ淵妖の標的が自分たちなのなら、この場から逃れるだけでは意味がない。一掃しないと、どこまでも追ってくる。

綺理はさっとあたりを見回した。淵妖の来襲で周辺の湿ノ力は飛躍的に強まっている。ならばあの術を使っても、乾ノ力と湿ノ力が相殺され、周囲が焼け野原になることはないはず。

迷ったのはほんの一秒。背中越しに冬惺にささやく。

「日なたに。日の差す場所まで逃げられれば、私がなんとかできると思う」

「！　まさかあれをやる気か!?　だがあの術は失敗したら――」

ぎくりとした冬惺に、綺理は急いで言葉を重ねた。

「危ないってことはわかってる。でもこれだけの淵妖をどうにかする方法なんて、他にないもの。今度はちゃんと成功させてみせるから！」

そんなやりとりの間にも、淵妖は続々と増えていく。ややあって、冬惺が根負けしたように言った。

「……わかった、任せる。だが日なたへ出るのが一番の難題だな、これは。――っ！」

言下に、淵妖が八方から押し寄せてきた。

戦慄が三人の間を走る。逃げられない。太刀や火球ではすべての淵妖には対処できない！

今度こそ淵妖に押し包まれ、喰われる。

綺理がそう思ったのと同時に、浅葱色の光の壁が足元からせり上がった。

「！」

冷たい光の壁が三人をぐるりと囲み、跳びかかってきた淵妖をことごとく阻む。光の壁に触れた淵妖は、泥人形に水をかけたようにどしゃりと崩れ、地面に吸い込まれていった。

「お困りのようだね、君たち。手伝おうか？」

「真羅！」

浅葱色の光をまとった童子が綺理たちの前に降り立ち、淵妖の群れがどよめいた。

〈気ヲツケロ〉〈気ヲツケロ〉〈アノ方ハ――〉

「やかましい雑魚どもだな。黙りたまえよ」

真羅がうんざり声で言いながら、右腕を薙ぎ払うように振る。
その途端、まるで見えない手に口をふさがれたかのように、淵妖たちの声がくぐもった。
またたく間に淵妖の大合唱が止む。あたりを包んだ不気味な沈黙に、綺理は眉をひそめた。
（なに、今の……。淵妖の声を封じた……？）
もともと淵妖の声が聞こえていない冬惺と翔波も、真羅がなにかをしたことには気づいたようだ。淵妖たちは真羅を警戒しているのか、第二陣はすぐには襲いかかってこない。
とはいえ綺理たちのほうも、一息つくわけにはいかない。
大淵妖たる真羅が行使するのは、湿ノ力だ。彼が力をふるえばふるうほど、この地は泥化が進む。現に、先ほど彼が障壁を生み出した影響で、綺理たちの足元は泥沼になりつつあった。
「真羅、君に手伝われると僕らが死ぬ。泥に沈む。もう沈みかけてる。――淵海より吹き来る風は禍つ風、今吹き返せ天の水無風！」
翔波が青い顔で湿ノ力を払う呪文を唱え、足元の泥化を食い止める。人間は淵妖とは違い、泥沼の上に立つなどという芸当はできないのだから。
「安心したまえ。私としても《契約》を果たす前に《契約者》に死なれては困るのでね。湿ノ力をふりまかぬ方法で手伝わせていただくよ。――トウセイ」
珍しく真羅が冬惺のことを名前で呼んだ。彼は歌うように、そそのかすように言う。
「討伐し制圧する者、トウセイ。君の刃に力を与えよう。淵妖を還す力を授けよう。私の名前

を呼びたまえ。太刀を構えて乞いたまえ。ここに来たれよ、憑りつけ、と」

対句を用いた独特の語り口に、冬惺はなにか禍々しい記憶が蘇りかけるのを感じた。

――伝承は言う。大淵妖の言葉に耳を傾けてはならない。彼らと取り引きしてはならない。

そんなことが、警告色と共に頭の中でまたたく。

けれど今は数多の淵妖に囲まれており、いつまた襲いかかられてもおかしくないという状況だ。迷ってなどいられない。この際、真羅がなにを企んでいようと関係ない！

（綺理と翔波を守れるなら、手段などなんでもいい！）

「真理を網羅する者、真羅！」

その名を呼ぶ。背後で息をのんだ二人を無視し、冬惺は太刀を正眼に構えて叫ぶ。

「――憑りつけ！」

真羅の口元に笑みが浮かんだ。応えるように、彼の全身が浅葱色の光に包まれる。

童子姿の大淵妖はふわりと宙に浮き、冬惺の太刀に吸い込まれるようにして消えた。淵妖が物品に憑くときと同じだ。違うのは、真羅の憑いた太刀が目に見えて変化したこと。

冬惺の手の中で太刀が浅葱色の光をまとい、刀身が水のように透き通る。

（なんだ、この太刀は）

自問したそのとき、視界の隅で淵妖の囲みが動いた。
冬惺ははっと半身を返し、押し寄せてきた淵妖の先頭の一匹に太刀をふるう。
常ならばこれで淵妖がすんなり斬れ、極端に弱体化した二つの個体になる。
ところが。
刃が牛形の淵妖に触れた瞬間、水面を叩くような音がした。淵妖があっけなく形を失い、またたく間に地中にのみこまれる。——淵海に還ったのだ。
それだけではない。振り切った刃から浅葱色の光が放たれ、付近の淵妖をまとめて薙ぎ倒す。
（大淵妖の力が宿った太刀……淵海還しの水の太刀、といったところか？）
しかも真羅の言った通り、この太刀をふるう分には周囲で湿ノ力が強まる気配はない。
それだけ確認できれば十分、と冬惺は思考を切り替え、二人に指示を下す。
「退路を開く！　方向は綺理が決めろ。翔波はそちらの地面に炎を！」
戦闘に集中していた自分たちと違って、綺理は周辺を観察していたはず。日の当たる場所に出るにはどちらへ逃げればよいか、彼女なら適切な判断を下せる。
「天にありては万物を照らす御光、地上に来たりて万有を食む牙となれ！」
綺理の示したほうに翔波が炎の塊を放った。地面を狙った火球は、進行方向の淵妖を怯ませただけでなく、泥沼を乾かして足場を作る。
その一筋の道に、三人は走りこんだ。無論、先陣は冬惺だ。

立ちはだかる淵妖の壁を水の太刀で斬り払う。やれる。道を開くだけならこれで事足りる。
「翔波、おまえは足場の確保に努めろ。淵妖は俺が引き受ける」
「了解。天上の黄なる道を行く鳥、その三足で地に爪痕を刻め！」
翔波は休む間もなく呪文を唱え、綺理は右や左と指示して冬惺を寺院の裏へ導く。
淵妖の包囲網を突破した後は、冬惺が最後尾に移動した。追いすがる淵妖を斬り捨てつつ、裏門から続く林道を走る。ただひたすらに、光のほうへと。

高台にある祭祀場跡へ足を踏み入れると、やわらかい陽光が綺理を包んだ。
綺理はそのまま広場の奥へ向かい、舞台のように平らかな岩に駆け上がる。ふもとの寺院からこの広場へと、淵妖が砂糖に群がる蟻のように集まってくるのが一望できた。
急がなければ。翔波は乾ノ術の連続使用で消耗しているし、冬惺もそう長くは持ちこたえられないはずだ。窮地に立ったとき冬惺が自分たちを守るためになにをするか、それが怖い。
（……大丈夫。心を静めていれば、迷わずにいれば、今度はちゃんとやれる）
岩舞台の上に直立し、呼吸を整える。右手を太陽に向けてまっすぐに伸ばす。
「帰命したてまつる――」

おごそかに詠唱を始めたそのとき。綺理の脳裏に記憶の情景が浮かんだ。

「ねえ、翔波。この呪文、ほかのと雰囲気が違うんだけど、なんの術のか知ってる？」

――玉造の里から森をしばらく分け入ったところに、一軒の廃屋があった。

綺理たち三人が遊び場にしていた、秘密の砦。

六年前の春の日、綺理はその廃屋に乾ノ術の教本を持ちこんで眺めていた。そしてその間に別の術法書の一葉が挟まっているのを見つけ、記されている呪文に首を傾げたのである。

「心得書きもいっぱいあるの。術者は曇りなき太陽の下にいないと駄目、呪文はゆっくり唱えないと駄目、詠唱が終わるまでその場を動いても駄目、心を乱しても駄目……」

ただ肝心の術名が、紙が破れていてわからない。どれ、と手を出した翔波に紙片を渡す。

翔波は片眼鏡を押し上げて一読すると、興奮したように声を弾ませた。

「乾ノ神衆に直接呼びかける呪文じゃないか！　正一位乾術師にしか使えない――というか、使えたら即、正一位乾術師になれるっていうあれ！　乾ノ術の最高峰！」

「――天の灯明より分かたれし、金色の翼にて舞える者、雷霆の咆哮を従えし乾ノ眷属に」

乾いた風が綺理のもとに吹き下り、掲げた手のひらに熱が集まってくる。

ここまでは六年前と同じ。だけど、

九歳の綺理は廃屋の庭に出ると、後ろで冬惺と翔波が笑って見守る中、呪文を唱えた。たわいない『正一位乾術師ごっこ』のつもりだった。どうせ発動するわけがないから、と。だが空気は熱をはらみはじめた。不審に思い集中を乱したとき詠唱が終わり、――轟音と共に、廃屋が一瞬で劫火にまかれたのだ。

恐ろしかった。赤々と燃える凶暴な火に、綺理は怯えた。自分が引き起こした事態に震え、それがさらなる惨事を招いた。猛火が膨れあがり、見る間にあたりを炎の海に変える。嘘。怖い。嫌。やめて。こんなこと望んでない。望んでないのに！

言語にならない悲鳴が喉からあふれた。熱風で喉が痛む。涙は出たそばから乾く。烈火の帳の向こうに背の高い人影がちらと見えたが、それもすぐにかき消える。

綺理は熱の渦の中心で頽れた。目を閉じ、耳をふさいで、泣き叫び続ける。錯乱していたのはどれほどの間だったか。最初に知覚したのは、声だった。

「――大丈夫だ、綺理。俺がついてる」

冬惺の声。頭の中で荒れ狂っていた恐怖の嵐が少し凪ぎ、綺理は自分が冬惺にきつく抱きしめられているのを知った。

「俺がいる。俺がおまえを守るから、だから怖いことはなにもない。大丈夫だ」

繰り返される言葉と自分を包む腕の強さに、じんわりと安心感がこみあげてくる。それにつ

れて肌を叩く熱風が弱まり、木々の燃える音も小さくなっていった。
冬惺が腕をゆるめたとき、二人は焦土の上に座りこんでいた。火は消えていたが、廃屋とあたりの草木は灰になっている。冬惺の額には脂汗が浮かんでおり、不意にその体が傾いだ。
どさりと倒れた冬惺の背には、火の粉を浴びた痕が一面に広がっていた。

だけど、今回は。自分は望んでこの術を使う。心の準備はできている。
あのときのような事態には絶対にしない。決意を胸に、綺理は呪文の後半部分に入る。
「謹んで願わくは、真赤き日輪のかけらを鎧い、万雷を紡ぎし灼熱の剣をとり――」
熱を帯びた旋風が綺理の金髪をあおる。岩舞台のそばで淵妖の襲来を阻んでいた冬惺と翔波が振り返り、打ち寄せる淵妖の大波が怖気づいたようにうねった。
それは、乾ノ術の最高峰たるその術の名は、
「――天の雷窟より降臨したまえ！」
降神術。
綺理は右手を一気に振り下ろし、招請する乾ノ神衆の名を叫んだ。
「――――大天火雷金翅明王！」
金色の光が、雷鳴と共に降った。

眼前で光が爆発する。場に急激に乾ノ力が満ちるのを感じる。
あまりのまぶしさに目をつぶると、低い美声が耳朶に触れた。
「私を呼ぶのは二度目だな、金蘭の末裔の姫。己の招いたものに目を閉ざすのはもうやめよ」
戒める口調に綺理ははっと目を開け、上を見る。
視線の先には、金色の炎の翼を持つ美しい青年が滞空していた。
長い緋色の髪を高く結い、蘇芳色の武具を身につけ、翼と同じ金の双眸でこちらを見下ろしている乾ノ神衆。彫りの深い秀麗な面差しの彼は、眉間にしわを寄せたまま言った。
「前はおぬしの精神が不安定であったゆえ、地上で姿を保つに至らなかったからな。改めて名乗ろう。私は乾ノ神の眷属、大天火雷金翅明王。火雷明王と呼ぶがいい。おぬしは？」
「……えっ、き、綺理。玉造の綺理、です」
まさか名を問われるとは思わず、どもって答えると、火雷明王は表情を変えずに続けた。
「では綺理、我が招請者。おぬしが私に望むのは、あの淵妖らの討滅に相違ないか？」
輝く金の瞳が、広場に迫る淵妖の大群を一瞥する。綺理は気を引きしめ、うなずいた。
「――はい」
「承知した。命が惜しくば伏せておれ」
「――はい？」



不吉な台詞に聞き返したときには、火雷明王は背の翼を羽ばたかせて舞い上がっていた。
綺理、冬惺、翔波。三人の人間が仰ぎ見る中、火雷明王が腰の宝剣を抜き放つ。
紅の炎が蛇のように刀身にからみついた、十握の剣。
――神々しいのに嫌な予感がしてしまったのは、六年前の記憶のせいばかりだろうか。
火雷明王が宝剣を水平に構え、薙ぎ払う姿勢を見せた瞬間。
「二人とも伏せて！」
綺理は叫んではいつくばり、冬惺も翔波を引き倒して地面に伏せた。
直後、三人の頭上で熱気が膨れあがり、雷の轟きが耳をつんざいた。
紅炎と金雷の螺旋が宝剣からほとばしり、紺碧の泥の津波を横一文字に斬り裂く。
何千何万もの土器を一度に叩き割ったような大音声。おびただしい数の淵妖が一匹残らず砂と化し、炎と砂塵がゴゥと吹き荒れる。木々が大きくしない、枝々が折れ飛ぶ。
烈風がやむのを待ってから立ち上がった綺理は、目の前に広がる光景に唖然とした。
凄まじい乾ノ力が放たれたせいで地面がひび割れ、広場を囲む木々が炭になっていた。斜面の草木は薙ぎ倒され、その上に淵妖の残骸の砂が積もっている。陽炎の向こうの木取の里は、枯死した植物で茶色く覆われ、先ほどまでとは逆の滅びの様相を見せていた。
（し、湿ノ力がすごーく強まってた場所でさえこれってことは……）
普通の場所なら炎の海、のち、灰の海。

顔を引きつらせた綺理の前に、火雷明王が剣を収めて舞い下りてきた。彼が岩の上に足をつくと、背の大きな翼がかき消える。

「運良く力を抑制できたが……怪我はなかろうな、姫君？」

さらりととんでもないことを言われた。

「……あの、火雷明王。ひょっとして、今のでも御力を抑えていたんですか？」

「うむ。乾ノ神衆にとって地上は狭き異界。面目ない話だが、力の加減がうまくゆかぬのだ」

綺理たち三人は凍りついた。

火雷明王を招請しても、力を借りるのはとてつもなく危険だったということではないか。

「……なんて、使い勝手の悪い乾ノ神衆だ……っ」

太刀を杖に立ち上がりながら、冬惺がうめいた。決して小さくはなかったその声に、火雷明王は肩越しに振り返り――刹那、金の瞳が怒りに燃えた。

「おぬし、なにを……！」

（嘘、実は短気!?）

ぎょっとした綺理の前から、冬惺のもとへ。火雷明王が一気に距離をつめる。

しかし彼は、冬惺の暴言に逆上したわけではなかった。

「なんという物を持っている！」

火雷明王は怒号と共に冬惺の右腕をつかみ、後ろにひねり上げた。冬惺の顔が苦痛に歪み、

その手から真羅の憑いた水の太刀がすべり落ちる。
「冬惺！――なにするんですか、火雷明王！」
綺理の声の先で、彼は冬惺を片手で拘束したまま太刀を踏みつけた。同時に翔波が守り刀を抜き、刀身を火雷明王の鎧の継ぎ目にすべりこませる。
「閣下を、我が主をお放しください！」
「やめろ翔波！　乾ノ神衆に刃を向けるほど馬鹿になるな！」
冬惺が言い終えるよりも早く、守り刀がどろりと融けた。翔波が愕然と立ちすくむ。
火雷明王はそちらを一瞥すると、空いた手で冬惺の前髪をつかんだ。彼の顔を自分のほうに向けさせ、金蘭王家の琥珀の瞳を見下ろす。
「正気の目だな。……湿ノ力の放出が少ないからにわかには気がつかなかったが、おぬし、《契約者》か。――金蘭の末裔ともあろう者が、堕ちたものだ」
慨嘆するような声に、綺理は駆け寄りながら総毛立った。古来、《契約者》は死刑に処されるのが習い。火雷明王が《契約》に気づく可能性を考えていなかった自分の落ち度だ。
「やめてください！　冬惺を傷つけたら許しません！……それに、金蘭の末裔で《契約者》だっていうなら、私も同じです！」
疾走の勢いのまま火雷明王の腕に飛びつくと、彼は呆気にとられたように綺理を見返した。
「姫君も……？　ああ、待たれよ我が姫。私が人を敵とすることはない。私の敵は――」

みなまで言う前に、火雷明王の足の下から浅葱色の光が湧き上がった。彼はとっさに綺理と冬惺を突き放し、強い光を帯びた水の太刀を蹴り飛ばす。

回転して宙を飛ぶ太刀。その中から浅葱色に光るもやが噴き出し、童子の姿に変わった。

「――君の敵はこの私かね？　乾ノ神のしもべよ」

不敵な笑みを浮かべて現れた真羅に、綺理は頭を抱えたくなった。いったいどこで間違えてこんなことになってしまったのか。もうどうすればいいのだろう、この状況は。

「現れたか、淵海の妖魔。三色の髪……同時に三人と《契約》した大淵妖とは、前代未聞な」

長身の乾ノ神衆と童子姿の大淵妖は、十数歩の距離を置いて対峙した。火雷明王は相手をきつく睨みつけ、対する真羅は余裕の表情で腕を組む。先に口を開いたのは、前者。

「私は大天火雷金翅明王。おぬしも名のある大淵妖と見受けたが、いかに？」

「『真理を網羅する者』真羅だ。よろしく、焼き鳥」

にこりと笑った真羅に、火雷明王の眉間のしわがいっそう深くなった。

放たれる殺気がますます強くなり、綺理はとにかく仲裁に入らねばと決意した。

だが綺理が行動に出る前に、金の瞳がこちらを見た。正確には、綺理の隣にいる冬惺を。

「一つただしておきたい、金蘭の末裔の少年。おぬしがあの大淵妖の憑いた太刀を手にしていたのはなにゆえだ。あれが人の正気を奪う妖刀だと知ってのことか？」

冬惺は無言。綺理と翔波はすっと青ざめ、冬惺と真羅を交互にうかがった。

「やれやれ、おせっかいな焼き雛鳥だ。――少年。《契約者》は湿ノ力に耐性があるのでね、君が正気を失うことはあるまいよ。せいぜい極度の疲労くらいだ。……そろそろかね？」

「――な」

翡翠の瞳がこちらを一瞥したのと前後して、冬惺がその場に崩れるように倒れこんだ。綺理は慌てて地面に膝をつき、力を失った彼の上体を抱きとめる。

「冬惺……！」

「……い、丈夫だ。急に、疲れただけで。心配な……い」

翔波が血相を変えてそばに寄る。冬惺は綺理の腕の中で絶え絶えに言い、ふっと目を閉じた。

そんな三人に痛ましげな視線をやると、火雷明王は真羅に向き直った。

「地上の悪妖悪鬼を討つは我が使命。人を騙し、害すおぬしを、見逃すわけにはいかぬな」

「おや、やりあう気かね？　力の制御ができずに、私の《契約者》たちを殺しかけるのが落ちだと思うが。私としてもまた鎮火を手伝わされるのは勘弁してほしいのだがね」

「また、だと？　それでは前に私が招請されたとき、既に《契約》が成っていたのか？　おぬしは文目もわかぬ子供らに《契約》を強いたというのか!?」

火雷明王は怒気を爆発させた。揺らめく炎の翼を背に顕現させ、大きく広げる。

「真羅とやら。私がこの場では小さな力しかふるえぬと思うて、侮っているのではあるまいな。おぬしを捕らえて空の高みで焼きつくしてくれる。覚悟せよ、泥人形！」

（や――）

やめて、と綺理は叫びかけたのだと思う。翼の起こす熱風に、薄色の結い紐がなびくのが見えたから。ありがとうと言ったときの、真羅のくすぐったそうな声を思い出したから。

けれどその瞬間、熱気を割るようにして響いたのは、

「死にたいのかね？」

――昨夜の面影がまるでない、ぞっとするほど冷酷な声だった。

風がやむ。火雷明王が凍りついたように動きを止める。真羅の美貌に、酷薄な笑みが浮かぶ。

「翼をもがれて淵海に落ち、そうして滅びたいのかね、雛鳥よ」

一歩、また一歩と真羅が歩を進めるごとに、異様な気配が場に満ちていく。

綺理は本能的な恐怖を覚え、守るように冬惺をかき抱いた。翔波が二人の前に盾になるように立ったが、彼の四肢も小刻みに震えている。

浅葱色の光をまとって悠然と歩んでくる真羅に、火雷明王の右手が得物に伸びた。が、宝剣を抜き放つ寸前で真羅の小さな手に押しとどめられ、微動だにしなくなる。

「私に本気を出させないでくれたまえ。ここが淵海に変わってしまうから。君もキリたちも、淵海に引きずりこまれて果てるから。……私もまだ淵海に還りたくはないのだしね？」

嗤う。ややあって火雷明王は宝剣の柄から手を離した。わずかに後ずさり、背の翼を消す。

「けっこう。話のわかるひよこでよかったよ」

真羅が手を引いて明るく笑むと、彼を包んでいた凄まじい威圧感が霧散した。
「……おぬし、ただの大淵妖ではないな。何者だ……？」
火雷明王が驚愕の声でつぶやいた。綺理は座りこんだまま呆然と真羅を見返す。
――真羅は一言で淵妖の声を封じ、乾ノ神衆をも気迫で圧した。もしかして自分たちは、想像していたよりずっととんでもない化け物を地上に招き寄せてしまったのだろうか？
「さてね。名ならば告げたよ、金の翅の明王。……それで君はいつまで地上にいる気だね？太陽が隠れるまで粘るのはやめてくれたまえよ。喉が渇くし、暑苦しい」
「……長居をする気はない。私もおぬしと顔を合わせていると短慮を起こしそうだからな」
そうかね、と真羅はあっさり火雷明王に背を向けた。太刀を拾いに戻るその後ろ姿にしばし警戒の目を向けると、火雷明王はおもむろに足元の金属塊を拾い上げた。
「それは……！」
融け崩れた守り刀だと気づいて、翔波が顔色を変えた。彼が衝動的に取り返そうとする前に、火雷明王の手の中で金属が再び融け、元の守り刀に戻る。
「おぬしの大切な物と見受けた。一度融かしてしまってすまぬな。これで許せ」
刃のほうを持って差し出された守り刀に、翔波は安堵の息をついた。守り刀を押し戴くように受け取り、礼と、先の非礼に対する謝罪を述べる。
火雷明王はそんな翔波のわきをすり抜けて、冬惺を抱く綺理の前に片膝をついた。

「我が姫。次に私を招いたときは、その腰の剣を構えて『宿れ』と請うがいい。地上の物を媒介にすれば私の力は暴走せぬし、招請者に限っては乾ノ神衆の宿った剣を使っても害はない」

（あ……『依代に直なる剣を』って、そういうこと？）

術法書の記述と、真羅が太刀に憑いたときの光景とが、綺理の脳裏にまたたく。

「それとその少年が目覚めたら、手荒な真似をしてすまなかったと伝えてくれるか」

「はい。……こちらこそご無礼をいたしました。ご寛恕とお力添え、感謝します」

綺理が頭を下げる。――それを見はからったように、火雷明王が耳元でささやいた。

「確かにあの大淵妖は強い。が、いかなる大淵妖も、核となっている勾玉を私の宿った剣で断ち斬れば葬れぬことはないのだ。おぬしら三人が、《契約》を破棄し《契約者》の呪われた軛から解放されたいと望むのなら、なおのこと――」

続けられた言葉に、綺理は弾かれたように顔を上げた。

眼前で火雷明王の姿が透け、光に溶けるようにして天上に帰っていく。空に昇っていくその光ごしに、綺理は、真羅と目が合った。

『――あの悪妖を、斬り殺せ』

四章　彼は誰

『安心したまえよ、キリ。私の守護があったから、少年の火傷はたいしたことはない』

六年前のあの日、廃屋を焼きつくした火雷明王の炎が消えた後。焼け跡の真ん中で冬惺に取りすがって泣く綺理に、真羅は優しくそう言った。

彼は翔波の呼ばう声に応じて現れ、劫火を鎮めるのに力を貸してくれたのだという。

『君たちは私が死なせない。この胸の奥にある、私の核たる玉にかけて』

――そんなことを思い出したのは、今の状況が六年前に似ているから、それだけだろうか。

綺理は、いまだ目覚めぬ冬惺の枕元に座り、火雷明王の言ったことを考えていた。

理に背いて地上にいる大淵妖。人の世を乱し、災いを生む存在。――殺すべきだと、誰もが言うだろう。綺理たちとて、異変を起こしている大淵妖を倒すために北部に来たのだ。

それなのに退治する大淵妖が真羅になった途端ためらうというのは、地上に住む者として間違っているのではないか。そしてそれは、冬惺と翔波に対する裏切りではないのか。

綺理が本当に二人を大切に思っているのなら、《契約》破棄のために真羅を殺せるはず。冬惺も翔波も、そう思うのではないだろうか……？

「綺理。本堂から君の薬箱を取ってきたけど、乾燥で亀裂が入っちゃって分解寸前だよ」
薬箱を抱えて入ってきた翔波に、綺理は振り返った。
三人がいるのは寺院の講堂だ。陣中のように床に直接布を敷き、冬惺を寝かせている。
急激に乾ノ力が強くなった木取の里は淵妖にとって居心地が悪いようで、真羅は三人の前に姿を現さない。それがいいのか、悪いのか。
「うーん、この薬箱はもう駄目ね。全部調剤して、小分けにして持ち歩くしかないみたい」
綺理が薬を選りはじめると、翔波も座って作業を手伝う。しばし沈黙が続いた。
「――あのね、翔波。ちょっと聞きたいんだけど」
言ってから、綺理はなにを問うべきか悩んだ。火雷明王のささやきの内容は教えていないし、「《契約》から解放されたい？」などと問えば真羅と同じだ。迷った末に、再び口を開く。
「もし……七年前禁忌の術を試していなかったら、私たち、どうなっていたと思う？」
翔波の手が半秒止まる。彼は綺理の左隣にいるので、片眼鏡に隠れて表情が判然としない。
「冬惺は、ずっと王都にいただろうね。護国大将軍以外の官職も辞退していなかっただろうし、冬惺の実力なら名実共に陛下の右腕となっていたはずだ。綺理も玉造の姫として確実に冬惺のそばにいた。……でも僕は、君たちのそばにはいなかったかもしれない」
「――え？」
綺理は不安に襲われて顔を上げた。まさかと思いたいが、彼は《契約》さえなければ冬惺や

自分と離別するつもりだったのだろうか。確かに彼はもともとは白桜王家方の人間ではなかったが、今はもう冬惺の従者で、自分たちの仲のよい幼なじみだと思っていたのに。

顔色からこちらの心中を察したのか、翔波は微苦笑を浮かべた。

「冬惺が僕を重用しなくなっていただろう、という話だよ。君たちは否定するだろうけどね。――少なくとも僕は、《契約》をしたのが君たちだけじゃなくてよかったと思っている。冬惺が咎を負うなら僕も負いたいと、冬惺の従者になったときから決めているから」

同じだ、と綺理は思った。自分も翔波と同じだ。たとえ時間を戻せたとしても、冬惺が《契約》をする限り、自分も彼と共に禁忌に手を染めるだろう。彼と同じさだめを負いたいから。

（でもこれってきっと、冬惺に選択の責任を負わせてるってことなんだよね……）

沈んだ気持ちで冬惺の寝顔を見下ろしていると、今度は翔波のほうから話しかけてきた。

「仮定の話をするならさ。もし六年前降神術を試していなかったら、君は薬師になっていなかったかもしれないよね。冬惺の火傷の薬を作ったのがきっかけだったんだろ？」

綺理は薬草をすりつぶしながら一つうなずく。

――正一位乾術師は希少な上に力が強すぎる。権力と無縁ではいられない。特にそれが女性であれば、慣習上、王妃になるよう定められているのだ。もし綺理が降神術を使えることが公になっていたら、野心家の父は現王妃を押しのけてでも綺理を春怜の妃にしていたはずだ。

ゆえに六年前、綺理たちは降神術の件を秘密にすることに決めた。それにあたっては冬惺の

火傷のことも周囲に隠さねばならず、治療に必要な薬も自分たちで調達することになったのだ。
（あれから本格的に薬の勉強をしたおかげで、こんなとき役に立てるようになったけど……）
調合した疲労回復の薬を碗に移し、綺理はまた冬惺の寝顔を見つめた。
大切な人が傷ついているときになにかしてあげられるというのは、とても嬉しい。だけど大切な人が傷つくのは嫌だし、いくら薬師の知識が大丈夫だと告げていても、やっぱり心配になる。もっともっと、彼のためになることをしたくなる。きっとその思いは、国一番の薬師になってどんな怪我や病気でも治せるようになったとしても、果てのないものだろう。
絞った手巾を取り、首のあたりににじんだ汗をそっとふいてあげていると、冬惺が身じろいだ。まぶたが持ち上がる。焦点が定まった琥珀の双眸が、ほっとした顔の綺理と翔波を映した。
「ああ……おまえたちは無事だったか。……くそ、いったい俺はどのくらい眠っていたんだ」
目を覚ました冬惺は気だるげに上体を起こし、ほどいた髪を片手でかきまぜた。
綺理は彼の求めに応じて、水を注いだ杯を渡す。
「起き上がって大丈夫？　もう具合いいの？　どこかおかしいところとか……」
「問題ない。単なる疲労だけだから心配するな。――俺とて、相応の覚悟をした上で真羅の甘言に乗った。代償がこの程度ですんで、むしろ拍子抜けしているくらいだ」
今しがた作った疲労に効く薬を渡すと、冬惺は苦そうな顔をしながら少しずつ飲んだ。その間、かたわらに控える翔波が、冬惺の眠っている間に起きたことや得た情報を報告する。

綺理も、自分だけが聞いていた淵妖の声の内容を二人に話した。——やはり、真羅を殺す云々のことは明かせなかったけれど。

「——情報を整理しよう」

綺理と翔波が一通り話し終えると、冬惺は思案げに顎に指を当てた。

「まず一月前に木取の里が滅びた件だが、この場所自体に狙われる理由があったとは考えにくい。異変の首謀者は、北部の村や里を手当たり次第に破壊しているだけだろう」

だが今日の昼に現れた淵妖の大群は、はっきりと綺理たちを狙っていた。「王のため」という台詞から、異変の首謀者の命令で動いていたのはほぼ確実。しかしなぜ綺理たちが、北部での淵妖退治に着手する前から目をつけられていたのか。それは不明のままだ。

「真羅が俺たちに淵妖退治をさせたがっている理由と、関係があるのかもしれないが……」

その真羅も謎だらけだ。彼がなにを企んでいるかわからないのは今に始まったことではないが、木取の里に現れた淵妖たちの声を封じたのは明らかに不審である。その上、彼はただの大淵妖ではないらしい。

「でも……とりあえず私たちの味方ではあるんだよね、真羅は」

綺理がぽつりとつぶやくと、冬惺と翔波は顔を見合わせた。

「……味方というかさ。なにか思惑があって僕らを利用しているのに加え、《契約者》に死な

れると地上にいられなくなって困るから助けもする……ってだけだと思うけど？」
確認するように言った翔波に、綺理はうつむいて膝の上で両手の指を組む。
「うん。わかってるけど、だけど……本当にそれだけなのかなって」
自分でもどうしてこんなことを言うのかよくわからない。無意識に指をいろいろ組み替えていると、そばで冬惺が苦笑する気配があった。
「ああ。おまえは真羅とけっこう仲がいいからな」
あっさりと言われ、綺理は顔を上げた。おそるおそる二人の表情をうかがう。
「……そう見える？」
「僕もそう思っていたけど。真羅が今日つけていた薄色の結い紐だって、君があげたんだろ？」
「おまえは猫とか子狐とか小さい生き物が好きだしな。――それに、おまえは優しいから。あいつが大淵妖だとわかっていても、あの態度では嫌いにくいだろう」
優しい、だろうか。だから真羅を殺せと言われて躊躇するのだろうか。自分がわからない。
冬惺は、「ただあまり信用するのはやめておけ」とだけ念を押した。彼にしろ翔波にしろ、綺理に対し気を悪くしている様子はない。それでもつい言い訳がましいことが口をついて出る。
「あのね、そりゃ私たちを《契約者》にしたのは真羅だけど、真羅だってたまたま私たちに釣られただけでしょ。だから一番の元凶というなら、私たちに嘘を教えた旅人じゃないのかな」

途中、自分の台詞になにか違和感を覚えたが、そのまま続けた。
翔波が、当時の記憶をなぞり返すように虚空に目をやる。
「まあね。僕もそれは思わないでもないよ。今にしてみるとかなり怪しい旅人だったし」
「――だが、近くにいる者のほうが恨みやすいということはある」
かすかな翳りが含まれた声に、綺理ははっとした。
冬惺の言う「近くにいる者」には、彼自身も入っているのだ。事の元凶を真羅でないとするなら、彼は余計自分ばかりを責めるようになってしまう。禁忌の術を行うと決めた自分を。
《契約》がある限り、冬惺は罪悪感に囚われたまま。そしておそらく翔波は、自身が彼に重用されているのは、その罪悪感ゆえだと考えている。
二人の心をそこから解放してあげたいと、綺理は確かに思うのだ。なのに、
『大切な誰かがいるのなら、その相手への想いも大切にしたまえ』
どうしてこんなときに思い出すのが、真羅の言葉なのだろう――。

「――にしてもさ。結局昼間の淵妖退治は、異変の根本的解決にはつながってないんだよね」
自分の思考に沈みこんでいた綺理は、翔波のため息で我に返った。
(あ……そっか。もし《契約》がなくなっても、北部の異変はなくなるわけじゃないものね。どっちにしろ、異変の首謀者をなんとかしないと)

湿ノ力に侵された病人や、苔に沈んだ状態の木取の里を見てしまった以上、後から来る乾術師部隊にすべてを任せて帰る気にはなれない。

（もともと、異変を起こしている大淵妖を退治すれば《契約》から解放されるかもって話だったし。それなら、異変を解決するまでは《契約》のことは保留にしてていい……よね）

今はまず異変のことに集中しよう。綺理はそう決めて、表情を引きしめた。

「そうね。本堂と講堂でも、異変の首謀者の手がかりは見つからなかったもの。頭の大淵妖を叩かない限りまた淵妖が集まってくるだろうし、苦労した割に進展がないというか……」

「なにを言っている。進展がない？　鈍いのはたいがいにしろ」

即座に切って捨てられ、綺理はむっとするよりもきょとんとした。

目を丸くした綺理と翔波の前で、冬惺は黒髪を結いながら不敵に笑んだ。

「大量に兵を失えばその分また募らなくてはならない。近く、淵妖が群れだって動きはじめるはずだ。――その動静を追えば、大淵妖のもとにたどりつく」

その台座の空洞から出てきたのは、紅玉髄を楓の葉形に彫った飾り玉だった。

「うわ、見つけちゃったよ。この寺院も紅楓王家の方についてたのか。……というか、なんで

みんなして、この隠し場所を知ってるのは自分だけだと思うかなあ」

翔波が投げた紅楓王家の支持者のしるしを、冬惺は片手でぱしんと受け取る。

「この村が滅びる前にこれを発見できていたら、楽しいことになっていたな。まあ寺院同士のつながりを洗わせてみれば、紅楓方に通じているやつらはほかにも出てくるだろうが」

「そりゃ期待できそう。なんだかんだ、北部の小領主にはいまだに紅楓方が残っているね」

「異変のせいもあるだろう。湿ノ力の強化や淵妖の襲撃を恐れるあまり、王都にいる白桜家より近くにいる紅楓家に庇護を求めた者は、少なからずいるはずだ」

二人が神衆像のそばで話していると、朽ちかけた堂の隅で綺理が立ち上がった。

「聞こえた！　淵妖たちが、東に行くならこの寺院を迂回しないとって話してる」

それを合図に三人は苔むした堂を足早に出た。湿っぽいシダ植物の林を走っていく。

木取の里を後にしてから五日――。

綺理たちは廃村を巡り歩きながら、淵妖の動きを追っていた。

淵妖の会話を盗み聞いて動向を探るのは綺理の役目。その淵妖が大淵妖のもとに馳せ参じる前に、滅ぼすなり淵海に還すなり始末をつけるのが冬惺と翔波の役目となる。

「小さいのが三匹か。あの程度の力の個体なら、斬るだけでも……」

淵妖の進路に先回りした冬惺が、太刀の柄に手をかけた。その前に翔波がすっと割りこむ。

「待った。そろそろ淵妖憑きの品を補充したいから、僕に任せてくれないか？」

翔波は主人にことわると、懐から碁石を三つ出した。精緻な鳥の模様が彫られたその碁石を指の間に挟み、向かってくる淵妖のほうへ手を伸ばす。

「――の理なり。理から外れしものよ、今はただ理の外でまどろめ！」

詠唱が終わると同時に、木陰を移動していた紺碧のもやのような妖たちが震えた。三匹の淵妖は引きずられるようにして翔波の手の碁石に吸いこまれ、沈黙する。

「よし、と。そのうち使役術で使わせてもらおう。それにしても真っ昼間に日なたにいる乾術師の前に出るなんて、ずいぶん迂闊な淵妖だね。飛んで火に入るようなものだろうにさ」

「それだけ大淵妖が早急に手駒を集めようとしているんだろう。だが……東はよくないな」

冬惺の舌打ちに、離れたところで見物していた綺理もうなずいた。

「……だいぶ近づいてきちゃったよね。紅楓家領に」

懐から北部の地図を出し、岩の上に広げる。地図のゆがみを考慮しつつ淵妖の行こうとしていた方角を書き入れると、すべての矢印がある狭い地域に向かっているのがわかる。

「このまま淵妖を追って行ったら、紅楓王家の勢力範囲に入っちゃう。もし大淵妖や《契約者》のいるのが紅楓家の領内なら、王都から乾術師部隊が来ても手が出せない……ってことだよね」

いくら紅楓王家の勢力が弱まっているとはいえ、異変が起こっているそばで彼らと事を構えるのは得策ではないはずだ。護国大将軍ならば、紅楓家領に攻め入るかどうかの決定権もある

だろうけど……と冬惺のほうをうかがうと、彼は難しい顔で腕を組んだ。
「大淵妖が紅楓家領にいるという傍証がほかにもあれば……その場合は、あちらに潜入して様子を探るくらいはする必要があるだろうな……」

傍証と呼べる情報が手に入ったのは、その日の夕暮れ時だった。
湿ノ力を払った野営場所で焚き火を囲んで座り、綺理は二人に見守られながら目を閉じた。
小枝がぱちぱちと爆ぜる音やふくろうの鳴き声、夜風が木々の葉を揺らす音に対して耳をふさぎ、異界――淵海から来たりしものの声だけに聴覚を傾ける。
〈呼ンデル〉〈呼ンデル〉〈呼バレテル〉
〈行コウゾ〉〈行コウゾ〉〈主サマノモトヘ〉
多くの淵妖がさざめき、ほかの同胞を誘って大淵妖のもとへ行こうとしている。会話の流れを把握してから、綺理はさりげなく自分の声をその中にすべりこませた。
〈主さまってどの主さま？〉
〈スゴイスゴイ主サマ〉〈強イ強イ主サマ〉〈名ヲ持ツホド強イ主サマ〉
淵妖の話はなかなか要領を得ないが、ここ数日で聞き出し方も心得てきた。ぽつぽつと問いを重ね、会話を望むほうへ誘導していく。

こうやって《契約者》のことも聞き出せたら楽なのにと、ちらと思う。だが真羅いわく、淵妖はほかの大淵妖の《契約》に関することは、知っていても第三者には教えられないらしい。不自然な質問をすればこちらが淵妖でないとばれるので、駄目もとでも試せない。

〈どうして主さまは呼んでるの？〉

なんとか大淵妖の目的にまで話を持っていくと、淵妖たちが遠くで楽しそうに合唱した。

〈玉ダヨ〉〈玉ダヨ〉〈玉ヲ手ニ入レルタメダヨ〉

〈大キナ玉ダヨ〉〈途方モナク大キナ玉ダヨ〉〈真四角ノ箱ニ入ッタ玉ダヨ〉

〈共ニ行コウゾ〉〈共ニ行コウゾ〉〈取リ戻スタメ――〉

淵妖と会話している間、こちらの居場所は向こうに知れる。淵妖がこちらに来ようとするのを察し、綺理は慌てて聴覚を遮断した。どっと、この世の音が耳に押し寄せてくる。

「キリ、なにか面白いことは聞けたかね？」

いきなり真羅の声がして、綺理はぎょっと目を開けた。いつの間に姿を現したのか、そばで子狐真羅が冬惺に首根っこをつかまれてじたばたしている。

「び、びっくりした。近くにいたなら真羅も同じことを聞いたんじゃないの？」

木取の里の一件以降も真羅は特に変わった様子はなく、こうして三人の後を適当についてきている。ただしょっちゅう姿を消すし、調査に協力する姿勢を示すわけでもない。

「いや、子狐姿のときは淵妖の声が聞こえないのだよ。いろいろと不便でね……っと！」

真羅は反動をつけて冬惺の手からすり抜け、綺理の膝の上に着地する。
その重みに、彼を殺せと言った火雷明王の声が脳裏をかすめ、綺理は衝動的に「真羅は私に対して警戒心なさすぎよ」と忠告しそうになった。もうなにがしたいのかわからない。
綺理は頭を一つ振ると、淵妖たちの会話を順を追って説明しはじめた。
大淵妖が異変を起こしている理由、らしきものまで語ると、少年二人が怪訝な顔になる。
「真四角の箱に入った大きな玉……？　翔波、美術品の類はおまえの専門分野だろう」
「そうだけどさ。箱に入れて奉納するような有名な大珠って、意外と数があるんだよ。北部に限定しても八つ。特に大きなものと言われたら玉造家の氏寺にある夜明の翡翠だけど……」
視線を向けられて、綺理は鼻白んだ。
「一応家宝だけど、大々的に異変を起こしてまで手に入れようって代物じゃないと思う」
あれやこれやと意見を出し合っていると、綺理の膝で丸くなっていた真羅がぱたりと尻尾を振った。彼は淵海に属する者でありながら、炎を恐れ気なく見つめて言う。
「――淵妖は言葉遊びが好きなのだよ。君たちももっと頭をやわらかくしたまえ。地面に書いてみれば一目瞭然だと思うがね」
翔波が訝しげに眉を寄せ、小石で足元の土に「真四角の……」と書いていく。
玉、と書き終えたところで、三人は同時に「あ」と声を上げた。
玉の一文字を真四角の箱で囲えば、それは。

『国』

「……瑛国を、手に入れるってこと……？」

初夏の夕、焚き火を囲んでいるというのに、綺理は薄ら寒さを感じた。

「『取り戻す』……。紅楓王家が、玉座を取り戻す……？」

翔波がおそるおそる言い、三人はぎごちなく顔を見合わせた。真羅が無言で目を閉じる。

ややあって、冬惺は己の従者をまっすぐに見すえた。平生よりも硬い声音で、下問する。

「鏡作の翔波。紅楓家領に潜入する際、おまえの土地鑑を当てにできるか？」

かつては紅楓王家に忠誠を誓う貴族であった、鏡作家。その唯一の生き残りの少年は、現在の主人の前に頭を垂れて重々しく答えた。

「幸いこの一帯は、昔いく度も訪れたことがあります。この九年で土地に大きな変化がない限り、私の記憶で十分お役に立てるでしょう。――閣下」

二日かけてシダの林を抜け、谷を越え、台地に上ると、そこには奇岩の森が広がっていた。黒っぽくごつごつした岩塊が木のように立ち並び、絡み合う蔦や樹木がその間を埋める。さながら自然の迷路のようなその森には、霧が薄く立ちこめていた。

――かわたれの森、というのだそうだ。

蔦や霧の幕ごしにこの森に迷いこんで出られなくなった者を見かけ、「彼は誰か」と口にすることになる――というのがその由来らしい。

「この道になっている部分は、下に植物の生えにくい岩脈があるんだ。だから昔あった道がふさがっているってことは滅多にない。……うん、そうだ。この道から紅楓家領側に出られる」

先導する翔波が、目印の岩を確かめながら言った。綺理は念のため冬惺の袖をつかみ、翔波の後ろ姿を見失わないようについていく。

玉造の里にいた頃と戦乱期とで山歩きの経験は豊富だが、こんな奇妙な森で一人になったらなんとかできる自信がない。翔波からはぐれたら最後だ。……と思っていれば。

「あれ？　もしかして真羅、はぐれた？　さっきまで私たちの足元にいたよね」

綺理が子狐の姿を捜してあたりを見回すと、冬惺が肩をすくめた。

「またどこかで遊んでいるだけだろう。大淵妖が森で迷うなど、間抜けすぎて笑えない」

確かに、と応じたのは翔波だった。彼は肩越しに二人を振り返る。

「でも真羅はともかく、君たちは絶対に僕から離れないでね。特に冬惺。かわたれの森で迷ったら、深刻すぎて笑えないから。死にかけるまで迷った僕が言うんだから間違いない」

さらりと明かされた不穏な経験談に、綺理と冬惺は眉をひそめた。翔波が苦笑する。

「昔さ、遊び半分に何度もここに放りこまれたことがあるんだ。あ、でも行き倒れるまでいっ

たのは最初の二回だけだよ。歩きながらだんだん道を覚えたからね。だから地図に書き起こすのは無理でも、実際に歩けばこうやって岩や山を目印に案内できる」

「――翔波。おまえ、それは」

「平気だよ冬惺。紅楓方に僕の記憶力を知っているやつはいないから。あちらにしてみれば、かわたれの森は今でも味方しか抜け道を知らない天然の要害。警戒しているはずはない」

「問題はそこじゃ……いや、いい。記憶力がいいのは便利でけっこうだが、つまらんことは適当に忘れろ。おまえの主人はもう俺だ。朔秋じゃない」

「はいはい、わかっておりますよ。冬惺公閣下」

翔波は軽い口調で答えたが、綺理にはその横顔がどこか精彩を欠いて見えた。

（このあたりって、翔波にはよくない思い出がたくさんあるのかな。……それなら、ここにいると思い出しちゃって嫌だよね。早く森を抜けないと）

綺理は冬惺と目を見交わすと、心もち足を速めて翔波の後を追った。

蔦の垂れ下がる崖のふもとに、一人の青年が西日を背にして座っていた。

青年の前には、水をたたえた青銅の水盤。

水盤に映っているのは、青年の影ではなく、奇岩の森と三人の少年少女。

古風な剣を佩いた少女が、帯につけた巾着から小瓶を取り出し、二人の少年に渡している。小瓶の中身は髪染めの薬のようで、三人はそれぞれ髪の色を染め変えていった。森の出口が近いので、目立たないようにと配慮しているのだろう。銀髪を茶に染めた少年が、南方――晶国製の高価な片眼鏡をはずし、少女の剣を代わりに腰に吊す。

「無意味なことをしますね」

青年は小さく嘲った。水盤に映る三人が再び歩きはじめるのを確認し、水面を指で弾く。

「さて。あの方のもとへは迎えを出しましたし、こちらは……」

鷹揚に立ち上がった青年は、崖に開いた洞窟の口を見やり、笑んだ。

かわたれの森の縁に近づき、気配を殺して岩陰を移動していたときのことだった。

「――待て。人の気配がする」

冬惺が緊迫した声でささやき、綺理と翔波は足を止めた。

振り返った二人に、冬惺が口元に指を一本立ててみせる。彼はしばし耳をそばだてると、おもむろに数種類の手真似を行い、最後に太刀の柄に触れた。

小さい頃、三人で遊ぶときに使っていた秘密の合図だ。その意味は。

(敵がいる。十人よりたくさん。武器を持ってる――!)

綺理と翔波は一様に青くなった。冬惺が続けざまに「撤退」の意味の合図を出す。
三人は息を殺してもと来た道を引き返そうとした。
その、矢先。
「ようこそ」
涼やかな声が鼓膜を震わせ、同時に、
「――――っ!?」
下から突き上げられるような衝撃があった。
足元の岩の地面が砕ける。一瞬の浮遊感。直後、綺理たちの体は落下に転じ、真下に口を開けた空間へとのみこまれていった。
叩きつけられる感触と共に、激しい水音が立った。
冷たい水に落ちたのだと気づき、次いで、足が底につかないことにぞっとする。
綺理は焦ってもがこうとした。だがその前に誰かの腕が胴に回り、一気に浅い場所まで引き上げられる。足首が浸かる程度の浅瀬だ。綺理はそこに座りこんだまま数度咳きこみ、緩慢にまぶたを持ち上げた。まず視界に入ったのは、濡れそぼった冬惺の背中。
「と……」
名を呼びかけた口を、ふさがれた。翔波が横合いから手を伸ばし、綺理が余計なことを言う

のを防いだのだ。横目でそちらを確かめると、翔波は冬惺と同じ方向を愕然と見つめていた。

綺理は彼の手をのけて周囲に視線を走らせ、ようやく状況を把握した。

三人が落ちたのは洞窟内の池だった。

奥半分に水がたまった薄暗い洞窟の、その最奥に綺理たちはいる。背後は岩の壁。頭上を見れば天井にぽっかりと穴が開いており、ぱらぱらと土が降ってくる。

そして洞窟の入り口側、つまり池の岸には、十数人の兵士がずらりと並んでいた。手に手に弓を構え、矢の先を綺理たち三人のほうにぴたりと向けている。

（紅楓の兵士……！）

綺理は冬惺の後ろで立ち上がりながら、忙しく考える。

なぜ彼らがここにいるのか。砦からは少し距離があるはずだし、巡回の兵にしては多すぎる。待ち伏せされていたとしか思えないが、いったいいつどこで自分たちの動きが漏れた？

視線の先で、兵士たちの中央に立つ青年が口を開いた。

「白桜の冬惺、玉造の綺理、それと鏡作の銀髪こぞうだな」

（！　なんで名前まで！）

確かに髪染めの薬は水で流れ、三人とも本来の髪の色をさらしている。しかし口ぶりからして、青年は初めからこちらの素性を知っていたようだ。

斜陽を逆光に立つ青年は、短く呪文を唱えてそばに光球を出現させた。洞窟内が薄明かりに

包まれ、青年の容貌がはっきりと照らし出される。

年の頃は二十歳前後。髪は明るい金で、ぎらぎら光る瞳は琥珀。上等な紅葉の襲の狩装束をまとい、整った顔に嗜虐的な笑みを浮かべている。

顔を合わせるのは初めてだが、綺理はもう彼が誰なのかわかった。

隣に立つ翔波が、かすれた声でその名を呼ぶ。

「朔秋……殿下……」

朔秋。季節の字を直系男子の名に入れるのは、金蘭王家のしきたりだ。王家が二つに分かれた今では、白桜家は「紅楓」に通ずる『秋』を忌避し、逆に紅楓家では『秋』を嫡男の名に使っている。つまり、彼は。

『陛下』だ。瑛国の正当な王は白桜の簒奪者ではない。この紅楓の朔秋だ！」

紅楓家の若き当主にして、翔波のかつての主人。

彼は高らかに宣言すると、冬惺をまっすぐに見すえてせせら笑った。

「無様だな、白桜の冬惺。俺の領地にねずみのように潜りこんだ挙げ句、濡れねずみになったか」

冬惺は、綺理と翔波を背にかばったまま、水のしたたる前髪をうっとうしげにかき上げる。

「そちらこそ地面の下でもぐらのように働いていたわけだ、紅楓の朔秋。洞窟の天井を割れやすく細工しておいて、俺たちが上にのったのを見はからって乾ノ術で崩したと。たかだかねず

み三匹を追いこむのにここまで手間隙かけるとは、費用対効果の悪さに呆れ果てるな」

朔秋は冬惺の落ち着きぶりに頬をぴくりと動かしたが、すぐに舌なめずりするような目つきになる。

「喜べよ、貴様のためにわざわざ歓迎の準備をしてやったんだからな。……ところで白桜の冬惺。貴様らがここに来ることを俺に教えたのが誰か、知りたくはないか？」

「聞くまでもない。どうせ、翔波だと言うんだろう？」

即答した冬惺に、翔波が蒼白になった。よろめいた彼を、綺理は寄り添うように支える。

冬惺は振り返らなかった。こちらに背を向けたまま、傲然と言い切る。

「馬鹿が。翔波が俺を売ることはありえない。見え透いた嘘で不信感を煽りたいなら、もっと結束のゆるい主従を探せ。――翔波。おまえも俺の従者なら、この程度のことで動揺するな」

「は……はい。すみません、閣下」

ほっと息をつき、持ち直した翔波。そんな彼とは対照的に、朔秋は図星をつかれたのか顔色を変えた。琥珀の瞳に憎しみの炎が燃え上がる。

「……いつまで空威張りを続けていられるかな。忘れるなよ、自分の状況を！」

後ろに控える従者と思しき青年から弓矢を受け取り、きりきりと引き絞る。

「歓迎の宴の始まりだ！　まずは舞え！」

「陶酔しきった台詞を吐くな、気色悪い！」

叫ぶや、冬惺は視認できない速さで太刀を抜き、放たれた矢を叩き落とした。
「とうせ――」
「綺理、俺の後ろから動くな！」
鳴弦の音がいくつも続き、矢がうなりを上げて飛来する。冬惺は矢を次々に叩き払っていくが、止め切れなかった数本が彼の衣服を裂き、頬をかすめて朱の筋を走らせる。
「急所には当てるなよ。殺すのは、やつを跪かせてじっくりいたぶってからだ」
兵士たちに楽しそうに命じるかつての主人に向けて、翔波が右腕を伸ばした。
「あなたの性格の悪さは変わらないな！　天にありては万物を照らす御光――」
「遅い！　万照成牙！」
朔秋もまた翔波のほうへ右腕を伸ばし、彼が使おうとしたのと同じ術を極限まで縮めた呪文で発動させた。火球が放たれる。それは遅れて呪文を完成させた翔波の右手のひらに迫り、彼の生み出した火球を相殺した。閃光と衝撃。翔波がもんどりを打って水の中に倒れる。
「貴様は変わったな、銀髪こぞう。あの従順な人形が、この俺に手向かうようになるとは」
朔秋が指を鳴らすと、なぶるように浴びせられていた矢が一旦止んだ。
肩で息をする冬惺と、うめいて身を起こす翔波。二人のそばで綺理は手に汗を握った。
（この場所と相手じゃ、分が悪すぎる……！）
自分たちと敵の間には池の深みが横たわっているから、冬惺は得意の接近戦に持ちこむこと

ができない。おまけに衣服が水を吸って重いので、動きが鈍くなる上に体力の消耗が速い。

翔波のほうも、暮れ方、日の当たらない場所、と乾ノ術を使うには条件が悪い。そして紅楓の朔秋といえば、早くに従一位まで上りつめた天才乾術師と聞く。西日の射し入る位置にいる朔秋が相手では、正三位の翔波では太刀打ちできまい。

（逃げ道は上だけだけど、蔦を登ってる間、向こうが黙って見ててくれるわけないし）

なにか突破口はないか、と綺理が必死であたりを観察していると、冬惺が舌打ちをした。

「――くそ。どうにも風向きが悪いな」

含みを持たせているのが、ごく親しい者にだけわかる言い方だった。

（形勢が悪いっていうほうの意味じゃない。風向き……風は今、入り口のほうから吹きこんでる。これを変えるとなると――そっか、これなら！）

綺理はすばやく冬惺の意をくんだ。冬惺の背中が作る死角で、翔波に手真似で指示を出す。

二人の前では冬惺が焦燥の色をにじませ、頬を伝う血を乱暴にぬぐった。

「簡単にへばるなよ、白桜の冬惺。お楽しみはこれからだ」

そう言って獰猛に笑う朔秋は、綺理のことなど眼中にないようだった。綺理が冬惺の後ろで巾着を探っているのに気づくことはなく、ぎらつく琥珀の目を翔波に向ける。

「――銀髪こぞう。貴様の手でそこの白桜のがきを引き渡せ。そうすれば貴様だけは許してやる。この俺の従者として、またこちら側に迎え入れてやるぞ」

「翔波！　こんな底意地と素行と育ちと趣味と頭の悪そうな男のたわ言など聞くな！」
相手の言葉をかき消すように冬惺が声を張り上げ、朔秋も負けじと声を大きくする。
「口の減らないがきが！　銀髪こぞう、保身のために白桜に寝返った貴様なら、もう一度変節者になるくらい簡単だろう！　ははっ、そうだ、その小刀を白桜のがきに突きつけろ！」
冬惺の後ろで、翔波が震えながら守り刀を握った手を上げる。冬惺はやはり振り返らない。
「そんなでたらめを言えば俺が振り返るとでも思うか！　あまり俺たちを見くびるな！」
「はっ、すぐに吠え面を――」
「終わりだ」
唐突に、冬惺が言った。
それが合図。
綺理が勢いよく前に飛び出す。振りかぶる。手の中の黒い玉を投げる。
同時に、背後で風が吹く。守り刀を突き出した翔波の手から、一陣の乾いた風が生まれる。
「なに……？」
矢が飛ばなくなるほどの風勢ではない。だが綺理の投げた薬の玉は、乾ノ術で生み出された風によって乾かされ、砕かれ、粉となって朔秋たちのもとまで届いた。
薬の粉が、黒い煙のように彼らを覆う。
「こんなお粗末な目くらまし、すぐに……――!?」

朔秋は乾ノ術で煙幕を吹き散らそうとして、黒い粉をまともに吸いこんだ。途端、大きくよろめく。ぐにゃりと歪んだ視界の中におぞましい化け物の姿を幻視し、彼は絶叫した。

「うわあぁぁぁああ！」

兵士たちも黒い煙の中でばたばたと倒れていく。

彼らの手から弓がこぼれ、矢があらぬ方向へと飛んでいった。どの兵士も目を限界まで見開き、それぞれ虚空を見つめては奇声を上げる。

「わあぁぁっ！　ば、化け物だぁあ！」

「ぐわあぁぁぁっ」

叫べば叫ぶほど薬の粉を吸いこみ、さらに神経系を侵されていく。

のた打ち回る彼らの視界は幻覚に占領され、すばやく蔦を登って洞窟から逃れていく綺理たちの姿は、もはや誰の目にも映っていなかった。

三人の姿が上方に消えた後。

倒れた朔秋の下敷きとなっていた黒髪の青年が、主君の体を乱暴に押しのけて立ち上がった。

彼は、兵士たちが転げ回る黒い薬の煙の中で、平然と独りごちる。

「なるほど。大音声での応酬に紛れて、鏡作の翔波が風を起こす術の詠唱をしていたと……。

いつ打ち合わせをしたのやら、見事な連携ですね。――まあ、逃がしはしませんが」

夕色に染まったかわたれの森を、綺理たちは来たときとは逆向きに走っていた。

衣服の水気は翔波の乾ノ術で払ってもらっている。冬惺もあちこちに裂傷を負ってはいるものの、洞窟での疲労しきった演技ほどには消耗していない。三人の足取りが乱れることはない。

「綺理。さっき使った黒い玉は、結局なんだったんだ？」

「あの玉？　擬蝙蝠の粉の塊よ。幻覚作用があるから、今頃すごい悪夢を見てると思う」

綺理は走りながら答えた。薬箱が壊れたため、しかたなく手持ちの薬種をすべて調剤して携帯していたのだが、それが逆に功を奏したようだ。

「悪夢、ね。俺にとってはあの紅楓の若様の存在自体ができの悪い悪夢だよ。去年戦場で見かけたときは人並み以下の腰抜けだったのに、なんなんだあの変態ぶりは……」

心の底から嫌そうに言った冬惺に、前を行く翔波が暗い声を出した。

「でも……さ。殿下……じゃない、朔秋は、どうして僕らを待ち伏せできたんだろう。当主自らこんな所領の端まで来ていたのは、異変に対処するためだったとしても……」

それは根本的な疑問だ。綺理はいつもの癖で、頭の良い従兄の横顔をうかがう。彼は怜悧な

琥珀の瞳を細め、忌々しげに言った。

「俺たちはここしばらく他人と接触していなかったし、情報を漏らすようなへまもしていない。密偵が張りついていれば俺と真羅が確実に気づいた。人間の密偵ならばな」

「！　それじゃ、どこかで淵妖が関わっていたってこと？」

「淵妖がらみでもなければ予測不能な危機にほいほい陥ったりは――」

前触れなく、冬惺が口をつぐんだ。彼は翔波の肩をつかんで足を止めさせ、自分が前に出る。

「な、なに？　どうしたの冬惺」

綺理が翔波の横で急停止した、そのとき。

――薄い霧の向こうから、人影が一つ近づいてきた。

ざわりと肌が粟立つ。足音もなく歩み来るその人影のほうから、生ぬるく湿った空気が流れてくる。日はいつの間にか落ち、奇岩の森は不気味なほど静まり返っていた。

「――俺の大嫌いな、不測の事態というやつだ」

冬惺が太刀を抜く音が、綺理の耳にすべり入る。

やってくる人影は紺青の装束をまとい、刀を佩いていた。確か、朔秋の後ろに控えていた青年も同じ恰好をしていた。同一人物だろうか。洞窟では容姿が判然としなかったが……。

「お久しぶりです」

「！」

聞き覚えのある涼やかな声で、人影――青年が言った。洞窟に落ちる前に聞いた謎の声と同じ。いや、自分はもっとずっと前にこの声を聞いたことがある！

霧が流れ、青年の容貌があらわになる。

長く黒い髪。薄暗がりの中で輝く、澄んだ赤褐色の瞳。そして人形のように整ったその顔は、七年前綺理たちに禁忌の術を教えたあの旅人と、寸分違わなかった。

ここはかわたれの森。――彼は、誰。

「――っ、なんでおまえが、あのときのままの姿で！」

翔波が声を荒げ、見た。

片眼鏡をはずしている今、彼の右目に起こった変化は誰の目にも明らか。

青銅の目が瞬時に銀に変じ、真澄の鏡のように青年を映してその正体を看破する。

「おまえ、大淵妖だったのか！」

断言。綺理の全身を戦慄が駆け抜けた。七年前の旅人の言葉が耳に蘇る。

『勾玉で釣りをなさいませ。月影さやかな望月の夜に、淵海に釣り糸を垂らしませ』

『さすれば善事が釣れましょう。良き運命が釣れましょう。いかなる願いも叶いましょう』

なぜ気づかなかった。淵妖は独特の対句や繰り返しを好む。人ならざる美貌。赤褐色――赤

瑪瑙の瞳。彼は、赤瑪瑙の勾玉で地上に釣り上げられた大淵妖だ！

青年は口元だけでうっすらと微笑んだ。

「鏡作の翔波の右目は、淵妖を照破する鏡……ですか。よくぞ一目で見破りました。改めまして。私は淵海の深淵より来たりし大淵妖、『刹鬼を利する者』刹利です」

優雅に一礼した刹利に、冬惺が強張った顔のまま太刀を構えた。

「おまえが、北の異変を起こしている大淵妖なんだな。《契約者》は誰だ。紅楓の朔秋か？」

刹利のほうも腰の刀をすらりと抜き、冬惺を牽制する。

「まずは一つはご明察。異変は私の仕業です。ですが私にそれを命じたのは、《契約者》などではありません。私はとうの昔に《契約》を果たし終え、自由の身となりましたから」

「……それなら、紅楓王家が玉座を取り戻すためじゃないというのなら、あなたはいったい誰の命令で異変を起こして、この瑛国を手に入れようとしているっていうの？」

綺理はぐっと顎を引いて詰問した。素直に明かすわけはないと思っていたのだが、予想に反して刹利はあっさりと答えた。あっさりと、恐ろしいことを言った。

「ああ。北瑛島を淵海に沈ませるというのは、万宵さまのご命令で行っていることです」

（――――!?）

顔面から血の気が引いた。記憶の光景が頭をよぎる。七年前あの旅人――刹利は、北瑛島に見立てた葉を淵海に見立てた水たまりに沈めていた！



ことは北部に限らない。彼は瑛国中で湿ノ力を強め、大地を淵海に同化させようと企んでいるのだ。まさしく国ごと、島ごと、淵海に引きずりこんで手に入れようとしているのだ。

（それを命じたのって……）

「その万宵っていうのは、何者なんだよ」

綺理の心を読んだかのように、翔波が低く問うた。利利はやはりさらりと答える。

「妖王陛下のことですよ。淵海に坐す我らが王、『万の宵を統べる者』万宵さまのことです」

「……妖、王」

淵妖の王。そんな途方もない存在がこの地上を狙っているというのか。今立っている地面の下で巨大な闇がうごめいているような感覚に襲われ、綺理は背筋が寒くなった。

慄然とした三人に、利利はひどく禍々しい笑みを浮かべてみせた。

「ええ。その妖王陛下のご分身が、真羅さまですよ」

数秒――、

綺理はなにを言われたのかわからなかった。

ゆるゆると利利の言葉を吟味する。分身。淵妖の本性は泥だ。体の一部を切り離して分身を作るくらいできるだろう。……それでその妖王の分身が誰だって？

綺理の理解が追いつく前に、利利はくすくすと笑ってたたみかけた。

「妖王陛下は北瑛島を沈めるため、御身を二つに分けて地上にいらしたのです。愚かな子供を

騙してご自分を地上に招かせるよう、この私にお命じになったのも、真羅さまなのですよ」

――真羅は妖王の分身で、ずっと前から刹利と通じていた。

そう考えると、辻褄の合うことがありすぎる。

真羅が垣間見せた強大な力のことや、紅楓方に情報が漏れていたことだけではない。

月が赤く染まるのは淵海から強い気が立ち昇っている夜。禁忌を犯したあの夜も、空にはあかがねの月がかかっていた。――それは真羅が、その夜勾玉の釣り針が落とされるのを知って、淵海の浅みで待ち受けていたからだ。

大切な相手との約束のために地上にいる、と真羅は言った。その相手とは、約束とは。

いつかの自分の言葉を思い出し、綺理は唇を強く噛んだ。

『真羅だってたまたま私たちに釣られただけでしょ。だから一番の元凶というなら、私たちに嘘を教えた旅人じゃないのかな』

違った。

すべては、真羅が仕組んだことだったのだ――。

「――おまえが真実を言っているという証拠は？」

凍りついた空気の中で、冬惺が冷静に言った。否、冷静であろうとする口調で言った。

「刹利、おまえは人を騙す大淵妖だ。虚言を弄して不信感を煽るくらいお手の物だろう」
「真羅さまも人を騙す大淵妖ですよ。不信感とは、まるで真羅さまを信用なさっていたようなことを言いますね」
「あいつを信じているんじゃない、おまえを疑っているんだ。俺たちに内情をぺらぺら話すことからして最大級に不審だし、もしおまえと真羅がぐるだというのなら、真羅が隠していたことをおまえが暴露するのは道理に合わない」
そう語る冬惺の背中は、一見揺るぎなく見える。だが綺理には、彼が自分や翔波と同様、少なからず衝撃を受けているのがわかった。
「そうですね、確かにおしゃべりが過ぎました。冥土の土産を弾みすぎました。そろそろ終わりにいたしましょう。紅楓の虜囚となっていただきましょう」
歌うような刹利の言葉に重なって、前後から複数の足音とたいまつの光が近づいてきた。
「冬惺！　紅楓の兵士が！」
翔波が右目を元に戻し、警告を発する。だが冬惺は動かない。動けないのだ。刹利と対峙したまま、斬り込む隙も退く隙も見出せずに膠着状態に陥っている。彼の額に汗がにじむ。
（多勢に無勢……。まずいわ、日が暮れたから乾ノ術はもう使えないし、このままじゃ三人とも……）
槍を手にやってくる兵士たちに、綺理はきっと目許を険しくした。真羅のことも妖王の企み

のことも、今は頭から追い出す。考えるべきは、この状況を切り抜ける手段だ。利利の気をそらし、兵士の挟撃をかいくぐり、かわたれの森の道を熟知する彼らをまく方法。

（守らなきゃ。冬惺は自分のことを守ろうとしないから、私が冬惺を守らなきゃ！）

兵士たちが続々とやってくる。たいまつと槍の穂の煌めきが道を埋めていく。

そのとき、綺理の脳裏に一つの策が天啓のように閃いた。

「……猫を追っかけたときのこと、覚えてる？」

二人だけに通じるように言う。翔波がうなずくのを確かめ、綺理は巾着に手をつっこんだ。たいまつを掲げた兵が利利の後ろに来た、その瞬間を見はからって、

「行って！」

叫び、地を蹴り、利利に迫る。手に握った薬包をたいまつに投げ入れる。

「――な!?」

毒ならば効かないと見くびっていた利利が、驚愕の声を上げた。兵士たちもどよめく。包まれていた鉱物の粉がぱっと炎に舞った途端、たいまつが数倍に膨れ上がったのだ。

乾きを恐れる淵妖は火を嫌う。利利は条件反射のように大きく体勢を崩し、炎をかわした。

綺理が再び巾着に手を入れるのを見て、彼はぎくりと顔色を変える。

（かかった）

激しく炎を上げる類の鉱物薬は、今使ったのが手持ちのすべてだ。だが利利はそうとは知ら

ず、まず綺理を取り押さえようと跳びかかってくる。

「綺理！」

冬惺が切羽詰まった声で叫ぶ。綺理は腕をつかまれて引き倒されながら、叫び返す。

「行ってって言ったでしょ！」

地面に押しつけられる間際、一瞬冬惺と目が合った。

琥珀の双眸を彩っていたのは、恐怖に近い感情。冬惺は衝動に駆られたようにこちらに走り寄りかけ、翔波に制止される。ほんの、秒に満ちるか満たないかの間のことだ。

翔波が己の主人の腕を乱暴につかみ、共に綺理の視界の外に消える。それを確認した直後、綺理は首筋に衝撃を感じ、意識を失った。

五章　心の在り処

「白桜の冬惺と銀髪こぞうに逃げられただと？」
夕闇に包まれたかわたれの森の入り口で、朔秋は腸が煮えくり返る思いで報告を受けていた。
「やつらを狩り出すのに何十人もの兵を使っておきながらその醜態とは、さぞや愉快な言い訳が聞けるんだろうなぁ？　ええ？」
激怒した主君の前でひたすら平身低頭するのは、冬惺たちを追跡していた一団の隊長だ。実際に指図していたのは刹利だが、兵士たちはみな暗示にかけられてそのことを忘れている。
「も、申し訳ございません！　まさかやつらが岩の上を逃げるとは思わず……」
さすがに少女にしてやられたとまでは報告できず、隊長は標的の逃走経路のみを強調した。
――冬惺と翔波は、迷路を作る奇岩に上って逃げおおせたのだ。
彼らは猫のような身軽さで岩の上に乗り、岩の連なりの上を走ったり岩から岩へと飛び移ったり、道を完全に無視して森の奥へと逃れていった。追っ手側に弓兵がいれば二人を射落とすこともできただろうが、入り組んだ迷路の森に弓矢を携えて行く者はいなかった。
「もういい、この無能めがっ。貴様は降格だ。下がれ！」
朔秋は平伏する部下を蹴りつけると、ぎりっと歯軋りした。

「刹利！　結局手に入ったのは、おまえが捕らえたその女だけか？」
朔秋は苛立った声で叫び、馬のそばに立つ側近の青年を振り返った。
刹利の腕には、ぐったりとした金髪の少女が抱かれている。
「ええ朔秋さま。ですが彼女さえいれば、あの二人を誘い出すことも容易いでしょう。なんといっても玉造の綺理は、白桜の冬惺の事実上の婚約者と聞きますから」
冬惺の名に、朔秋はぴくりと眉を上げた。彼は、擬蝙蝠を服用した前後の記憶が曖昧になっており、薬の玉を投げたのが誰だか忘れている。そのため、今の今まで綺理にはたいして注意を払っていなかったのだが、刹利の言葉で急に興味を引かれた。
「ふん……やつの女か」
朔秋は歩み寄ると、意識のない綺理の髪をつかんで仰向かせ、しげしげと眺めまわす。
やがて彼はにやりと口角を上げ、自分の馬にまたがりながら命じた。
「刹利、狩りの続きはまた明日だ。――その女を砦に連行しろ」

走る。走る。頭の中で風が吹き荒れるのを聞きながら、奇岩の森を駆け抜ける。
「ここまで、来れば、平気……かな。暗くなったから、向こうも、今夜は、諦めるだろうし」

翔波が呼吸を整えつつ言うのを聞いて、冬惺はようやく足を止めた。そばの岩に背中をつき、そのままずるずると座りこんで顔を右手にうずめる。

汗が全身を伝う。洞窟内で負ったいくつもの裂傷が今になってずきずきと痛み出す。疲労感が手足に泥のようにからみ、体が重い。そして心が、一番重い。

（綺理……！）

光そのもののような金髪の少女が大淵妖に捕らえられたときの光景が、いく度も冬惺の脳裏で繰り返される。力なく投げ出した左手を握れば、拳の中に泥の入る感触があった。

守ると誓ったのに、絶対に守らなくてはならなかったのに、彼女は泥の化け物の手に落ちて紅楓王家に囚われた。自分のこの手はまた泥しかつかめない――。

「――惺、冬惺。閣下！」

肩を強く揺さぶられ、冬惺は顔を上げた。

翔波が感情を押し殺した目でこちらを見ている。彼は、綺理に持たせられていた傷薬の包みをかたわらに置くと、水筒の栓を抜いて顎をしゃくった。

「とりあえず手当てするよ。傷見せて」

ひどく淡白な声に、冬惺は頭の奥がかっと熱くなった。

翔波が左袖を勝手にまくって傷を出すのを見て、理不尽な怒りがこみ上げてくる。

（どうしてこいつはこんなに落ち着いていられる。なぜこいつは――）

「――なぜおまえは綺理を置き去りにした！」

衝動的に、右手で翔波の胸倉をつかむ。八つ当たりだとわかっていてもやめられない。綺理に駆け寄ろうとして翔波に阻まれたときのことを、叫ばずにはいられない。

「なぜあのとき俺だけを助けるような真似を！　おまえさえ、おまえが止めさえしなければ――、っ!?　だっ……」

いきなり、控えめに言ってもかなり優しくない手つきで傷口を洗われ、冬惺は悶絶しかけた。翔波の胸倉を放し、痛みに顔を引きつらせる。

「放せこの馬鹿従者、傷口を広げる気かっ。おまえの手当てからはいたわりが感じられん！」

「そりゃこめてないからね、いたわりも愛も気遣いも。――この馬鹿閣下」

怒りを含んだ呼びかけに、冬惺は思わず口をつぐんだ。

「君は判断を間違えた。僕が止めなければ、せっかく綺理が作ってくれた隙を無駄にしていた」

そうだ。それが正論だ。頭ではわかってはいるが、それでも冬惺は拳を強く握る。

翔波は優しくない手当てを続けながら言葉を重ねた。

「あの状況で全員で逃げるのは無理だった。一人囮になるとしたら綺理しかいない。僕がいなけりゃ君たちは迷子になるし、君が朔秋に捕まっていたら最悪なことになっていた」

「……綺理ならば捕まってもいいと言うのか」

「まだ危険度は低いよ。朔秋の狙いは君個人みたいだからね」

主が冷静でない分自分が冷静であろうと気張っているのか、翔波は淡々とした口調で返す。

だがよく見ればその顔は、洞窟以来のたび重なる衝撃で青ざめていた。

そもそも彼とて、綺理の身を案じていないはずがない。もしも冬惺が落ち着いていれば、取り乱していたのは翔波のほうだったはずだ。

「元主人の性格くらい、ある程度把握してる。あいつは、君を捕まえるまでは綺理を傷つけるのを我慢するはずだ。――朔秋の大好きな遊びは、獣の親子をあえて無傷の状態で捕獲して、一方の目の前で他方を痛めつけることだったから」

言って、翔波は嫌なことをまざまざと思い出したように瞳を翳らせた。その様に冬惺はようやく自分を取り戻し、表情を引きしめた。

「――わかった。おまえの性格分析能力を信じよう。……悪かったな」

冷えた頭で、改めて考える。利利が表向き朔秋の意に従っているのは間違いない。しかし実際は、利利が自分の野望のために朔秋を利用しているだけだろう。

（利利……あいつの話には、はっきりさせるべきことが大量にある。妖王のこと、淵海の策動のこと、真羅のこと。だが……）

冬惺は思考を切り替えるように頭を一つ振った。

情報が錯綜しているからといって、それに振り回される必要はないのだ。

（目的を見失うな。俺たちが北部に来たのは、異変を起こしている大淵妖を退治するためだ）

この際、白桜と紅楓の因縁は二の次だ。今この地で冬惺たち三人がすべきなのは、刹利を倒すこと。その邪魔をするものがいれば誰であれ排除する。それだけだ。

冬惺は琥珀の瞳を険しくし、迷いなく言う。

「綺理を助け出し刹利を倒す作戦を立てる。翔波、おまえの記憶する限りの情報を提示しろ」

いつもの調子に戻った彼に、翔波はほっと息をついた。

「はい。御心のままに、閣下」

翔波の信頼しきったまなざしを受け止めて、冬惺は我知らずつぶやいていた。

「……絶対に取り戻す。あいつは、綺理は俺のだ……」

綺理は薄闇の中で目を覚ました。

板の間の上でのろのろと身を起こし、あたりを見回す。

狭く、じめじめした部屋だ。明かりはなく、調度も窓もなく、空っぽの物置のような場所。

（ここ……どこかの邸の中……？――って、そうよ。私は刹利に捕まったんだ！）

意識を失う前のことを思い出す。大量の情報がどっと頭に押し寄せてきた。

刹利。北部の異変を起こしている大淵妖にして、七年前自分たちを騙した旅人。淵妖の王の命で北瑛島を淵海に沈めようとしている。その妖王は体を二つに分けていて、淵海にいるほうの名が万宵、地上にいるほうの名が真羅。

（――真羅）

思えば自分たちを北部に連れてきたのは彼だ。もし彼の目的が、綺理たちを紅楓王家方に引き渡すことだったとしたら？　白桜王家の王弟と、白桜の王権を支える大貴族の姫が紅楓の虜囚となり、あまつさえ殺されでもすれば、十分戦の火種になる。

（それ……だけじゃ、ない。私たちが《契約者》だと暴露されたら、白桜の権威が地に落ちかねない。そうなれば紅楓が勢力を巻き返して、なかなか勝敗が決しなくなる。戦が長引く）

大淵妖は世を乱すことを好む。世が乱れれば人の心も乱れ、乾ノ神衆に捧げられる祈りも減る。地上に来る乾ノ力が減り、淵妖はますます北瑛島にはい上がってくる。そして――。

綺理は急に寒気を覚え、自分の肩を抱いた。

もしも。もしも自分が真羅を味方だなどと思わなければ。彼を退治していれば。こんな事態にはならずにすんだのだろうか。少なくとも、こうして囚われるような事態には。

（あの後、冬惺と翔波はどうなった……？　私はこれから、どうなるの……？）

ひどく寒い。暗がりの中で独りきりなのだと意識すると、かたかたと手が震える。

――その甲に、ふと、髪結い紐の房が触れた。

冬惺にもらった蓬の組み紐だ。

綺理ははっとして髪をほどき、泥で汚れたその組み紐をお守りのように握りしめた。

（……大丈夫、大丈夫。冬惺……冬惺、冬惺）

胸中で冬惺の名を繰り返していると、次第に震えがおさまってくる。

（大丈夫。冬惺たちはちゃんと逃げられたはず。冬惺が無事なら、私も大丈夫）

混乱が鎮まれば腹も据わってくる。綺理は深呼吸を一つすると、髪を手早くまとめ上げた。仕上げに蓬の組み紐で髪をぎゅっと縛り、気合いを入れる。

（そうよ。自分から囮になったんだから、弱気になってちゃ駄目！　今はここから逃げることを考えないと。冬惺と翔波は必ず私を助けにくる。だから私もそれまでにできることをする！）

そうと決まればまずは状況の把握だ。というか、装備の確認。

ぱたぱたと自分の体に触れる。装束は捕まったときのまま。ただし薬の入った巾着はない。帯に挟んであった道具類や、懐に入れていたこまごました物も、すべて消えている。

「剣……は翔波に預けっぱなしよね。身分証の鏡は紅楓家領に入る前に隠してきたでしょ。薬師の手袋は再発行できるし……あれ？　私の懐を探って持ち物を取り上げたのって誰……？」

「そのくらいの女手は砦にもあります」

「うきょあぁぁ！」

耳元で涼やかな声がして、綺理は奇声を上げた。転がるようにして壁際まで移動し、背後に出現した大淵妖を振り返る。

「せ、刹利っ。人間のふりするならもっと人間らしい入り方しなさいよ！」

「戸を開ける手間を忘れたくらい些細なことでしょう。……ずいぶん余裕がありますね？」

くすくすと笑う美貌の青年を、綺理は侮られてなるかと睨みつけた。

「あなたこそ余裕よね。私が朔秋たちにあなたの正体を明かしたらどうなるかしら？」

「信じませんよ、誰一人。その程度の暗示は可能ですから。そうそう、あなたのお持ちになっていた薬はすべて没収させていただきました。あなたはなかなか危険な方のようですので」

「……そう。私を過小評価しないでいただけて嬉しいわ」

冬惺を真似て皮肉っぽく返しながら考える。先ほどの刹利の台詞によれば、ここは砦の中らしい。紅楓家領に潜入する前に翔波から聞いていた情報と、急いで照らし合わせる。

（かわたれの森から浅い谷一つ越えたところに砦がある……って言ってたから、たぶんそれよね。この近くに里があった頃、防衛のための見張り台として造られたものだっていうから、規模はそんなに大きくないはず。――それと、当たり前だけど朔秋は刹利の正体を知らない）

「ところで私がこれからどうなるのか、多少は教えていただけるんでしょうね？」

会話を続けてもっと情報を拾おう。そう決めて、綺理があえて高飛車に尋ねたときだった。左手の戸が大きく開いた。廊下から燭光が射しこみ、金髪の青年が部屋に入ってくる。

「刹利、女は――ああ、起きているな」

朔秋は刹利から綺理へと視線を動かすと、大股でこちらに歩んできた。光を入れるためか、戸は開け放したままだ。廊下の様子から今が夜だとわかる。

綺理は立ち上がりかけたところで朔秋に上衣の裾を踏まれ、床に縫いとめられた。

「髪は金蘭の金だが、瞳は玉造の碧玉か。惜しいな」

物品を見るような不躾なまなざしで見下ろされる。冬惺と色は同じだが全然違う琥珀の瞳を、綺理は負けじと睨み上げた。

「生意気な目つきは白桜の冬惺に似ているな。ああそうか、貴様はやつの従妹でもあるのだったか。やつは洞窟でも貴様を大事そうにかばっていたし、確かにやつらを誘い出すいい餌になりそうだ」

（！　それじゃやっぱり、冬惺と翔波はちゃんと逃げられたのね。それに餌ってことは、私がすぐに殺されることもない）

確信を得られて、綺理は内心安堵の息をついた。

が、その直後。

「目の前で自分の女をめちゃくちゃに壊されたら、やつはどんな顔をするだろうなあ……」

朔秋のねっとりした笑みに、ぞわりと鳥肌が立った。恐怖感よりも、生理的嫌悪感から。

（……や、やだ。こういう性格の悪さは無理。絶っ対に相容れない。こんなのの従者をさせら

れてたなんて、七歳までの翔波が可哀想すぎる……）

綺理の体に走った震えを怯えと勘違いしたのか、朔秋はますます笑みを深くする。

「やつの婚約者を俺の妾にしてやるのでも面白いか。金蘭の血を引くだけあって、見られない顔じゃないしな。――よし。やつが貴様を助けに現れたら、捕らえて一緒になぶり殺しにしてやる。現れなければ貴様は俺の女だ。そっちなら貴様にとっては望外の幸せになるなぁ？」

（いっ……）

綺理の皮膚にこれ以上ないというほど粟が生じた。思わず上ずった声で叫ぶ。

「じょ、冗談じゃないわよ。冬惺以外の人なんて願い下げです！　それに冬惺はあなたなんかには負けないもん。あなたのどっちの思惑通りにもならないもん！　だいたいどういう思考してるのあなたは。なんか白桜王家というより冬惺個人を憎んでるみたいだけど――」

「当然だ。やつの存在すべてが癇に障る！」

突然、朔秋の顔が憎悪に歪んだ。彼は恨みの言葉を、歯の間から絞り出すように言う。

「乾ノ術すら使えない金蘭の外れ者の分際で、やつは俺のものをことごとく奪った。俺の従者を掠め取り、俺が王都に攻め上ったときも行く道を阻み、紅楓の所領と支持者を次々に削ぎやがったんだ。おまけにやつは『殿下』の敬称を俺から奪っておきながら、使っていない！」

「……や、最後のは本人の自由だと思うんだけど」

冬惺は出生を長年疑われてきただけに、血筋によって付与される敬称には価値を見出してい

ない。だから彼は王弟でありながら、自らの戦功によって手に入れた護国大将軍の官職に付随する『閣下』を使わせているのだ。

思わずぼそりとつぶやいてから、綺理は違和感に気づいた。

（待って、おかしい。どうして朔秋は、私たちが三人だけで紅楓家領に来た理由を聞いてこないの？　淵妖関係のことを全然知らないみたいなのに、どうして王弟や大貴族の姫が敵地に潜入してるっていう情報を信用したの？　この状況を疑問に思ってないの？）

「玉造の娘。貴様は、白桜の冬惺と銀髪こぞうをおびき出す餌になるんだよ。そして、やつを絶望させる材料にな。……明日を楽しみにしているがいい」

朔秋は両の目を尋常でなくぎらつかせ、喉を鳴らして笑う。

（やっぱり、私の身柄を玉造家との取り引きに使うこともまったく考えてないみたいだし）

彼は政治的な計算を無視し、あらゆる齟齬をも気に留めず、ひたすら冬惺への憎悪で動いているように見える。いくらなんでもその視野の狭さは不自然だ。

綺理が怯えた演技をしてみせると、朔秋は満足したように部屋を出て行った。

彼に続いて去ろうとした刹利に、綺理は確信をこめて声をかける。

「――刹利。あなたは朔秋に暗示をかけたのね？　もしかして、七年前、私たちにも……？」

刹利は戸の隙間からこちらに一瞥を投げ、赤瑪瑙の瞳を狐のように細めた。

「賢く愚かな小姫君。あなたはもう少しご自分の身を案じていたほうがよいですよ？　私が真

羅さまの《契約者》を一人も殺せないと思って高をくくっているのなら、大間違いですから。……それでは、せめて静かなよい夜を」

利利の足音が遠ざかった後、綺理は閉ざされた戸に向かって行儀悪く舌を出した。

「残念。利利、あなたはやっぱり玉造の綺理を過小評価してるわよ」

綺理はつぶやくと、上衣の裾に歯を立て、縫い目を思い切り引きちぎった。

衣服が破れてしまったので、繕い物用の針を返してほしい。

捕虜の少女がそう訴えているとの報告を受け、利利は生ぬるい笑みを浮かべた。

「見えすいた真似を。彼女の所持していた針には、睡眠薬が塗られています。それを取り戻す口実にと、衣服を自分で破いたのでしょう。無視なさい。……ほかに変わったそぶりは？」

問われて、廊下での見張り番を交替してきたばかりの兵は肩をすくめた。

「白桜方の姫というのは、みんなあんなに気が強くて疑り深いんですかね。飲み水と体を清める布が欲しいというので小間使いに行かせましたが、あの姫は、水に変な薬が入ってないと証明しろ、と言って小間使いに毒見させていましたよ。戸越しにも聞こえるすごい剣幕で」

利利は「おやおや」と眉を上げ、小馬鹿にした口調で言った。

「薬師らしい疑心暗鬼ぶりですね。では食事の差し入れは控えておきましょうか。……それと、

明かりを要求されても決して火を渡さないように、と見張りに伝えなさい」

囚われの身でできる限りの小細工を試すと、綺理は部屋の隅に座って壁に背を預けた。

（冬惺……今、どうしてる？　翔波が一緒なら、迷ったりする心配はないと思うけど……）

かすり傷とはいえ冬惺は怪我をしていた。彼の頬を伝う生々しい血の色が脳裏にちらつき、とんでいって手当てをしてあげたいという思いがこみ上げてくる。

（あ、駄目。ものすごく心配。翔波の手当ての腕って信用できないもん。翔波も紅楓家領に入ってからずっと元気なかった……っていうか、なんだかぐらついているみたいだったし。それに二人とも、寝食忘れて気力だけで動くようなところがあるから、無茶してないか気になるな……って、よく考えたら冬惺たちのほうが私のことを心配してるよね……）

綺理はため息をつくと、湿った闇の底で目を閉じた。なにか少しでも情報を得られないかと、淵海より来たりしものの声に耳を澄ませる。

だが、今夜はひどく静かだった。刹利の集めていた淵妖たちが近くにいるはずなのに、あたりは薄気味悪いほど静まり返っている。不安が胸に立ちこめ、綺理はなにか音を拾おうと必死に聴覚の網を広げた。

そうして、どれほどの時が過ぎた頃だったろうか。

――一つの声が、聞こえてきた。

彼が自分たちの前に姿を見せることは、予想の範疇だった。
だから斜向かいの岩の上に童子が忽然と現れたとき、冬惺は動じなかった。昔二人で考えた暗号を使っての作戦会議を中断し、翔波と共にそちらを振り仰ぐ。
「昼から長いこと、いったいどこで遊んでいたんだ？――真羅」
声をかけると、真羅は疲れたような面持ちで腰のひょうたん水筒を手に取り、また戻した。
「さてね。……それよりキリが、谷の向こうの砦に囚われたそうだね。取り返したくば明日の朝のうちに砦に来い、と兵士があちこちで呼びまわっていたが、聞いたかね？」
「やはり明朝か。それなら俺たちに手勢を連れて戻る猶予はない。妥当なところだ」
至って冷静に言う冬惺に、真羅は不審げに首を傾げた。岩からふわりと飛び降り、しろがねの月明かりの下、夜露に濡れた夏草を踏み分けて歩んでくる。
「夜が明けて乾ノ術が使えるようになったら、キリを助けに行くのだろう？　私も手伝おう」
「……手伝う？」
冬惺はゆっくりと聞き返した。翔波がさりげなく片眼鏡をかけ、真羅を見やる。

「君なら、砦の中に入って簡単に綺理に会えるんじゃないのかい？」
「いや。淵妖は通れる場所の基準が人間と違うだけで、どこでも自在に出入りできるわけではないのだよ。それにあちらの砦には、どうにも目を盗めない相手が滞在しているようでね」
大淵妖が砦にいることを知っている、と暗に認めた真羅に、冬惺はにこやかに笑った。
「真羅。異変を起こしている大淵妖がおまえの知己だということを、なぜ隠していた？」
猫なで声で問うと、真羅はうそ寒いものを感じたように歩みを止めた。
「おまえがいない間にいろいろと面白い話を聞いた。七年前のことも含めてな。真羅さま」
「！　刹利に会ったのかね？」
思わず、といった風情で真羅がその名を出した瞬間、冬惺は太刀を抜き放った。
一閃。真羅はぎょっと横にとびのいて初太刀をかわす。が、冬惺はそのまま踏み込み、彼を岩のもとへと追いつめた。岩肌に背をつけた真羅の喉元に、切っ先をぴたりと突きつける。
「少年っ、刃物で遊んでいる暇があるのかね。今は協力してキリを救うのが最優先では――」
「ああ。だから言葉で遊んでいる暇もない。本題に入る。まずはおまえが淵妖の王の何で、どんな企みを持って地上に来たのか、おまえの口からも聞かせてもらおうか」
叩きつけるように言う。言外に、おおよそのことは既に知っている、だからとぼけても無駄だし嘘をつけばすぐわかる、と匂わせて。
不意打ちを食らったように、真羅が目を大きく見開いた。美しい顔に苦渋の色がにじみ、や

やあって、彼は観念したように目を伏せた。
「そうか……刹利から聞いたのだね。――私は妖王万宵の分身だ。地上に上がってきたのは、北瑛島を淵海に沈めるという万宵の願いを叶えるためだった」
認めた。刹利の話と一致する。
「おまえが地上に来るために刹利に命じたことの内容は？」
「……『玉造の里で勾玉を入手し、無知な子供を騙して大淵妖を釣る秘術を行わせよ』だ」
「そして俺たちが無知の代償を支払わされたというわけか。……理から外れた泥の化け物め」
紛れもない憎しみをこめて、冬惺は吐き捨てた。どこか戯れの混じっていた普段のやりとりとは違い、琥珀の瞳に本物の殺気を宿らせる。
「――翔波、そろそろ見えたか？」
「うん。《契約》のときに渡した翡翠の勾玉は、真羅の心臓の位置にある」
照破の力を秘めた右目で真羅を凝視していた翔波が、片眼鏡を押し上げながら言った。
その返答に、冬惺は太刀の切っ先をすいと下ろす。真羅の喉元から、左胸の位置へと。
「ではもう一つ教えてもらおう、真羅。――核の勾玉を失うと、大淵妖がどうなるのかを！」
「やめたまえ少年！」
煌めく切っ先が左胸に突き込まれる寸前、真羅は白刃を片手でつかんで止めた。
「勾玉を壊されても死ねない！　私を淵海に還すくらいなら、炎で滅ぼしてくれたまえ！」

青ざめた顔。焦った声。告げられた内容に、冬惺と翔波は眉をひそめる。

「……どういう意味だ？」

白刃を握りしめる真羅の手から、血の代わりにとろりとした紺碧の泥がしみ出す。妖王の分身だという彼は、人間のように深呼吸を一つすると、おもむろに口を開いた。

❁　❁　❁

――一つの声が、聞こえてきた。

〈本当のことを話そう。君たちに異変の解決をさせようとしている、その理由を教えよう〉

綺理は闇の中ではっと耳をそばだてた。

真羅の声だ。――彼が綺理の《契約》相手だからなのだろうか。その声は遥か遠くでしているようなのに、ほかの淵妖の場合と違って、不思議と明瞭に鼓膜を震わせる。

〈だからまずは、昔話をさせてくれたまえ――〉

❁　❁　❁

「昔話？　君の言う『昔』はいったい……？」

「国産みの頃だよ、従者。乾ノ神と湿ノ神とが地上を創った頃に始まる、古い話なのだよ」
真羅はそう前置きすると、地上には伝わっていない神代の話を始めた。
天と海とが交わり、地が生まれた後――。
創世の二神は、自分たちの創った陸地がとても不安定なものだと気づいた。
淵海にたゆたう二つの島は、乾ノ力と湿ノ力の釣り合いが取れていなければ保たれない。特に湿ノ力が強まれば、地上は次第に淵海に沈んでいってしまう。
それゆえ地上を慈しむ二神は、眠りにつく前にそれぞれの眷属の長に約束をさせた。
乾湿の力の均衡を保ち、地上が淵海に没さぬよう守る、と。
「湿ノ神の眷属は淵妖。その長とはすなわち妖王。……しかし妖王は約束を破ることにした」
歌うように語っていた真羅が、ふっと翡翠の瞳を翳らせた。
すべての淵妖にとって、湿ノ神は永遠に思い慕う存在。ゆえに淵妖は本能的な慕情に逆らえず、理を乱してでも湿ノ神の眠る地上に上がりたがる。それを抑制することを湿ノ神に誓っていた妖王も、経る時の中でやがて心変わりしたのだった。
「湿ノ神は北瑛島のいずこかで眠っている。だから北瑛島を島ごと淵海に沈めてしまえば、湿ノ神を自分たちのもとに取り戻すことができる――。妖王はそう心を変えたのだよ」
そして、と言いながら、真羅は片手で自分を示す。
「妖王万宵はその野望ゆえに、もう一人の自分、つまりこの私を創って地上に送り込んだ。

――しかしそこで万宵にとって計算違いが起きてね。私は昔の心を取り戻したんだ」

昔。彼の言う昔は、湿ノ神と約束を交わした頃のこと。

「だから私は君たちの敵ではないよ。湿ノ神との約束通り、地上を守るために動いている。君たちに淵妖退治を勧めたのはそのためだ。私は君たちを《調停者》――地上から淵妖を追い払い、乾湿の力の均衡を保つ者にしたいのだよ」

真羅は冬惺の目を真っ向から見上げ、言った。――だが。

「……それはまた、ずいぶんと都合のよすぎる『計算違い』だな？」

冬惺は凄絶な笑みで応じた。

信じられるわけがない。淵妖が分身を生み出す仕組みなど知らないが、それでも分身が本体に叛心を持つというのが尋常でないことくらい、想像がつく。

「答えろ真羅。ここで俺たちがその話を信じ、綺理の救出におまえを協力させたら、どうなる予定なんだ？　全員紅楓王家に引き渡されるのか？――おまえは本当はなにを企んでいる？」

凍てつくほど冷たいまなざしに、真羅の瞳に焦りの色がにじむ。

「少年、私が今も利利と通じていると疑っているのかね？　私も今日になるまで、異変の首謀者の大淵妖が利利だと知らなかった。決して知り合いであることを隠していたわけではない」

「では俺たちの動向が利利に漏れていたのは？」

「私に責があることは認めよう。利利はずっと淵妖に私を捜させていた。だから私のそばにい

た君たちの動きも察した。しかし意図的に情報を漏らすような真似は……」
「そもそもさ、大淵妖に『善い心を取り戻した』なんて言われて、信じられると思うかい？」
「……っ」
翔波の言葉に真羅は顔を歪め、次の瞬間、右腕から浅葱色の光を生み出した。
「！」
真羅に突きつけていた太刀が、弾き返される。その隙に彼は大きく真横に跳んだ。
冬惺の間合いから逃れ、離れた草の上に降り立った真羅。彼はふとその美貌に、なんとも名状しがたい表情を浮かべた。寂しそう、というのが一番近い。
人を騙すのに失敗した大淵妖――というには奇妙な表情に、冬惺と翔波は動きを止める。
ほのかな月の光の下で、真羅は凪いだ目で己の《契約者》たちを見た。

「私は君たちには嘘をつかない。私にこの心を与えたのは、君たちなのだよ」

「心を……与えた？」
ぽつりと翔波がつぶやいた。
真羅はうなずいて、腕にまとわりつかせていた浅葱色の光を消す。
「地上に来たとき、私は君たち三人の心を読んだ。君たちの心に触れた。そのせいで私の心も

揺り動かされてしまった」

懐かしむような優しい口調で言って、彼は翡翠の瞳を冬惺に向けた。

「トウセイ。あのとき君が望んでいたのはとても単純なことだ。この私を、化け物を前にして君がもっとも強く願うのはこれしかなかろう。――『淵妖から大切な人たちを守りたい』」

（――――）

少し考えればわかりそうなほど簡単な答えに、冬惺はつかの間虚脱した。――私利私欲にあたるものではなかった。そのことに安堵するあまり、太刀を構える腕から力が抜ける。

「ショウハの心には、『大事な人のために自分の生を使いたい』という強い決意があった。そしてキリが望んでいたのは『冬惺の願い事が叶うこと』……大切な人の願いを叶えることが、彼女の願いだったのだよ。――それが、妖王の分身の心を動かした」

守りたい。大切な相手の願いを叶えたい。その相手のために生きてゆきたい。

強く純粋なその思いに直に触れて、妖王の分身の心は揺さぶられた。とうに捨て去ってしまったはずの思いが蘇った。

――地上を守ると、かつて湿ノ神に約束したときの気持ちが。

――誰よりも慕わしい神の願いを叶えたい、というひたむきな思いが。

――大切な相手との約束を守るために生きてゆきたい、という固い決意が。

かつての心を呼び覚まされて、その瞬間から分身は、本体の妖王とは違う存在になった。

「真羅は過去の妖王、万宵は現在の妖王。だから私は過去を象徴する子供の姿になっている」

童子姿の大淵妖は微妙に節をつけて語った。

「とはいえ私は本来、万宵の分身に過ぎない。その私が本体と別の思考を持ち続けていられるのは、ひとえにこの心をつなぎとめている核があるからだ。勾玉は――」

彼は白く細い指で、自身の左胸をぴたりと指し示し、

「――勾玉は、魂の形を模して作られたものなのだよ」

誓いを立てるような声音で言う。

「私の魂は、君たちから受け取った玉に宿っている。ゆえに私は、この勾玉を失えば心を失う。淵海に戻り、万宵と同化してしまう。地上を害そうとしている妖王の、力となってしまう。――だから勾玉を壊されるくらいなら、この心を抱いたまま滅び去ったほうがましだ」

本心らしく聞こえた。今のところ真羅の態度にも一貫性がある。

（だが……真実だと確かめるすべはここにはない）

今の状況下で迂闊にこの大淵妖を信じ、騙されれば、お人よしの代償として支払わされるのは綺理の身の安全だ。信じてもいいかもしれない程度では、あまりにも不十分すぎる。大淵妖に騙されて綺理と翔波を禁忌に巻き込んだ七年前と、同じ轍を踏むわけにはいかない。

そんな冬惺の心中を読んだかのように、真羅は苦笑した。
「――が、残念ながら、私は自分の言葉を信じてもらうすべを知らない。虚言を弄して人を惑わすのは、確かに大淵妖の性なのだしね。信じられずとも無理はない」
湿った夜風が、冬惺たちと真羅の間を吹きぬける。
五、六歩といったところだろうか。斬り込もうとは思わないが、手を伸ばす気にもならない距離が、真羅との間にはある。
真羅は不思議なほど穏やかな顔つきをしていた。
「もしも私を退治したければ火雷明王を招請するといい。彼なら私を完全に滅するすべを持っているはずだ。――私に心を与えた君たちが、私の滅びを望むなら、きっと私は抗うまいよ」
息をのんだ冬惺と翔波の視線の先で、真羅は身を翻す。
薄色の髪結い紐の端が躍り、まばたき一つの後には、彼の姿は虚空に消えていた。

〈私に心を与えた君たちが、私の滅びを望むなら、きっと私は抗うまいよ〉
その言葉を最後に、真羅の声はぷっつりと聞こえなくなった。
何度も呼びかけてはみたものの、遠すぎて綺理の声は彼のもとへ届かないようだった。

綺理は暗闇の中で目を開け、胸がしめつけられる思いで真羅の話を反芻した。
以前真羅が言っていた大切な相手との約束とは、湿ノ神との約束のことだったのだ。彼が綺理たちを利用し、淵妖退治に向かわせていたのも、ひたすら地上を守らんがため。
そうと知れば綺理にはもう、彼が退治すべき悪妖とは思えない。
（だけど……私たちが《契約》のときに願ったのが、淵妖から大切な人たちを守ることだったっていうなら、どうやって叶えればいいの？）
綺理たちは七年前から真羅との《契約》に囚われている。災いを招く《契約者》の呪われたさだめに苦しめられ、心がそこから動けずにいる。ならば《契約》がある限り、真羅という大淵妖から大切な人を守れていないことになり、願いが叶わないのではないだろうか？
（《契約》が果たされる条件に、《契約》から解放されることそのものが入っちゃってる。なら真羅を殺すこと以外に、私たちが《契約》から解き放たれる道はないってことじゃ……）
そして皮肉なことに、真羅は綺理の七年前の心を呼び覚ましてしまった。
『キリが望んでいたのは「冬惺の願い事が叶うこと」……大切な人の願いを叶えること』
（冬惺の願いは、《契約》を解消すること……だよね）
綺理はため息をつき、横の壁にこつんと頭をもたれさせた。

風が夏草をさわさわと揺らす中、翔波がつぶやいた。
「……心を与えられた、って言っていたね」
「ああ。……だが、あいつの話にはまだ確固たる裏づけはない」
冬惺は太刀を鞘に収めながら応じた。
理性は、あの場で真羅を簡単に信用しなかったのは妥当な判断だ、と言っている。
仮に真羅の言が真実で、彼が味方なのだとしても、もともと綺理救出の策は真羅抜きで考えている。真羅を信じるかどうかを、あの場で急いで決める利点はない。
それに刹利を退治する段には、おそらく綺理に降神術を使ってもらうことになる。ならば真羅が敵か味方かを断ずるのは、火雷明王に国産みの話の真偽を確かめてからでも遅くはない。
しかし——直感は、なにかを間違えたのではないか、と訴えている。
(真羅の話にはどこかに違和感があった。きっとそれが真実を見極める鍵になる。だが……)
あまりにも漠然としていてその正体をつかめずにいると、隣で翔波がまたつぶやいた。
「自分に心を与えたのは君たちだ……って、言っていた」
冬惺はその声に微妙な色が含まれているのを感じ取り、彼に向き直った。



「なにか思うところがあるのか？」
「……うん。少なくとも、心を与えられたって言ったときの真羅は、本心を語っていたと思う。なんとなくわかる。――僕もまた、君たちに心を与えられたから」
真摯な色をたたえた青銅の目に、冬惺はわずかに目を瞠る。
「僕に心を与えたのは君と綺理だよ。……これをくれたときのことを覚えているかい？」
そう言って翔波が懐から出したのは、木取の里で一度火雷明王に融かされた守り刀だった。飾り気のない、しかしよく手入れされているその守り刀を見て、冬惺は顎を引く。
「忘れるものか。おまえと最初に会ったときのことだからな。……もう九年前になるか」
「正確には九年前の三月三十日。春怜陛下が紅楓王家の軍勢を破り、先代紅楓家当主を瑛国の玉座から追った日の、翌日だ。白桜王家方の陣幕で戦後処理が行われていて――」
翔波は当時のことを思い出すように、守り刀に視線を落とした。
「――僕は捕虜としてそこに引き出されていた」

（……誰だろう、これは）
翔波は自分のもとに歩んでくる黒髪の少年を見上げ、うまく働かない頭で考えていた。
――先ほどまで、周りの大人たちが自分の処罰について話していたはずだ。

貴族身分を取り上げ、乾術師になれぬよう声をつぶせとか。一族の罪の贖いに片腕を落とせとか。七歳の子供にそれは酷だから、罪人の焼印だけですませようとか。そんな話を。

そこに、自分とそう変わらない年頃のこの少年が現れ、白桜家の当主――瑛国の新王に願い出たのだ。この子供の処遇を自分に任せてほしい、と。

（確か……トウセイと呼ばれていた。……ああそうか。白桜家の三男、冬惺だ）

冬惺が眼前に立ち、守り刀を抜いた。篝火に刃が煌めく。朔秋と同じ琥珀の瞳を仰ぎ、翔波は理解した。この少年は朔秋と同じように、捕虜を切り刻む遊びをしたがっているのだと。

――だが冬惺がその守り刀でしたのは、屈んで翔波の手首の縄を切ることだった。

翔波が呆然としていると、彼は縄の残骸を取り去って立った。

そうして、座りこんだままの翔波の前に、守り刀を放り投げたのだ。

「おまえにやる。使い方は自分で考えろ」

ざわっと周囲の大人たちが色めきたった。咎める声が次々に上がる。翔波はそれを意識の片隅で聞きながら、地面に転がる抜き身の守り刀を凝視していた。

（考える……自分で……？）

鈍った頭を一生懸命動かす。彼は、自害しろと暗に命じているのだろうか。いや、違う。自分で考えろというのは、きっとそういうことではない。たぶん、この少年は、

（――自分で選べ、と言っているんだ）

自分の行く末は自分で選べと、そう言っているのだ。

翔波は胸に震えが走るのを感じた。そんなことを言われたのは初めてだ。自分は今まで、己の意思でなにかを選んだことなどなかった。父の命令で朔秋の従者となり、ずっと主の命令に従うだけの人形でいたのだ。それが敵方に捕まって初めて、選択の自由を与えられるなんて。

守り刀を見つめ、この刃でなにができるかを必死で考える。

自分の命を絶つ。敵方の人間——目の前にいる白桜家の少年を害する。彼を人質にとって逃げる。どれも自分の選びたい道ではないと思った。自分は彼を傷つけたくない。むしろ——。

はっと、翔波は気づいた。

そうだ。この守り刀でできることは、もう一つある！

翔波は跳びつくように守り刀を拾った。片手で自分の髪をつかみ、躊躇なく刃をすべらせる。

ザンッと小気味良い音がして、銀髪が散った。

しん、と陣幕の中が静まる。

身分ある者にとって、長い髪を切るというのは特別な意味がある。己の信ずるものや生き場所を変え、過去を振り捨てるとき、文字通り後ろ髪を引かれぬように髪を切るのだ。

翔波は断ち切った自分の髪の束を、無造作に地面に捨てた。この場でただ一人動じずに立っている冬惺の前に膝を折り、頭を深々と下げる。

「——これより先あなたにお仕えすることを、どうかお許しください」

それこそが、翔波が初めて己の意思で選び取ったこと。
許す、という言葉を頭上に聞いて、翔波は己の胸の内で確かなものが息づくのを知った。

「僕はあのとき、この守り刀と一緒に最初の心を与えられた。次は、綺理に会ったときだ。――僕が初めて綺理と対面したとき、君もそばにいたよね。僕は綺理にどんな敬称を使えばいいかわからなくて、『なんとお呼びすればよいか教えてください』って尋ねた」
翔波は、あれからまた長く伸ばした銀髪を夜風に遊ばせて、滔々と語った。
「なんでもいいと言うのにおまえがしつこく聞くから、綺理が怒ったんだったか」
冬惺は記憶をたどり、そのときのことを思い出す。
出会った当初の翔波はとことん慇懃で、常にびくついていた。相手の望む敬称で呼びかけねば殴られる、とすら思っていた節がある。そんな彼に、綺理は確かこう言ったのだ。
『友達のことをなんて呼ぶかくらい、自分で考えなさいよ！』
「……うん。友達なんて言われたのも初めてだった。だから僕は、ずっと君たちと共に歩んでいきたいと思ったんだ。――あ、ちなみに君が僕のことをなんと言ったか覚えているかい？」
急にあっけらかんとした物言いになった翔波に、冬惺は鼻白んだ。
「記憶力の試験はやめろ。九年前の自分の発言などいちいち覚えていられるか」

「じゃ、答え。なんで僕を助けてくれたのかって聞いたら、君は『手駒が欲しかったから』と返したんだよ。『感涙にむせぶようなことを言って欲しければ、台本を練る時間をよこせ』って」

「……」

確かに自分が言いそうなことだ、と冬惺は思いきり納得してしまった。

翔波はそんな冬惺をひたと見すえ、口調を改める。

「冬惺公閣下。あなたの使い勝手のよい手駒になれるなら、私は本望です。ただ、一つ聞かせてください。――もし《契約》がなかったとしても、共犯者だから裏切れないという確固たる裏づけがなかったとしても、それでも閣下は『翔波が俺を売ることはありえない』と断言してくださいましたか？」

真剣なまなざしに、冬惺は彼が昔話を持ち出したわけをようやく悟った。

翔波は心をしっかりと固めておきたいのだ。嫌な記憶の染みついたこの土地で、明日またかつての主人とまみえても、昔の陰鬱な心が呼び覚まされないように。

だから冬惺は彼の現在の主人として、きっぱりと告げる。

「当たり前だ」

九年前と違って意志の光を宿している青銅色の瞳を、傲然と見返す。

「それ以上の言葉が必要だというのなら、台本を練る時間をよこせ。俺はおまえを理詰めで信

用しているわけじゃない。だから信頼の理由を聞かれてもすぐには言葉に表せない」
偉そうに言い切ると、翔波は虚をつかれたようにまたたき、やがて微笑んだ。
「十分です、閣下。――それに、今の君には台本よりも作戦を練ってほしいしね。僕らの姫君を助け出す作戦。真羅のことを見極めるのも、三人そろってからだ」

静かな池のほとりに、真羅は一人で立っていた。
（すまないね、まだ君たちにすべてを明かすわけにはいかないのだよ。今はまだ……）
白い装束の左胸のあたりをつかむと、その手の下で勾玉がかすかに震えているのを感じる。
（――湿ノ神よ、私の神よ。世界の母なる愛しき神よ）
こみ上げてくるのは、思慕とも執着ともつかない感情と、一点の恨みの念。――湿ノ神よ、なぜあなたは淵海にお帰りくださらなかった。あなたを慕い、求める眷属がいる淵海に。
真羅は瞑想するように目を閉じ、開いた。
背後から湿った風が吹きつけ、池を波立たせる。そちらで同族の気が立ち昇ったのを感じ、真羅は振り返らずに問うた。
「――刹利からの使いかね？」

木立の間の闇から、何十もの淵妖が一斉に答えた。

〈オ迎エニ上ガリマシタ、真羅サマ〉

六章　炎の行方

朝方の白い光が、山中の砦を包んでいた。
辺境によくある小規模の砦だ。土塁と柵と堀で三重に囲われた郭の中に、木造の居館や倉庫群、物見櫓などが立ち並んでいる。
綺理が引き出されたのは、郭内の広場だった。
餌と言われた通り、開け放たれた門の真正面――外からでも見える位置に、後ろ手に縛られて座らされた。そばには朔秋と刹利がおり、後ろには二人の槍兵が控えている。
広場を囲む兵の数は砦の規模の割に多く、概算でも五十を下らない。
（槍兵と弓兵が半々……。門の脇の物見櫓の上にも二人いて……、っ！）
兵のほうをうかがっていた綺理は、突然横合いから顎をつかまれて小さく悲鳴を上げた。無理やり斜め上を向かされる。案の定、朔秋が残忍な目でこちらを見下ろしていた。
「もっと怯えてみせたらどうだ？　白桜の冬惺と銀髪こぞうが貴様を助けに来ても、この数じゃ相手にならないぞ。……いや、やつら怖気づいて、貴様を見捨てて逃げるかもなあ？」
綺理はむっと朔秋を睨み、かみつくように返す。
「馬鹿言わないでよ。冬惺があなたなんかを怖がるわけないでしょ。冬惺は――」

「確かに勇敢な将と聞きますね、彼の護国大将軍は」
刹利がするりと口を挟んだ。彼は調書を読み上げるような口調ですらすらと続ける。
「白桜の冬惺。十六歳の初陣から自ら兵を率いて戦場を駆け、東山道沿いの一連の戦で数々の戦功を上げている。用兵に長け、兵の信望厚く、武芸にも優れ、一騎打ちでは常勝……」
東山道沿いの一連の戦とは、紅楓方の軍が王都に攻め上った挙げ句、冬惺率いる軍に叩き潰された際の動乱のことだ。朔秋の顔色が変わったが、刹利は構わず綺理に話しかける。
「ですが彼がその力を発揮するのは、戦場で、率いる兵がいて、相手が人間の場合のみ。今の彼には個人の武勇をたのみに斬り込んでくることしかできません。それは蛮勇――おや」
刹利が言葉を切り、視線を正面に移した。
物見櫓の上の兵が「来ました！」と叫ぶ。朔秋は口の端を吊り上げ、綺理の顎を解放した。
「来たな、白桜の冬惺。死に場所へ」
彼らの視線を追って前を向いた綺理は、曲がりくねった道の向こうから黒髪の少年が一人歩いてくるのを認めた。
「冬惺！」
名を呼ぶと、彼は綺理が存外に元気なことに気づいてか、一瞬安堵の色をみせた。が、すぐに表情を険しくし、朔秋と刹利を敵意のこもった目で睨む。
緊張をはらんだ空気の中、冬惺は砦の入り口の橋の前で足を止めた。

弓兵が一斉に冬惺に狙いをつけたが、彼は正面にいる綺理たちだけを見すえて言う。
「お望み通り来てやったぞ、紅楓の朔秋。……綺理にはなにもしていないんだろうな」
「今はまだ、な。それより貴様一人か？　銀髪こぞうはどうした。主を置いて逃げでもしたか？」
「……逃がした、だ。それにあいつは俺を見捨てたわけじゃない。必ず戻ってくる」
うなるような返答に、綺理のすぐ脇で利利が小声で言った。
「嘘ですね。鏡作の翔波は援軍を呼びに行った、と匂わせておいて、実際は伏兵として付近に潜ませているのでしょう。表で陽動、裏で工作……。砦の裏手に兵を回し、警戒しなさい」
利利に命じられた兵がすっと離れ、広場を囲む兵の一部を伴って裏手へ向かう。
けれど綺理にだけはわかった。翔波が隠れているのは裏ではなく表、冬惺のいる側だ。
（翔波が陰で案内してなきゃ、冬惺がここに来られるわけないもの）
なにしろ、一本道で迷子になるという神業ができる冬惺だ。少なくとも、道の先に砦が見えるほど近くまで案内されないと、絶対にここにはたどりつけないはず。
（相手には兵を分散させておいて、こっちは戦力を一点集中……。でも本当に陽動作戦じゃないのなら、どうして冬惺は真正面から来たの？）
二人が自分を助けに来るのは朝になってからだろう、とまでは予想していた。
朝日が昇れば乾ノ術が使えるようになるし、綺理が目立つ場所に引き出されるのを待てば、

砦の中を探し回る手間が省ける。

しかしそれならみすみす罠に飛び込まずとも、堀や柵を越える方法を考えて二人で裏手から奇襲をかけたほうが勝算があるはずだ。

（もともとの人数差が大きいし、敵には従一位乾術師と大淵妖がいるし、私も手が自由にならないと降神術を使えないし――分が悪すぎるわよ。せめて私が昨日やった小細工がうまくいってくれれば……。冬惺……いったいどうするつもりなの？）

見つめていると、冬惺と目が合った。

彼は綺理を安心させるように微笑み、よく通る声で言う。

「俺が来たからもう大丈夫だ。綺理、おまえだけは必ず助ける」

（――おまえ、だけは？）

微妙な言い回しに、綺理は身を硬くした。

まさか冬惺は、己が身を顧みずに綺理を助けようとしているのだろうか。

『――目的がおまえなら、俺は手段を選ばない』

いつかの彼の言葉を思い出し、綺理の背筋を冷たいものが下りた、そのとき。

「紅楓の朔秋！」

冬惺が声を張り上げ、砦中に響かせるように宣言した。

「白桜の冬惺の名において、おまえに一騎打ちを申し込む！」

「――は」

刹利が目を丸くし、名指しされた朔秋は下手な冗談を聞かされたような顔になった。

（なに考えてるのよ冬惺。この状況でそんな挑戦、まともな人間が受けるわけないでしょ！）

ざっと青くなった綺理の横で、朔秋が哄笑する。

「……くっ、ははは。とんだ愚計だな、白桜の冬惺！　貴様も相当やきが回ったらしい。俺がそんな挑戦に乗ってやらねばならない理由がどこにある！　ええ？」

「一騎打ちを挑まれながら逃げれば、臆病者のそしりを受けるぞ」

「それは戦場のならいだ！　ここは貴様の処刑場。貴様を待っているのは名誉なき死だけだ」

「ほう。いいのか？　この俺を恐れたという事実のみが残っても」

余裕の笑みを浮かべた冬惺に、朔秋がぴくりと眉を動かした。

冬惺は自分に向けられる多くの矢じりを無視し、悠然と腕を組む。

「一年前おまえは玉座に手を伸ばす寸前で俺に惨敗し、泣きべそをかいて北の果てまで逃げていった。あのときおまえは陣営の奥にこもってまわりを兵で囲み、腰抜けよろしく震えていたな。陣が崩れたときのみっともない逃げっぷり共々、楽しく語り草にさせてもらったぞ」

言いながら、冬惺は砦の入り口の橋を渡りはじめた。彼の言葉の端々がよほど的確に心の傷をえぐったのか、朔秋の顔がすさまじい勢いで歪んでいく。

「貴、様……っ」

「今も同じだな。いや、今のほうがひどいか。個人を迎え撃つにしては多すぎる兵を用意して、自分の砦の中だというのにびくびくと兵の陰に隠れているだけ。――恰好のよいことだ」

それはそれは爽やかに笑う冬惺に、利利がぼそりと「あなたの従兄君もたいがい性格が悪いですね」とつぶやいた。綺理は「……そう思う」と返すしかない。

「朔秋。おまえは戦場で俺を恐れ、俺に負け、俺から逃げた。だからいまだに俺が怖い。だから兵で周囲を固め、人質をそばに置かねば安心できない。だから余興につきあう余裕もない」

断定口調でたたみかけられ、朔秋は屈辱にぶるぶると震えた。

「こ、怖いだと……！　ふざけるな、一年前とは違う。今は太陽が出ている。従一位乾術師たるこの俺が、貴様を恐れるわけないだろう！」

「勇ましいな。乾ノ術を使えない相手との一騎打ちから逃げる程度の勇ましさだが。こんな腑抜けが金蘭王家の端くれにいるのかと思うと、誇らしすぎて涙が出る」

「……っ、き、貴様、金蘭の外れ者の分際で……！」

朔秋は完全に頭に血が上ったようだった。もともと彼は、頭の中が冬惺への憎悪一色で染まるよう、暗示をかけられている。琥珀の瞳が狂気を帯びたように爛々と輝いた。

「貴様など、この俺の乾ノ術で叩き潰してくれる！――一騎打ち、受けて立つ！」

吠えるような宣言に、冬惺が満足げに笑む。

だが朔秋が足を踏み出そうとしたそのとき、彼の前にすっと腕が伸ばされた。

「お待ちください、朔秋さま。これは高位の乾術師を陥れる罠です」
刹利だ。彼は暴走しかけた朔秋に、冷静に指摘する。
「従一位乾術師の生み出す炎ともなれば、淵妖以外の物も簡単に焼き尽くしてしまいます。広場を兵が囲んでいるこの状況では、流れた火球で兵が死にかねません。彼の狙いはそれです」
――本来、乾ノ術は湿ノ力を払って淵妖を退治するためのもの。その乾ノ術の炎で直接人を殺めれば、乾ノ神の定めた理に触れ、その者は乾術師としての力を失う。
朔秋がはっと動きを止めた。しかし、もう挑戦を受けると宣言した後だ。
瞳を揺らした朔秋に、刹利が腰の刀を示してにぃと笑った。
「強い部下を抱えるのも主人の才覚。一騎打ちに代役を立てるのはよくあること、恥にはならぬこと。私ならば白桜の冬惺を、彼の得意分野で倒してごらんにいれますよ？」
自信に満ちた声。はらはらと見守る綺理の前で、朔秋は興がるような面持ちに変わった。
「なるほどな。――よし、刹利。主に代わって白桜の冬惺を叩きのめせ！　いい余興だ。やつが自負している剣術でやつを破り、矜持を粉々にして地面にはいつくばらせてやれ！」
翔波は岩の裏からひそかに砦の前面を望み、秒数を数えながらすっと息を吸った。
大がかりな術を発動させるため、長い呪文を唱えはじめる。

朝日を浴びて、刹利が広場の中央へと歩き出す。
「お聞きの通り私が代わってお相手つかまつりますが、まさか逃げはいたしませんよね？」
「ああ。正直俺も、朔秋風情を相手にするのでは役不足と思っていたところだ」
冬惺の落ち着いた口ぶりに、綺理はまたたいた。半秒遅れて、彼の意図を理解する。
（そっか。冬惺は最初から、刹利を一騎打ちの場に出てこさせたかったんだ！）
刹利が馬脚をあらわして衆目の中で本性を見せれば、朔秋も兵たちも綺理たちにかかずらってはいられなくなる。人間の敵たる大淵妖を退治するために、全力を注ぐはずだ。
（でも……それにはまず刹利を追いつめないと。勝算、あるの……？）
かわたれの森で、冬惺が刹利相手に斬り込めずにいたのを思い出す。
あのときは冬惺も疲労がたまっていたから。動揺していたから。道幅があまりない場所で戦いにくかったから。……もっともらしいことはいろいろ思いつくけれど、不安は消えない。
冬惺は大きく間合いを取って刹利と向かい合い、太刀の柄に触れた。依然として多くの矢が彼を狙っているが、気にするそぶりはなく朗々と名乗りを上げる。
「――金蘭の末流、白桜家先代当主 春暁が第三子、瑛国王春怜が弟、冬惺」
対する刹利は、抜刀の構えのまま小さく首をすくめた。
「私は貴族にあらざれば、名乗るほどの系譜はありません。ただの刹利、と」
さらりと言って「いざ尋常に勝負」と続けようとした、まさにそのときだった。

冬惺が動いた。
太刀を抜き放つ、と思わせて右腕を大きく振り、握っていたある物を斜め後ろに投げる。
門の脇の物見櫓へと飛んでいくその物体は、数個の碁石。
そして。

「――をのみ込む、大いなる炉となれ」
翔波は呪文の完成と共に腕を振り上げ、砦の外から物見櫓を指し示す。
直後、今度は彼が最も得意とし、最も速く発動させられる術の呪文を唱えた。
「天滅還海！」

そして綺理は、物見櫓がへし折れる光景を見た。
――物見櫓の下に落ちた碁石から淵妖があふれ出し、柱を折った。さらに時同じくして外部から乾ノ術の巨大な炎が飛来し、物見櫓の最上層に激突したのだ。
根元を折られ、上部に衝撃を食らった物見櫓が、勢いよく傾いていく。――刹那めがけて。
「なっ……」
信じがたい事態に啞然とする刹利の上に、物見櫓は地響きを立てて倒れた。
轟音と共に物見櫓がつぶれ、木片と塵芥が飛び散る。兵たちが慌てふためく。

「ばっ、馬鹿な！」

「今の炎はどこからだ!?」

混乱に乗じて、冬惺が駆けた。やみくもに射られる矢をかいくぐり、物見櫓の残骸のわきを走り抜け、一気に綺理のもとへ到達する。

彼は綺理の近くにいた兵をすばやく打ち倒すと、その兵が構えていた長方形の大盾を奪い、自分と綺理の前面に立てた。すぐさま、盾の向こう側に矢の突き立つ音が二つ三つ続く。

ほんの短い間のできごとに綺理は呆然としていたが、冬惺のほっとした声で我に返った。

「綺理、無事――だな。よかった……」

「う、うん。……ありがとう」

間近で見つめてくる瞳に、綺理は頬がかっと熱を持つのを感じた。一人用の盾の裏に二人で身を潜めているのだ。いつにも増して距離が近い。それにいつになく彼の瞳が優しい。――と。

（――!?）

不意に強く抱き寄せられ、心臓がはね上がった。

布越しに冬惺の体温を感じる。鼓動が信じられないほど速く大きくなり、彼に聞こえてしまうのではと思ってますますどきどきする。真っ赤になって硬直していると、耳元で声がした。

「じっとしていろ。縄を切る」

（……あ、そういうこと）

冬惺が綺理の背中に回した太刀で縄目を断ち切る。ザクリと音がして綺理の手首が自由になった。そこに、怒りでつまったような声がかかる。

「貴、様……、冬惺……！」

二人がぱっと離れてそちらを見ると、朔秋が憤怒の形相で立っていた。妙に遠い位置にいるのは、物見櫓の倒壊に驚いて逃げたからだろう。

朔秋は刹利を押し潰した物見櫓の残骸を指さし、大声で言った。

「なんだあれは！　一騎打ちの最中になんという卑劣な真似を！　恥を知れ、恥を！」

綺理と冬惺はまったく同時に叫び返す。

「そういうことは自分の行動を振り返ってから言いなさいよ！」

「ここは単なる処刑場らしいからな、名誉もなにもあるか！」

朔秋の唇がわなわなと震えた。口を動かす暇があるなら乾ノ術を放てばよいものを、彼は残骸を示す腕をぶんぶん振ってなおもわめく。だいぶ錯乱しているらしい。

「だいたいなんであんな馬鹿なことが起こる！　使役術ごときであんな簡単に櫓が倒れたら、砦を造る意味がないだろうがっ」

錯乱しているときのほうがまともなことを言うというのは、どうかと思う。

とはいえ綺理もそれは疑問だ。あのとんでもない作戦の立案者であろう冬惺を振り仰ぐと、彼はため息をついた。

「朔秋。やはりおまえは、気づかないような暗示でもかけられていたのか」
「なに……？」
「この砦はあちこちに湿ノ力がたまっている。目に見える変化が起きないように刹利が調整していたようだが、建物の柱は内部を湿ノ力に侵されてぼろぼろだ」
（！　そうよ。ここには刹利がいて、淵妖を呼んでいたんじゃない！）
付近に淵妖がいれば湿ノ力は強まる。だが異常が起きれば、刹利は自分の正体を勘付かれる恐れがある。そこで刹利は砦の人間に暗示をかけ、設備の腐朽に気づかれないようにしていたのだろう。一方こちらには、湿ノ力がどこにたまっているか見抜ける翔波がいる――。
綺理はなるほどと深く頷いたが、朔秋は理解できていない顔のままだった。
「ええい、意味のわからんことばかり！　貴様らはもう終わりだ。覚悟しろ！」
彼は叫んで腕を振り上げたが、先ほどの刹利の話が頭に残っていたのか、乾ノ術を放つのは躊躇した。代わりに兵に命じる。
「者ども、こいつらを捕らえろ！」
冬惺がちっと舌打ちして太刀を構える。
――が、盾の向こう側で兵が動く気配はなかった。
朔秋が命令を発した口のまま凍りついているのを見て、綺理と冬惺は顔を見合わせる。
二人は盾の陰から慎重に顔をのぞかせ、なにが起きているのかを知った。



広場にいる数十人の兵が、ことごとく倒れていた。
程度の差はあれ、全員手足が痺れているようで、湿った土の上に転がって悶えている。
その様に、綺理はほっと胸を撫で下ろした。
「よかった。ちゃんと薬が効いてきたのね」
「おまえの仕業かこれは!!……綺理、おまえはいったいなにをした……？」
げんなりと問うた冬惺に、綺理はちょっぴり得意な気分になって答える。
「上衣のあちこちに仕込んでおいた薬があったから、ちょっと小細工して特製痺れ薬を兵の食事に盛ってみたの。効果が出はじめるのが遅かったから心配したけど、よかったー」
昨夜綺理は一計を案じ、小間使いに飲み水と布を持ってこさせると、体を清めるという口実をもうけて見張りの兵を遠ざけた。そして水に催眠効果のある鳴鏑草の粉末を混ぜて小間使いに飲ませ、「渡した薬を兵の食事に混ぜるように」と催眠暗示をかけたのである。
褒めて褒めてと子犬のような目で見上げる綺理に、冬惺はがっくりと顔を手にうずめた。
「……最大級の危険人物だな、おまえは」
冬惺は気を取り直すように首を振ると、とりあえず必要のなくなった盾をつかんだ。呆然としている朔秋に投げつける。
盾の直撃を食らった朔秋は奇声を上げて昏倒したが、冬惺はもはやそちらを眼中に入れてはいない。にわかに曇ってきた空を一瞥し、綺理の腕を取った。

「だがおかげで脱出が一気に楽になった。――行くぞ、綺理」

冬惺は綺理の手を引いて広場を突っ切り、城門の外で突入の時機をうかがっていた翔波と合流した。

しかし三人の再集結をゆっくり喜んでいる暇はなく、すぐに翔波の先導で走り出す。

物見櫓で潰した程度では泥の妖は傷つかない。いずれ利利は倒壊した櫓の下から抜け出し、冬惺たちを追ってくるだろう。

（ならばあいつをこちらにとって有利な場に誘い出し、退治するまでだ）

利利を倒すのに有効な手立ては二つ。

一つは綺理が火雷明王を招請し、その力で利利を砂に変えて滅ぼすこと。

もう一つは、翔波が利利の勾玉の在り処を見つけ、冬惺がそれを斬ることだ。――《契約》の仕組みと昨夜の真羅の言葉から察するに、核の勾玉さえ壊せば大淵妖は淵海に還る。

（滅ぼすに越したことはないがな。あれは異変を起こしている悪妖で、なにより……）

七年前の旅人の記憶と、綺理が利利に手荒に取り押さえられたときの光景とが蘇り、冬惺は頭の奥が白く灼かれるような激しい怒りを覚えた。

許しがたいというなら朔秋もそうだが、刹利は根本的に違う。あれは過去を呼び覚ます。禁忌に至る最初の記憶を、大切な人を守れずこの手に泥しかつかめなかったときの絶望を。

獣道を駆け、砦が見えないところまで行くと、三人は一旦立ち止まった。

冬惺は追っ手の気配が——少なくとも人の気配がない森をしばらくうかがってから、二人のほうを見やった。

翔波が、綺理から預かっていた剣を彼女に返しているところだ。——剣は、火雷明王の依代に使えるという話だったか。

剣を手にした綺理は、数秒ためらうようなそぶりを見せていたが、やがて硬い声で言った。

「あの……ね。昨日の夜、二人とも、真羅と話してたよね」

「！」

息をのんだ冬惺と翔波に、彼女はぽつりと続ける。

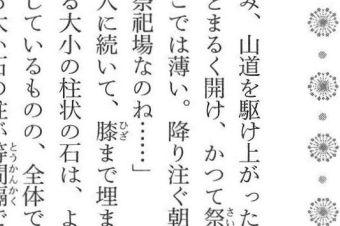
「淵妖の声を聞こうとしてたら……真羅の声だけ聞こえたの」

「……そう、か」

冬惺はかすかに後ろめたい気分でつぶやいた。聞かれたのは真羅の声だけでも、どんなやりとりがあったかは伝わってしまったかもしれない。昨夜の自分が、綺理の前では見せたことのない酷薄な態度で真羅に接していたことを、彼女に知られていなければいいと思う。

同時に、真羅を信じようとしなかったことを責められるだろうか、とも思った。

けれど綺理はそれ以上なにも言わず、思いつめたような顔で再び走りはじめた。



砦から南へ進み、山道を駆け上がったところに、その広場はあった。
森がぽっかりとまるく開け、かつて祭祀に使われていたと思しき巨石が点々とある。夏の森の濃密な気もここでは薄い。降り注ぐ朝日の下、軽い風は草と日なたの匂いがした。
「ここも古代の祭祀場なのね……」
綺理は少年二人に続いて、膝まで埋まる夏草の海に足を踏み入れた。
広場に点在する大小の柱状の石は、よく見ると規則的に配置されている。ところどころ欠けたり倒壊したりしているものの、全体で巨大な日時計のようなものを構成しているようだ。
いく抱えもある太い石の柱が等間隔で並び、大きな二重の環を作っている。その環の中心にあたる部分に、ひと際大きな石柱がそそり立っており――、
（！）
その巨石のほうからねっとりした気が流れてくるのを感じ、綺理はびくりと足を止めた。
（――いる）
苔むした緑の巨石の陰から、人影が音もなく歩み出てくる。

大淵妖としての本性を隠しもせず、淡い紺青の光を全身にまとわりつかせた刹利。彼は赤瑪瑙の瞳を狡猾そうに細め、言った。

「ようこそ」

「……来るのが早すぎだ。つくづく人を待ち伏せするのが好きな大淵妖だな」

痛烈な舌打ちを漏らした冬惺に、刹利は鷹揚に笑った。

「櫓を倒すとは面白いことを考えたものです。さしもの私も驚かされました。ですがあれしきの重しで、この私を長く足止めできると思われては困ります。そして淵妖は、人道を知らぬ代わりに人の通れぬ道を知る。あなたがたの先回りをするなど容易い――おっと」

刹利は翔波が火球を放つのを見て、片眉を上げた。彼の前に紺青の光の障壁が生まれる。火球は障壁にぶつかるや否や、ジュッと音を立てて消えた。

「せっかちですね。そう焦らずとも、あなたがたのお相手はほかにもおりますよ？」

赤瑪瑙の瞳がすいと横に動く。途端、綺理たちのもとに真横から炎の塊が放たれた。

「な……っ！」

凶暴な熱をはらんだ、乾ノ術の炎。

とっさに綺理たちは、互いに離れるようにして跳びすさった。

半秒前まで三人が固まって立っていた場所を、灼熱の塊が駆け抜ける。ついその行く先を目で追った綺理は、炎がずっと先の立ち木をのみこみ、またたく間に炭に変える様を見た。

「――――」

絶句。綺理はぎごちない動きで首を逆方向に回し、火球の来たほうを見やる。

そこに立っていたのは一人の金髪の青年。――紅楓家当主、朔秋だった。

「なんで、あなたがここに……」

冬惺に気絶させられていたはずなのに。自分たちと同じ道を来たなら、こんなに早く追いつけるはずがないのに。そして刹利が大淵妖であることは、今の彼を見れば一目瞭然なのに。

すべての疑問に答えるように、翔波が苦々しく言った。

「……猫を追いかけたときのこと、覚えているかい？」

王都で綺理たちが追いかけた泥棒猫。あの猫は、淵妖に操られていた。

――それは、つまり。

「白桜の冬惺、鏡作の翔波、玉造の綺理、――絶望して死ね」

ひどく虚ろな目をした朔秋が、台本を読むような口調で言った。もはや暗示などという生やさしい状態でないのは明らかだ。右腕を上げる動作も、操り人形のようにぎごちない。

「万照成牙」

詠唱までもが淡々としている。そのせいで、綺理は思い切り反応が遅れた。

「……――っきゃあああ！」

「綺理！」

朔秋の放った火球を、すんでのところで転がってよける。が、第二弾をかわすには体勢を崩しすぎた。迫りくる炎に血の気が引いたとき、横合いから冬惺に引き寄せられて難を逃れる。

その冬惺も、すぐさま綺理を突き放した。鞭のごとくしなる紺青の光の帯が、二人の間に振り下ろされる。光の帯に打たれた地面が大きくえぐれ、まわりの草が朽ち果てた。

巨石のそばから光の帯を放った刹利が、綺理たち三人を順繰りに見る。

「おとなしく投降してくだされば手荒な真似はまだいたしません……と言いたいところですが、私としても子供の浅知恵にしてやられたままというのは癪でして。意趣返しはさせていただきます。――この私と従一位乾術師を相手に、いつまでもつでしょうね」

刹利は淡く光る右腕を上げた。練り上げた湿ノ力を再び光の帯に変え、翔波へと放つ。

まさに朔秋に乾ノ術を放とうとしていた翔波は、直前で術の狙いをそちらに変えた。翔波の右手から赤い炎がほとばしり、青い光の流れをのみこむ。しかし。

「たかだか正三位程度の乾術師が、この私に太刀打ちできるとでも？」

刹利がくすりと笑った。次の瞬間押し負けたのは、炎のほう。青い光の帯が炎を突き破って進み、瞠目した翔波を吹き飛ばして草の上に叩きつける。

「翔波！」

綺理は慌てて翔波のもとへ駆け寄った。うめく彼を助け起こし、石柱の陰に引っぱりこむ。
その一秒後、光の帯がたわみ、さっきまで翔波の倒れていた場所を薙ぎ払った。
「……り、がと。助かった」
翔波は、綺理に支えられながら数度咳きこんだ。石柱の向こう側から、刹利の声が飛んでくる。
「非才。未熟。無力。自分の程度を知ることですね、鏡作の翔波。従一位乾術師でもなければ……たとえば紅楓の朔秋でもなければ、この私とまともに相対することなどできませんよ？」
冷笑され、翔波の顔が屈辱に歪んだ。
引き合いに出された朔秋はといえば、刹利に操られるまま乾ノ術を放ってくる。綺理たちが盾にしている石柱に火球が次々に激突し、振動と余波が間断なく二人を襲った。
「……ごめん。僕がもっと、強ければ」
ふらついた拍子に、綺理は翔波が耳元でつぶやくのを聞いた。彼の表情は、昨日洞窟で、術比べでは朔秋に敵わないと思い知らされたときに見せたものと同じ。
（小さい頃……冬惺のところに来たばっかりの頃も、よくこんな顔してた）
役に立たない従者だと冬惺に思われはしないか。そう怯えていた頃の翔波の姿が、今の彼に重なる。だから綺理もあの頃と同じように、翔波の冷たい手を両手で包みこむように握った。
「大丈夫だよ。乾術師の階級がすべてじゃないもの。私は翔波が強いって知ってる。――頼り

にしてるからね」

翔波は青銅の瞳をはっと見開いた。そしてその瞳をやわらかく細め、つながっていることを確かめるかのように綺理の手を握り返す。

「……うん、頼られておく」

「ありがと。冬惺もあなたを当てにして――」

綺理が微笑み返そうとしたとき、石柱ごしに大きな振動が襲ってきた。よろめいた綺理は翔波の手を離し、二人して草地に手と膝をつく。思わず綺理の口から愚痴が飛び出した。

「ねえ翔波、朔秋がほいほい暗示かけられたり操られたりしなければ、ずっと楽だったと思わない!? 従一位乾術師のくせに、大淵妖にいいように使われてるんじゃないわよー！」

「ああ、うん。ものすごく同感」

翔波が深々とうなずいた。そこに第三者の声が割りこむ。

「簡単そうにおっしゃいますが、紅楓の朔秋を支配下に置くまでには準備期間が何年も必要だったのですよ。その成果を試す機会がようやくきた、といったところですかね、今は」

いつの間にか、刹利が綺理たちの正面側に回りこんでいた。彼の掌中で冷たい紺青の光が縄のようによじれ、二人に向けて矢のように放たれる。

よけられない。石柱の陰から動けば朔秋の術の餌食になってしまう。翔波が迎え撃つように火球を放ったが、当然、湿ノ力の奔流は止まらない。

痛みと衝撃を予測して身構えたそのとき、背後の石柱の上から人影が降ってきた。
二人の前に立ちふさがった冬惺が、太刀を抜き放つなり光の縄を叩き斬る。
玻璃の杯を打ち欠いたような音を立て、光の縄は散じて消えた。
「冬惺……！」
綺理は安堵の息をついた。冬惺がこちらを振り返り、二人の無事を確かめてから問う。
「翔波、乾ノ術同士なら相殺できるはずだな？　一対一だったら朔秋を抑えていられるか？」
「やれる。――対刹利用に仕込んでおいた罠も使えば、使役術の道具が尽きるまでは」
即答してから正直に付け加えた翔波に、冬惺は「それでいい」と首肯した。さりげなく、一番きつい役どころを自分自身に振り当てる。
「ならば刹利は俺が引き受ける。綺理、おまえは安全な場所に下がっていろ」
「う……うん、わかった」
『時間を稼ぐから安全な場所で降神術を使え』の意味だと気づき、綺理は神妙に応じた。
改めて三人で目を見交わし、力強くうなずき合う。
（私が降神術を完成させるのに手間取れば、その分冬惺たちの負担が増える……ってことよね。
――できるだけ早く火雷明王を招請して、刹利を倒さないと！）

（――さて、この太刀一本で刹利相手にどこまでやれるかな）

冬惺は、綺理と翔波が身構えるのを横目で確認すると、大地を強く蹴った。

一気に加速し、刹利との距離を縮める。その勢いのまま太刀を一閃させる！

胸部を狙った斬撃に、刹利は光の障壁で応じた。

白刃と障壁が火花を上げてぶつかり合う。冬惺の腕に振動がびりびりと伝わり、障壁が木っ端みじんに砕けた。その衝撃で二人は互いに後方へと弾かれる。

「……なるほど。金蘭の冬の少年、淵妖を斬る少年。湿ノ力そのものをも両断しますか」

「おまえの勾玉も両断させてもらうぞ。淵海へ沈め、刹利。地上はおまえの居場所じゃない」

「そちらこそ絶望の淵に沈みなさい。剣術で私に勝とうなど、思い上がりもよいところです」

刹利は腰の刀をすらりと抜いた。音もなく跳躍し、冬惺に迫る。

真上から振り下ろされた刀を、冬惺は半身を返してやり過ごした。よけながら相手の脇腹を太刀で払ったが、こちらも紙一重でかわされる。

すれ違うように立ち位置を変えた二人は、すばやく振り返って斬り結んだ。

鋼の軋る音が、間断なく響きわたる。

いく度も刃を合わせるうちに、刹利の顔色が変わった。冬惺の猛撃に押され、じりじりと後ろに下がっていく。太刀の切っ先が刹利の腕を浅く薙ぎ、紺碧の泥が飛び散る。

赤瑪瑙の瞳が見開かれるのを認め、冬惺はさらに踏みこんだ。

斬れる。そう確信し、太刀を斜め下から鋭く払い上げる。
――しかし、刹利の胴をとらえるはずだった刃は空を切った。
（な……！）
その一瞬、冬惺の目には刹利が消えたように見えた。彼は頭上に高く跳んで、冬惺の太刀の軌道から逃れたのだ。異常な跳躍力を見せつけた彼は、石柱の一本の上に優雅に着地する。
「人間にしては見事な太刀さばきですね、刀聖の名を持つ少年。賞賛いたします。敬意を表して、私も少しだけ本気を出しましょう」
（こいつ……今までは小手調べだったということか）
太刀の柄を握りなおした冬惺は、その手にじわりと汗がにじむのを感じた。

「――を食む牙となれ！」
「万照成牙」
二人の乾術師の詠唱が重なり、両者の間で炎の塊がぶつかり合った。
破裂音がして火炎が打ち消される。生じた爆風が草を薙ぎ倒し、枯れ草に変える。
翔波は、朔秋の注意を引きつけながら走っていた。走りながら呪文を唱え、また朔秋の攻撃を相殺する。呪文の長さの差で、朔秋のほうが圧倒的に多くの火球を繰り出してくるので、術

で防げない分はよけるか石柱を盾にしてしのぐ。

冬惺が刹利の、翔波が朔秋の相手をそれぞれしている間に、綺理は石柱の作る影から出た。日なたに立ち、東の空に低く昇った太陽に向けて右腕をほぼ水平に上げる。

「帰命したてまつる、天の灯明より分かたれし――きゃあっ」

横合いから炎が迫り、綺理は慌てて跳びすさった。翔波が対処しきれなかった分の火球だ。

（やっぱり、そう簡単にはいかない）

降神術の弱点は、詠唱している間、術者が動けないことだ。その場から一歩でも足を動かせば最初からやり直しとなってしまう。

綺理はあたりを見回すと、巨石の環の中に駆け込んだ。石柱を遮蔽物にして再び太陽に手を伸ばす。呪文を唱えようと口を開いたとき、ねっとりと湿った淵妖の気が首筋を撫でた。

「なにを企んでいます？」

はっと顔を上げる。横の石柱の上に刹利が降り立ち、淡く光る右手をこちらに向けた。光の帯が放たれる間際、その隣の石柱から、冬惺が飛び移りざま刹利に斬りかかる。

「おまえの相手は俺だ！」

刹利は地に降りて冬惺の太刀をかわした。入れ替わりで石柱の上に着地した冬惺も、彼を追って即座に飛び降り、大上段から太刀を振り下ろす。全体重が乗せられた一撃を、刹利は刀の腹で受け流した。二人は刃を絡めてはまた離れ、石柱群の奥へと消えていく。

その隙に綺理はまた降神術の詠唱態勢に入った。だが呪文を半ばまで唱えたところで紺青の光の縄に襲われ、転がるようにして逃げる羽目になる。

（じょ、冗談じゃな……っ）

綺理は剣戟を繰り広げる二人の姿を目の端に見て、慄然とした。

あの冬惺が、防戦一方に追いこまれている。

刹利の刀が目で追える限界の速さで閃く。続けざまに打ち込まれる刃を、冬惺は辛くも防いでいるが、彼の顔には焦りの色がはっきりと浮かんでいた。

たまらず冬惺が間合いをとれば、その隙に刹利は綺理へと光の帯を放つ。

刹利は、あの大淵妖は、一対一で敵うような相手ではないのだ。

（どうにかしないと、これじゃどんどん消耗するだけ……！）

光の帯と、稀に流れてくる火球に何度も降神術の邪魔をされ、綺理は唇を噛んだ。石柱の陰から陰へと移動しながら、炎が明るく輝くほうを見やる。

（朔秋さえ倒せば、翔波は冬惺の掩護に回れる。なんとか二対一の状況に持ちこめれば……）

吹き荒れる熱風の中を、翔波は火球を相殺しながら走る。

罠をしかけた場所、つまり昨夜のうちに淵妖憑きの物品をしこんでおいた場所の一つに、朔

秋を誘導する。目当ての位置に朔秋が来たのを見はからい、彼のそばの石柱に右手を向ける。

「万照成牙」

「天滅還海！」

相手の声に重ねるように、使役術の呪文を叫ぶ。この術に限っては翔波も最短の呪文で扱えるので、二つの術の発動は同時。朔秋の手元には炎が、石柱の根元からは淵妖が現れる。

飛び出した淵妖は、続く指示に従って朔秋を転ばせた。彼が体勢を立て直している隙に翔波が火球を放つ。遅れて迎撃した朔秋は、相殺時の衝撃波を至近距離で受けて弾き飛ばされた。

（やった――いや、まだだ）

受け身を取って即座に火球を放ってきた朔秋に、翔波は内心で舌打ちした。

（これでも駄目か。……操られているからかな。殿下のくせにしぶとい）

正三位と従一位。三階級の差は大きすぎる。本来、術比べでは翔波に勝ち目はない。それにもかかわらず今まで翔波が朔秋を押さえこんでいられたのは、得意の使役術を織り交ぜて変則的な戦い方をしていたからだ。

しかし使役術の道具は消耗品。手持ちの淵妖憑きの品はとうに尽き、用意していた罠も残りは一つ。つまり勝負をしかける機会はあと一度。それで決定打を与えられねば、終わりだ。

（術を直接ぶつけて気絶させる。――やるしかない！）

翔波は決意の光を瞳にともし、最後の罠の地点へと朔秋を誘い出していった。

――人は、その血筋によって生まれたときから乾ノ術の成長限界が定まっている。いくら家格の割に素質に恵まれているとはいえ、翔波が王族と比肩する乾術師になれる可能性はない。だけど、と翔波は思う。乾術師の階級がすべてじゃない。最強の乾術師にはなれずとも、乾ノ術の純粋な技量差を応用力や機転やそのほかの力で埋めて、そうやって自分は。

「天滅還海、昇れよ！」

朔秋が平たい石を踏んだとき、翔波は鋭く叫んだ。

石の真下から淵妖が勢いよく噴き出し、上に乗っていた朔秋がもんどりを打って倒れる。

（――僕は、閣下の最強の手駒になるんだ！）

すぐには起き上がれずにいる朔秋に、翔波は右手を向ける。

「天にありては万物を熱す烈光、地上に降りて――」

そのとき、ズキン、と喉が痛んだ。

（え――？）

声が出ない。乾いた熱風の中で休みなく呪文を叫んでいたせいで、喉がやられていたのだ。

いきなり声を失ったわけではなく、あくまで一時的な痛み。だがその痛みが引く前に、朔秋が身を起こしてしまった。彼の右腕がこちらに伸ばされる。彼の唇が呪文を紡ぎはじめる。

最後の勝機が潰えた。

――絶望が翔波の胸をよぎったとき、どこからか飛んできた泥の塊が朔秋の口に命中した。

朔秋が口に入った泥を慌てて吐き出す。その時間があれば、翔波には十分だった。
呪文の最後の文句を、痛んだ喉からほとばしらせる。
「――――万有を屠る顎となれ！」
気合いをこめて打ち放った烈火の渦が、宙を奔った。
視界を灼くほどの激しい炎は、目をつぶる暇さえ与えずに朔秋をのみこむ。
「ぐあっ……あああああ！」
朔秋はそのまま突き進む炎に押し飛ばされていった。ずっと後方の地面に叩きつけられ、一、二度はねるように転がる。
「……馬……鹿、な。この俺が、銀髪こぞうごとき、に……」
衝撃でつかの間正気に返ったのか、彼はよろよろと顔を上げながらうめいた。しかしすぐにがくりと地面に突っ伏し、気を失ったように動かなくなる。
（勝った……。従一位乾術師に、殿下に勝てた）
元主人を相手に初めて勝利を得て、翔波は余韻に震える自分の右手を見下ろした。
離れたところから綺理の歓声が上がる。先ほど泥の塊を投げてくれたのは彼女だ。乾術師の階級がすべてじゃないという言葉そのままに、勝機を作ってくれた。
翔波はほっと一息つくと、自分の喉の状態を確かめた。
まだ平気だ。この喉はもうしばらくもたせられる。冬惺に加勢できる。

（そうだ。利利は僕の炎を防ぐのにわざわざ障壁を出していた。正三位の炎でも、生身で受ければ傷つくってことだ。だったら、冬惺と二対一でかかれば！）

光明を見出して、青銅の瞳が輝く。

――鋼の砕ける音がしたのは、まさにそのときだった。

冬惺は、凄まじい速さと鋭さで繰り出される刀を、必死でしのいでいた。

息が上がる。汗がにじむ。利利が湿ノ力を放っているせいで足元がぬかるみ、足さばきが乱れる。反応速度が落ちていき、切っ先に衣を裂かれて皮膚に痛みが走る。

おまけにしばらく前から、刃を受けるたびに太刀を握る手に違和感が伝わってきていた。

「なかなか粘りますね。この私相手によく持ちこたえますね」

利利のほうはいっこうに疲れの色を見せず、薄笑いさえ浮かべている。彼は「ですが」と続けると、だしぬけに刀そのものにも紺青の光をまとわりつかせた。

「そろそろ限界でしょう。あなたも、その太刀も」

強い湿ノ力を帯びた刀が、冬惺の太刀と激しく打ち合わされる。

鋼の砕ける音がした。

太刀が真っ二つに折れ、刀身が回転しながら飛んでいく。

愕然とした冬惺に、刹利が片手のひらを向けた。
「白桜の冬惺、あなたでは私に勝てません。なぜなら、あなたは人だから」
「！……は……っ」
紺青の光球がみぞおちで爆ぜ、冬惺は息を詰まらせた。
体が浮く。宙を舞う。綺理が悲鳴じみた声で自分の名を呼ぶのを聞く。その残響が耳から消える前に、冬惺は後方の石柱に背中を打ちつけ、どさりと落下した。
（くそ……綺理と、翔波は……）
軋む体を叱咤し、泥土の上で身を起こす。
目に飛びこんできたのは、刀を収めた刹利が紺青の光の帯を放つ光景。
「よけろ綺理！」
標的となった綺理はすばやく横に跳んだ。しかし光の帯はぐんとしなって再度彼女に襲いかかる。綺理はこれも側転してかわしたが、それを見た刹利の口元に笑みが浮かんだ。
「やっ、嘘!?」
綺理が着地した場所は、泥化が進んでいたのだ。地面についた足が、膝までずぶりと沈みこむ。綺理の顔から――否、彼女だけでなく冬惺と翔波の顔からも血の気が引いた。
大淵妖の手のひらに、今までにない強さの紺青の光が集まる。練り上げられた湿ノ力が鋭利な刃の渦になり、泥に足をとられたままの綺理目がけてほとばしる。

――刹那。冬惺の脳裏に、禁忌を犯したときの光景がまたたいた。
あの夜の月の色と、刹利の瞳の色とが脳裏で重なる。重く湿った風。手の中には泥。金髪の少女が泥の化け物にのみこまれる様を幻視する。
（また、俺は守れずに）
――違う。そうじゃない。
（今度こそ、俺は！）
湧き上がった激情に突き動かされ、冬惺は泥を蹴って駆けた。
頭の奥がキンと澄み渡る。光が螺旋を描きながら綺理に迫るのが、ゆっくりと見える。翔波がかすれた声で乾ノ術を放とうとしている。綺理がきつく目をつぶる。
綺理。――おまえは俺が、守るから。

ずん、と大気に震えが走った。
足元の泥が波立つ感触。だが綺理の体には痛みも衝撃もない。綺理はこわごわと目を開け、碧玉の瞳を凍りつかせた。
満身創痍の冬惺が、こちらに背を向けて立っている。
彼は刹利の攻撃の射線に飛びこみ、光の刃の渦をその身に受けたのだ。突き進む光の渦に地

面の上を引きずられ、それでも彼は立ち続けて綺理の前で踏みとどまった。
「とう……せい……」
綺理は自分の鼓動をうるさく聞きながら、冬惺の背中を見上げた。
彼は決して大柄な少年ではないのに、いつだってその背中は大きく見える。この背中に昔から何度も守られてきた。だけど、こんなふうに身を捨ててかばわれるのは！
「冬惺！」
がくりと膝を折った冬惺に、綺理はようやっと泥沼を脱して近寄った。
彼の端整な顔は苦痛に歪んでいた。全身に多くの裂傷が走り、刹利との剣戟で負っていた傷も広がり、あちこちから鮮血が流れている。痛々しい様に、綺理は胸がつぶれそうになった。
「私をかばって……、なんで、こんな無茶するの……！　こんな、怪我で……」
「おまえに怪我させるよりは痛くない。――おまえを守れたなら、俺はいい」
冬惺は無傷の綺理を瞳に映すと、荒く息をつきながらも優しく言った。心底安堵したようなその微笑みに、綺理は泣きそうになる。涙をこらえて首を振る。
「よくないわよ馬鹿っ。私だってあなたを守りたいのに！　あなたに怪我されたら、私は……っ。……自分が傷ついてるのに、いいなんて言わないで！」
それに光の刃で受けた傷は、傷口を湿ノ力に侵されて血が止まらなくなってしまう。蒼白な顔で駆け寄ってきた翔波が、傷口に乾ノ術を使うという荒療治で無理やり悪しき気を抜いた。

そんな三人に、刹利がくすくすと笑う。
「人にしてはずいぶん打たれ強いですね、あなたは。ですがそれではもう戦えないでしょう。鏡作の翔波も、その喉ではもうあまり詠唱できないでしょう。王手ですね」
彼が悠然と歩んでくるのを見て、冬惺がかたわらの二人にささやいた。
「綺理、翔波。――聞け」
「嫌」
「綺理！」
「だって冬惺は方向音痴だもん。間違った道を選ぼうとしてるに決まってる」
綺理は冬惺を抱きすくめるようにすると、刹利をきっと睨んだ。――この人は私が守る。
二人の前には、翔波が守り刀を構えて立った。
「翔波、命令だ」
「承服しかねます。閣下を置いて逃げろというのなら」
翔波がかすれた声で答えたとき、刹利が淡く光る右手を上げた。紺青の光球が生まれる。
「どの道、逃がしはしませんよ。ご安心を。まとめて引導を渡してさしあげ……」
瞬間、風を切る音がした。
「！」
折れた太刀の先が、光球を貫いて刹利の手のひらに突き立つ。

白刃が飛来したほうを、綺理たちは一斉に振り返った。
「――どうにか間に合ったようだね」
浅葱色の光をまとった美しい童子が、苔むした石柱の間に立っている。
「刹利、これ以上私の《契約者》たちに手出しはさせないよ」
真羅。綺理は口の中で彼の名をつぶやいた。

「……これはこれは、真羅さま」
最初の驚きから覚めると、刹利はうやうやしく笑んだ。刀身だけの太刀を無造作に引き抜くと、傷一つ残っていない手を胸に当て、一礼する。
「独断で動いて申し訳ありません。ですが《契約者》を全員殺しさえしなければ、あなたが地上に留まるのに支障はないはず。一人二人は紅楓王家方の人間に処刑させても――」
「そう。もし《契約者》が一人でも生き残ってしまえば、私が淵海に還ることはない。だから君はキリたちを自分の手で殺そうとはしない。――ほかの大淵妖の《契約者》を手にかけるという禁を犯して、淵海に還されても、この私を道連れにできないのでは割に合わないからね」
真羅は冷ややかに返し、ゆっくりと近づいてくる。
向かい合う二人の大淵妖の間で、綺理たちは困惑してなりゆきをうかがう。
「……真羅さま。《契約者》を信用させるお芝居はもうよろしいのでは？」

「刹利。不信の種をまくお芝居こそもうやめたまえよ」
切って捨てるような返答に、刹利は慇懃な態度を消した。にぃ、と凶悪に笑う。
「そうですね。こうしてあなたが現れた以上、小細工は無用。――この七年間よく追っ手から逃げ続けたようですが、それももう終わりです。観念して淵海に戻りなさい。万宵さまと一つに戻りなさい。すべての淵妖を裏切りし者、妖王陛下のできそこないの分身よ」
（――え？）
悪意に満ちた言葉に綺理は息をのみ、冬惺が「そういうことか」とつぶやくのを聞いた。真羅の顔に悲しげな色がよぎるのを見た。そうして、唐突にすべてを理解した。
――真羅は、淵妖に追われていたのだ。
湿ノ神との約束を守るためとはいえ、妖王に逆らっているから。綺理たちに気づかれないようにしていただけで、彼はずっと同胞に追われていたのだ。
王都の西海門に現れた淵妖も、木取の里で襲ってきた淵妖の大群も、あれらはみな真羅を狙っていたのだ。真羅がよく子狐の姿に化けていたのは、淵妖の目を欺くため。旅の途中、彼がしばしば姿を消していたのは、追っ手の淵妖に一人で対処するため。――たった一人で。
（……っ、なんで！　私たちに言ってくれれば！）
衝動的にそんなことを思う。だが、自分のまわりに淵妖が集まってくることを隠したい、という思いは《契約者》である綺理にはよくわかる。

真羅は、災厄を引き寄せる種として綺理たちに拒絶されることを恐れているのだ。もし綺理たちが本気で真羅を突き放せば、彼は軽口を言い合う相手すらいなくなる。――地上を守るためにすべての同胞を敵に回す。そんな道を選んだ真羅には、綺理たちしかいないのだから。

（真羅、あなたは……）

彼は己の《契約者》たちとは目を合わせず、歩きながらため息をついた。

「やれやれ。刹利、君ごときが手下もなしにこの私に敵うとでも思っているのかね？」

「私を並の大淵妖とは思わないでくださいよ。私はあなたを捕らえて淵海に連れ戻すため、万宵さまより御力のかけらをいただいているのですから。それにあなたは、ここに来るまで私の差し向けた迎えと戦われていたはず。余裕ぶっていても、本当は消耗しているのでしょう？」

真羅は答える代わりに冷然とした表情を浮かべ、すれ違いざま、綺理たちに右手を向けた。

「!?」

「君たちは邪魔だ」

身を硬くした三人に、浅葱色の光の奔流がためらいなく放たれる。

だがそれは、人を傷つける凶暴な光ではなかった。

やわらかい浅葱色の光はただ水流のように綺理たちを押し流し、広場の端まで運んだ。地面に体が打ちつけられることもなく、三人の足はふわりと地につく。――ただし同時にその場が泥化し、翔波が慌てて湿ノ力を払う呪文を唱えた。術を三つ重ねてようやく足場が安定する。

「し、真羅に手伝われると、僕らが泥に沈むって……」
「翔波、おまえは喉を休めていろ。それにしてもあの馬鹿子狐。先に言え、いろいろと……」
傷口に泥が入ったのか、冬惺は片膝をついたまま顔をしかめた。
「で、でもとりあえず、戦線離脱させてくれた……のよね？」
言ってから、綺理ははっと気づく。
――今だ。降神術を使うなら、機会はもう今しかない。
真羅はあくまで湿ノ眷属。彼単独では湿ノ力を放出する方法でしか戦えないし、妖王の分身たる彼が本気で力をふるってしまったらこの広場は淵海に成り果てる。――そうなる前に！
綺理は急いで立ち上がった。腰の剣を抜き、地面にガッと突き立てる。これは、もうこの場を動かないというしるし。この一度で必ず決めるという決意の証。
巨石群の向こうに低く昇った太陽へと、綺理は手を伸ばす。
「帰命したてまつる――」
その手の先では、紺青の光が石柱の間を縫うように飛び交っていた。

紺青の光の縄が真羅に襲いかかる。そこにこめられた力は、綺理たちを相手にしていたときより遥かに強い。真羅はひらりとかわしたが、光の縄は生き物のように動いて執拗に彼を追っ

た。

「逃げるだけでは遊びにもなりませんよ。あなたは追っ手を退けるため、既に何度も力を使っているはず。自ら北瑛島を沈める手伝いをしているはず！　今さらなにをためらうのです？」

真羅は挑発に応じず、二本三本と増えていく光の縄を敏捷な動きでよけていった。

「私は湿ノ神との約束を違えはしないよ。地上の均衡は必ず保つ。これまでも、これからも。――私がこの七年間どうやって追っ手と遊んでいたか、知りたくはないかね？」

「湿ノ力を使わずに同胞を倒すすべがあるとでも？」

見えすいた嘘を、と吐き捨てた利利の眼前で、真羅が懐から黒い石と鋼鉄片を出す。

（？　あれは……火打ち道具？）

利利が気づいたときには、真羅は乾ノ術の応酬で枯れた草に火を放っていた。続いて真羅は、驚いて隙を見せた利利の手首をとらえ、彼の手を無理やり火に突っこむ。

「――！」

利利は本能的に湿ノ力を放ち、火を消した。真羅の手を振り払い、細い目を大きく見開く。

「まさか……淵妖を火に入れて乾かし滅ぼしたと？　そんな真似をすればあなた自身も……」

淵妖を火に押しつけている間、真羅も同じだけ痛手を受けていることになる。身を削ってでも自身の誓いを貫こうとする姿に彼の覚悟を感じ、利利はぞくりとした。

――利利が真羅の思惑に気づいたのは、そのすぐ後だった。

こんな荒業は、実際には小物の淵妖にしか通用しない。それを今この場で見せつけたのは、派手な動きで刹利の気を引き、時間を稼ぐため。真羅の真意の在り処は――《契約者》！

刹利はさっと振り返った。綺理が乾ノ術の予備動作のように右腕を伸ばしているのを認め、すべての光の縄をそちらに向けて放つ。

直後、紺青の光の行く先に、浅葱色の光の障壁が出現した。

「今さら気づいてももう遅いのだよ」

いく筋もの光の奔流をことごとく障壁で阻んだ真羅は、口元を笑みの形に歪めた。

真羅が障壁を作った途端、湿ノ力の渦が湧き起こり、地面が泥と化していく。泥化の波はぐんぐんと広がり、ついに詠唱中の綺理の足元をとらえた。

「――を紡ぎし灼熱の剣をとり――……っ」

片足が急に沈み、体の均衡が崩れる。しかし膝をついて降神術を中断してしまうその前に、負傷をおして立ち上がった冬惺が綺理の背をしっかりと支えた。

『――大丈夫だ、綺理。俺がついてる』

あたたかな体温と共に思いが伝わり、綺理は身の内に熱いものがこみ上げるのを感じた。一音一音に強い思いをのせて、呪文の最後の句を紡ぐ。

「天の雷窟より降臨したまえ！」
太陽をつかんで地に叩きつけるように、右手を振り下ろす。
「――大天火雷金翅明王！」
そして一条の稲妻が、天を切り裂いて降った。

「降神術――!?」
雷光と共に降臨した金炎の翼の明王の姿に、利利が愕然と声を上げた。
乾ノ神衆の放つ気によって泥化が止まり、地面が土に戻ってゆく。広場に満ちていた湿ノ力が払われていくのを感じ、真羅は嬉しそうに言った。
「――これでようやく、私も少しは本気を出せる」

火雷明王は綺理たちの前に降り立つと、緋色の髪をなびかせて巨石群のほうを一瞥した。
「我が姫は厄介なものばかりを相手にしている。泥人形がもう一体とは」
金の瞳に射貫かれた利利が、圧倒されたように身をすくませる。
その間に、綺理は地面に突き立てていた剣に手を伸ばした。剣を両手で構え、一息に叫ぶ。
「宿ってください、大天火雷金翅明王！」
「承知した」

火雷明王が短く応じると、彼の髪が、甲冑が、体そのものが紅の炎になった。紅と金の炎の渦に身を変じた火雷明王は、あっという間に綺理の剣の中に吸いこまれていく。

火雷明王を宿した剣は、真羅が憑いた太刀とちょうど対のようだった。

全体が紅の光を帯び、刀身は炎を凍らせたかのように赤々と輝いている。熱くはない。柄を握る手が焼けることはない。けれど強大な乾ノ力が剣の中を廻り、脈打っているのを感じる。

「淵妖殺しの火の剣……か」

冬惺のつぶやきに、綺理は火雷明王の言葉を思い出した。

『いかなる大淵妖も、核となっている勾玉を私の宿った剣で断ち斬れば、葬れぬことはない』

銀の右目でずっと刹利を見ていたはずの翔波に、鋭く問う。

「翔波、刹利の勾玉の位置はわかる？」

「胸の中央！」

かすれた声での返答を聞くと、綺理は火の剣を手に走り出した。

目指す先で、劣勢を知った刹利が早々に身を翻す。

（逃げる気!?）

乾ノ神衆は太陽が隠れれば天上に戻ってしまう。翼を持つ火雷明王も、日の光が一切差しこまない場所までは追っていけない。刹利はそれを見越して森の奥深くへ逃れ――ようとした。

しかし。

「私が君を逃がすとでも思ったかね？」

冷笑と共に浅葱色の光の壁が巨石群を囲み、刹利を巨石の円環の中に弾き戻した。

――真羅が力を行使した影響は凄まじかった。火の剣から放たれる乾ノ力が泥化を抑制しているはずなのに、地面が渦を巻くようにして泥に変わっていく。急激にゆるんだ地面は巨石を支えきれず、石柱が次々に傾き、沈みこみ、見る見るうちに巨石の円環が崩れていく。

走り寄った綺理の前にひと際大きな石柱が倒れこみ、刹利のもとへ導く橋のようになった。浅葱色の光の檻も、そこだけが一筋の道のように開く。

綺理の足が倒れた石柱にかかる。石柱の端と端とで、綺理と刹利の目が合った。

七年前と同じ赤瑪瑙の瞳に、勝機を見出したような光がともる。

彼は悟ったのだ。乾ノ神衆の宿った剣は脅威でも、使い手のほうは恐るるに足らぬと。綺理程度の剣技では、刹利に刃を浴びせることは不可能だと。

刹利は綺理に斬りかからんと、刀を抜き放つ。

だが刹利が地を蹴る寸前、その背後に小さな人影が現れた。

真羅だ。

彼は細い腕で刹利を羽交い絞めにすると、驚愕が駆け抜ける中、声を張り上げた。

「今のうちに斬りたまえ、玉造のキリ！」

――石柱の上を走る時間は、ひどく長く感じられた。
刹利の顔を恐怖が彩る。彼は全身から紺青の光を放とうとしたが、それよりも早く真羅を包む浅葱色の光が膨れあがる。明るい浅葱が暗い紺青をねじ伏せ、刹利の動きを封じる。
綺理の目は既に刹利ではなく、真羅を見ていた。
真羅は刹利の真後ろの傾いた巨石の上に立ち、羽交い絞めにする相手との身長差を埋めている。綺理は近づくにつれて彼を少し見上げる形になる。
（どうして。このままじゃ、あなたも一緒に斬ってしまうのに）
不意に、綺理の耳に一つの声が蘇った。
『《契約者》の呪われた軛から解放されたいと望むなら』
――真羅が滅びれば《契約》は破棄される。冬惺と翔波を解放してあげられる。
刹利の勾玉は胸の中央、真羅の勾玉は左胸。位置はほぼ重なっている。
そう、このままでは刹利もろとも真羅を斬ってしまっても仕方がない。今なら、綺理は真羅を殺したくて殺すわけではないことになる。
――真羅は、異変を起こしていた悪妖を退治するために身をなげうったのだ。
善い心を持った大淵妖は立派な最期をとげる。おかげで北部の異変は無事に解決。綺理たちも《契約》から解放されて、大手を振って王都に帰る。なんて綺麗な結末だろう。――なのになぜ自分は、この石柱の上を走りきるときが永遠に来なければいいと思っているのだろう。

（冬惺のために……冬惺と翔波のために《契約》を破棄しないといけないのに）

真羅と刹利のもとまで、あともう何歩もない。

稽古通りの動きで剣を振り上げる。以前、迷わずに突き進めと言ったのは誰だったか。

見つめる先で真羅が顔を上げ、視線が絡んだ。

どくん、と心臓がはねる。綺理を見つめる翡翠の瞳は優しく、とても穏やかだった。

『私に心を与えた君たちが、私の滅びを望むなら、きっと私は抗うまいよ』

――望むなら？

最後の一歩を踏みこむそのとき、唐突に一切の迷いが晴れた。

（――私は望んでない！）

神経を研ぎ澄まし、炎の輝きを宿した刃を斜めに振り下ろす！

キン、と硬い物を一つ断つ感触が、柄を握る手に伝わってきた。

刹利の姿が瞬時に膨張し、本性の巨大な泥の塊に戻る。同時に剣から灼熱の烈気がほとばしり、泥を引き裂いた。爆発的な乾ノ力の渦が生じ、轟音が刹利の断末魔の叫びをかき消して響く。

綺理の眼前で、紺碧の泥の妖が乾いた砂となって崩れ落ちた。

その向こうには、真羅が童子姿のまま立っている。
彼は翡翠の瞳を大きく見開いていた。――そして、その体がぐらりと傾いだ。
（……え？）
思わず綺理は火の剣を取り落とした。広げた両腕の中に、真羅が倒れてくる。
軽い体を受け止めたとき、パキン、と淵妖が砂に変わる音がした。
「う、そ……」
真羅の指先がざらりと崩れ、小さな体が端から少しずつ砂と化していく。
「なんで……？　私、斬らなかったのに。――あなたのことは斬らなかったのに！」
火の剣の切っ先は、正確に利利の勾玉だけを斬った。しかし――。
綺理は、抱きとめた真羅の肩ごしに一つの人影を見た。
崩れた巨石群を挟んだ、広場の反対側だ。いつの間にか朔秋が立ち上がっており、右手をこちらに向けていた。――利利が滅びる間際に彼を操り、真羅の背中に乾ノ術を放たせたのだ。
「――天にありては万物を照らす御光、地上に来たりて万有を食む牙となれ！」
翔波が術を放ち、操り主が滅んで正気を取り戻しかけていた朔秋を吹っ飛ばした。朔秋の体が木立の間に消え、斜面をすべり落ちる音が後に続く。
綺理は真羅を腕に、呆然とへたりこんだ。
火の剣の強烈な余波と、従一位乾術師の強大な炎。どちらか一方だけならともかく、真羅は

その両方をまともに食らったのだ。いくら彼でも、ただですむはずがない。
「綺理！　いったいどうし……真羅!?」
駆け寄ってきた冬惺と翔波が、地面に横たえられた真羅を見て息をのんだ。ゆっくりと、しかし確実に砂になっていく彼のかたわらに、片膝をつく。
「おまえ……滅びるのか？」
「……そのようだね。このところ追っ手と遊び通しで疲れていたのが祟ったかな。せっかくキリが私を斬らずにすませてくれたというのに……これでは時間の問題だ」
持ち上げた右手が手首からざらりと崩れるのを見て、真羅は苦笑した。
「君たちにとっては悪くはなかろうよ。私が滅びれば君たちは《契約》から解放される」
「……っ」
三人は声を詰まらせたが、すぐに翔波が頭を振って叫ぶ。
「だけど、だからってこんな終わり方はないだろ！　僕らはもう君を退治する気はなかった。あんな捨て身の真似をしなくたって、君が味方だってことは信じたんだ！」
真羅はちょっと目を瞠り、ありがとうと顔をほころばせた。彼の体が乾いていくのをなすすべもなく見守っていた綺理は、ふと彼の腰のひょうたん水筒に目を留めた。
「あ、そ、そうだ。お酒！　魂のこもった水は力になるって……」
「とっくに空だよ、キリ。……ここ最近追っ手が多くてね。補充する暇がなかったのだよ」



手にした水筒の軽さに、綺理はそんなとうめく。水薬の持ち合わせはもうない。あたりは火の剣の余波で乾き、水場なんてどこにもない。

そのとき翔波がはっと顔を上げた。

「――火雷明王！　なにか……なにか知りませんか。淵妖を助ける方法を！」

綺理は弾かれたように振り返り、剣から陽炎のように現れた火雷明王を仰いだ。彼は剣に宿っていた間のことも知覚しているのか、真羅を困惑気味に見下ろしている。

「……淵妖にとってほかの大淵妖の勾玉は大きな力になる、とは聞くが……」

「！　刹利の勾玉のかけら？」

綺理と翔波は、あたりに積もっている乾いた砂――滅びた大淵妖の残骸に視線を落とした。砂をかきわけて勾玉を探しはじめた二人に、それまで静観していた冬惺が動いた。膝をついていた場所の真下の砂に手をつっこみ、二つに割れた赤瑪瑙の勾玉をつまみ出す。もし彼がそこにあることに気づかないふりをすれば、絶対に見つからなかったであろう勾玉を。

「――これをどうするんだ。どうすればおまえの糧になる？」

真羅はまたたいた。差し出された勾玉から、自分を囲んで見下ろしている三人に目を移す。

「……君たちは、そろいもそろって私を助けようとしているのかね？」

「ああ、どうやらそうらしいな」

冬惺は不本意そうな声で返し、真羅を睨んだ。

「たぶん、おまえが気に入らないからだ。おまえは『信じろ』とも『助けろ』とも言わないまま、さっさとあきらめて悟ったような目をしている。そういうやつは気に食わない」

九年前白桜の陣幕にいた捕虜の少年の目が、冬惺の脳裏をかすめた。

真羅がそっと目を伏せる。

「……勾玉を、私の勾玉の上に置いてくれたまえ。だがね――」

冬惺が勾玉のかけらを二つ、真羅の左胸にのせる。しかしなにも起こらない。なにも。

声をなくした三人に、真羅は淡く笑った。

「――私の体は、玉が溶け合わぬほど乾いてしまった。本当にもう、あきらめるしかない」

またパキンと音がして、彼の膝から下が装束ごと砂化する。彼の命の刻限が近づく。

「だが私はそれでもよいのだよ。――私は淵妖にじかに触れると、淵海にいた頃の記憶が呼び覚まされる。本体の、万宵の心に引きずられそうになる。いつまた心変わりして湿ノ神との約束を破ろうとするかわからない」

「おぬし、まさか妖王の……」

翼を消して遠巻きに見守っていた火雷明王が、驚いたように眉間のしわを消した。ややあって、「……国産みの約定を守っていたのか」と得心がいったように言う。

真羅は火雷明王とちらと目を見交わしてから、言葉を継いだ。その声も、だんだんとかすれてくる。

「だからその前に朽ち果てて、私の力が永久に妖王に戻らぬようにできるなら、それも悪くはないのだよ。その上、君たちに見送られて逝けるなら、理を外れしものには過ぎた幸せだ。――雛鳥よ、せいぜいキリたちの手助けをしたまえ。私は、もう……」

「真、羅……っ」

三人を見上げる翡翠の瞳から徐々に光が失われ、綺理はまぶたがじわりと熱くなるのを感じた。砂に埋まるように端からさらさらと崩れていく真羅に、胸を詰まらせて叫ぶ。

「やだ……こんなのやだよ、真羅。あなたがいいって言っても私は嫌！……だって、だって私たち、――やっとちゃんと友達になれると思ったのに!!」

――そして、綺理の目からこぼれた熱いしずくが、真羅の頬に落ちた。

「……え？」

最初につぶやいたのは誰だったか。

涙が真羅の頬に吸いこまれた瞬間、彼の体を侵食していた砂化が止まった。

左胸に置かれていた赤瑪瑙の勾玉が光を放つ。二かけらの澄んだ赤褐色の瑪瑙は、溶けこむように真羅の胸に消えていった。

呆気に取られた全員の前で、真羅の体が淡い浅葱色の光に包まれた。水のように冷たい光の

中で、砂になったはずの手足が再生する。
「蘇生した……？　なにゆえ玉を吸収できるように……」
火雷明王の言葉に、翔波がはたと思い当たったように声を上げた。
「涙――強い魂のこもった水か！」
それもただの涙ではない。真羅のことを思い、真羅のために流された涙だ。
彼に生きていてほしいと、迷いなくまっすぐに願った。綺理のその心が真羅の渇きを癒やし、滅びのさだめに一筋の穴を穿ったのだ。
生気の戻った翡翠の瞳が自分を映すのを見て、綺理は潤んだ声を上げた。
「真羅……真羅、大丈夫なの？　もう砂になったりしない？　消えてしまったりしない？」
指先でおそる真羅の手に触れる。人と同じにやわらかい。涙の熱がしみわたったように、ほんのりとあたたかい。そっと握っても、彼の手が砕けることはない。確かな感触に安堵するあまり、綺理の視界が再びじわりとにじんだ。
「これは……どうも、滅びそうにないね。命が渇くのが、止まった」
真羅は自分が助かったことがいまだに信じられない顔で、片腕をゆるゆると上げた。自分の生を確かめるように、あまり力の入らない手を握ったり開いたりする。
綺理はそんな真羅を抱き起こし、強く強く抱きしめた。生きてる。彼はここにいる。彼の胸の奥で、勾玉が鼓動のように脈打っているのが伝わってくる。

「よかった！　真羅、よかったよ、よかったあ！」

まるでそれ以外の言葉を忘れてしまったかのように、綺理はよかったと繰り返す。彼女の腕の強さにようやく生の実感を得たのか、真羅はぼんやりと見開いていた瞳を細めた。

「……まさか、大淵妖のために泣いてくれる人間がいるとはね」

彼はほのかに笑むと、人のあたたかさに慣れていないような、くすぐったそうな声でささやいた。

「――ありがとう、キリ」

その言葉ですべての緊張が解けたように、冬惺と翔波もほっと肩の力を抜いた。砂の上にすとんと腰を下ろし、どちらからともなく微笑みを浮かべる。

そしてふと冬惺は、火雷明王が身を翻す気配を感じ、彼を斜に見上げた。

「……天上に帰るのか？」

「討つべき悪妖はもう討った。……それに私は乾ノ神衆だからな。涙は湿っぽくて好かぬ」

火雷明王は朝日に透けてゆきながら、妙に言い訳じみたことを言った。

「ではな。いずれまた会うことになろう」

長身の乾ノ神衆が光になって消えると、彼がかすかに放っていた乾ノ力の波動も消える。肌を叩く熱気が弱まった途端、真羅が楽になったように息をつくのを聞き、冬惺は火雷明王が早々に姿を消した理由がわかった気がした。

視線を戻す。正直、綺理が真羅を抱きしめているのは面白くないが、今回に限っては悪くないと思った。綺理が笑っている。真羅も照れくさそうに笑っている。翔波も、自分も微笑んでいる。――それは悪くない。

今は嬉し涙で頬を濡らす綺理を、冬惺は朝の光の中でまぶしそうに見つめていた。

やがて綺理が泣きやみ、真羅から離れると、真羅は困ったような顔をしてみせた。

「あー、しかしだな……水をさすようで悪いが、君たちは本当に『よかった』のかね？」

私を滅ぶに任せておけば《契約》から解放されたのに、と言外に匂わせた真羅に、綺理たち三人は顔を見合わせる。あのとき真羅を助けようとしたのは全員同じ。今さら《契約》を破棄する機会を棒に振ったことをほかの二人に謝るのも、妙な話だ。むしろ――。

「ね、冬惺。これってたぶん、私が勝手に《契約》を続行させたことになるのよね？」

綺理は小首を傾げて言った。彼女の意を察した翔波が、にやりと笑って口を挟む。

「いやいや、綺理。真羅を助けた手柄を独り占めするのはどうかと思うね。火雷明王に勾玉のことを聞いたのは僕だし、勾玉がなかったら真羅が助かったかどうかわからないだろ」

「それじゃ私たち三人みんなの意思で、《契約》続行の道を選んだってこと？」

言って、二人は冬惺を見た。――たとえ最初は冬惺が二人を巻きこんだのだとしても、今はもう違うのだと。綺理も翔波も自らこの道を選んだのだから、冬惺にはもう二人に負い目を感

じる必要はないはずだと。そう伝えるように。

まなざしにこめられた思いに、冬惺は七年間心に絡んでいた泥が流れ去るのを感じた。自分を責めることから離れられずにいた心が、ゆっくりと動き出す。肩がふっと軽くなった気さえして、冬惺は二人をまじまじと見つめた。

それから彼は表情を引きしめ、決然と言う。

「――たとえ《契約》を破棄しても、妖王が北瑛島を狙っているという事態に変わりはない。どちらにせよ俺は、瑛国を守る護国大将軍として静観はできない。妖王の企みは絶対に阻止する。そして妖王から北瑛島を守りきれば、『淵妖から大切な人たちを守る』という願いは叶ったことになるはずだ」

冬惺たちが真羅の存在を肯定し、《契約》を呪いととらえなくなれば、真羅を排除することは《契約》を果たす条件に入らなくなるから。

「だったら、真羅――」

その次にくる言葉を察して、綺理と翔波は冬惺と声をそろえる。

「《契約》から解放されるのは、《契約》を果たしたときでいい」

「……これからはみんなで一緒に戦おう？　だから、早く元気になって」

綺理は真羅ににっこりと笑いかけた。仲間として、彼と共に戦ってゆく。そう決めたのならきっと、《契約》は罪の名から絆の名に変わるはず。

二人の少年も、意地の悪い笑顔を作って口々に言う。
「だいたいさ、《契約》っていうのは大淵妖のほうが願いを叶えてくれるものだろ。願いを叶えてもらわないまま《契約》を破棄されたら、迷惑のかけられ損な気がするんだよね」
「確かに。この大淵妖を馬車馬のように働かせないとちっとも割に合わないな。太刀にでも憑かせて存分にこき使ってやるから、逃げるなよ。子狐」
「……本当に、君たちは」
いい性格をしている、とぼやこうとしたところで、真羅はふと言葉を切った。翡翠の瞳を和ませ、こらえきれなくなったように口元をほころばせる。
そして彼は三人の《契約者》をまっすぐに見上げ、かみしめるように言った。
「――私が見こんだのは、どうやら最高の《調停者》たちだったようだ」

終章　今はただ、理の外で

真羅は片手で口元を覆い、鉛色の液体が半ば残っている杯を卓に置いた。
「……突き抜けるような刺激と共に舌がびりびり痺れ、後を引く苦味が喉の奥に襲ってくる」
「ふんふん、生の旅立草の煎じ薬は刺激と苦味、ね。ほかには？」
「思わずあの世に旅立ちそうなまずさだと書き加えてくれるかね、キリ。……というかだな、君は私のことを思うふりして、私を実験台にしていないかね!?」
「気のせい気のせい。ほら真羅、ちゃんと全部飲まなきゃ。真羅が早くよくなるようにって真心をこめて煎じたから、力になるでしょ？　はい我慢我慢、良薬口に苦し！」
「これは毒だろう!?」
「回復の助けになってるんだから薬よ。あ、翔波。これあなたの薬ね」
「ありがとう綺理。あー、とろりと甘い薬が痛んだ喉によく効くなあ。実に実に飲みやすい」
「……っ、実に実にいい性格をしているよ、君たちは」
真羅は涙目で杯を干すと、卓に突っ伏した。彼は、綺理がいそいそと寝台のほうへ向かい、冬惺の世話を甲斐甲斐しくするのを、片目をすがめて見る。
「……少年の分の薬湯を横取りしたほうが力になったかな」

正気に戻った朔秋に追っ手をかけられる前に、急ぎ紅楓王家領を脱し、最寄りの町のこの宿に落ち着いてから三日。冬惺は気力で無理やり体を動かし続けていたツケで、なかなか寝台から離れられずにいた。熱は下がったようだが、全身に巻かれた包帯はまだ取れない。

薬湯をすすりながら綺理に包帯を替えてもらっている彼を遠目に、翔波は卓に肘をついた。

「――あのさ、真羅。今、紅楓方の内部はどうなっていると思うかい？」

「ふむ。一斉に暗示が解けて混乱しているだろうね。だがサクシュウは操られていた間の記憶が飛んでいるし、キリが降神術を使ったのを目撃した者はいない。この件に大淵妖がかかわっていたことに気づかぬまま、みなが自分に納得できる話を頭の中で作り上げるだろう」

同じくいまだに本調子でない真羅は、茶で口直しをしながら応じた。

「それじゃもし白桜方が、『紅楓家当主の側近が大淵妖だった』って公表してみたら？」

「紅楓方の勢力に大打撃を与えられると？　従者、証拠はないのだよ。そもそも利利は周囲に強い暗示をかけていたようなのでね、サクシュウの側近が一人消えたことを深く気にかけている者自体いるまいよ。……従者、茶をもう一杯くれたまえ」

「はいはい。そういえばさ、利利はずいぶん前から紅楓方に潜りこんでいたらしいんだけど」

翔波は茶をこぽこぽと注ぎながら言った。立ちのぼる湯気が片眼鏡を曇らせる。

「――もしかして、大淵妖が王家や貴族を裏から操るって事態は、今回に始まったことじゃないんじゃないのかい？　たとえば金蘭王家が二つに分かれて争いだしたのも……」

「さてね。あまり深く考えると重くなるよ、従者」
真羅はそっけなく返し、熱い茶を吹き冷ましはじめた。

その間、冬惺の肩の包帯を巻きなおしていた綺理はといえば、
「今後は自重してよね。これからはもう躍起になって私を守ろうとしなくていいんだから」
傷の経過がよいことに安心し、今まで控えていた小言を口にしていた。
冬惺の眉がぴくりとはねあがる。
「待て、綺理。どういう理屈外れの論法だ、それは。俺以外におまえを守るやつがいるとでも？　あの使い勝手の悪い乾ノ神衆には、おまえをそばで守ることなど――」
「なんで火雷明王の話になるの。私が言いたいのは、もう冬惺は無駄な負い目を感じなくてよくなったでしょ、ってこと！　私たちはもうあなたに『巻きこまれた』わけじゃないもの」
償いのために身を犠牲にしてでも守らねば――と気負う必要は、もうどこにもない。
誇らしげに言った綺理に、冬惺は虚をつかれたように目を瞠った。彼は己の心に問いかけるように沈黙していたが、やがて静かに首を横に振る。
「……それでも俺は、おまえに怪我させるくらいなら自分が怪我したほうがましだ」
今度は綺理が眉をはねあげる番だった。
「私がよくないのよ！　冬惺が無茶するたびに私がどんな思いをしてると思ってるの」

「！　おまえ、そういう台詞は自分の行状を足りない頭を絞って思い出してから言え。綺理が囮になって捕まったとき、俺がどんな思いをしたと思ってる！」
「あれは冬惺が絶対に助けにきてくれるってわかってたからよ。ただの捨て石作戦とは違いますー。とにかくあなたは自分の身を大事にしなさい。いいわね？」
「だから自分の体をどう使おうが俺の勝手だろう。命令される筋合いはない！」
「あるわよ！　だって私は冬惺の薬師だもん。これからもずっとずっと一生、あなたの怪我を治すのは私だもん！」
勢いに任せて叫んだ途端、しんと部屋が静まり返った。
琥珀の瞳にまじまじと見つめられ、ついでに背中に翔波と真羅の視線を感じ、綺理は真っ赤になった。真羅がにやにやと笑いながら「一生？」と繰り返す。
「そ、そそれで返事は？」
綺理は包帯の交換に集中するふりをして顔を伏せた。ややあって、冬惺がため息をつく。
「――何度でも言うが、俺はおまえを守れるなら怪我してもいいんだ。きっとこれからもずっと、俺が命をかけて守りたいと思うのはおまえしかいないから」
本気の声で断言されて、綺理は包帯を落としかけた。怒らなくてはいけないところなのに、息が詰まって何も言えない。指の先までかっと熱くなり、包帯を替えるために冬惺の裸の上半身に触れるというだけの行為を、急に意識するようになった。

狼狽する綺理をよそに、冬惺は続けた。

「だが怪我すると俺の薬師が怒……悲しむから、それは嫌だ。できるだけ、怪我しないように心がける」

途中で言い直したが、なんと言いかけたかは丸わかりだった。この期に及んで綺理の赤面の理由を勘違いしているらしい彼に、綺理は思いきり脱力する。

（し、心臓に悪い……。……でもまあ、自重するって言ってくれただけ前進と思わなきゃ）

動揺をおさめて自分を納得させた直後、冬惺が軽く首を傾けた。

「――が、困ったな。どうやら俺は、綺理に手当てされるのがけっこう好きらしい」

（……っ、……な、なんでこの男はいつもいつも――……！）

再び赤くなってじたばたする綺理を遠くから見守り、翔波と真羅は同時につぶやいた。

「あれで口説いているつもりが全然ないっていうんだから、冬惺も質が悪いよなあ……」

「少年は憎まれ口を叩いているときより、ああいう台詞を吐いているときのほうが凶悪だな」

一行は冬惺の快復を待ってから出立し、木匠家領を通って西海道を目指した。

偽乾宝薬騒動が起きた町は、行きに立ち寄ったときより空気が乾いていた。

淵妖を集めて指図していた刹利を綺理たちが倒したため、湿ノ力の上昇が沈静化したのだ。流民が減って治安がよくなり、乾宝薬も出回って病人が少なくなっている。

さらに、一両日中に王都から乾術師部隊が到着するとのことで、人々の顔は明るかった。

「元凶の大淵妖がもういないからね。乾術師たちがせっせと湿ノ力を払っていけば、いずれ北部の乾湿の均衡は元通りになるだろうよ。滅びた村にもまた人が戻るはずだ」

「ならば後始末は乾術師連中に任せるか。だが俺たちも、大淵妖を退治したことくらいは兄上に報告しないとならないからな……。真羅、今から俺たちが王都に帰っても、前回からだいぶ間が空いているからすぐに災いが起きたりはしないだろう？　数日は大禍なく過ごせるか？」

冬惺が問うと、真羅は「もっと長くても問題はないよ」と請け合った。

「前回は私を追ってきた淵妖のせいで少々特殊だったがね。もともと君たちは、私が湿ノ力の放出を抑制しているから、普通の《契約者》に比べてずっと影響が少ない。それに私が君たちのそばにいればより完璧に湿ノ力を抑えられるのでね、王都にまた半年や一年いても災いを招く恐れはないのだよ。……王都の中まで私を追ってくるような淵妖も、そうそういないしね」

言って、真羅はほのかな笑みを三人に向けた。

「心配せずにひとまず王都に向かえばいい。――帰る場所があるなら、帰りたまえよ」

夏空を仰ぐ西海道を、三頭の馬が王都輪瑛へと南下していく。
内の一頭にまたがる冬惺は、前を行く綺理をぼんやりと眺めながら考えごとをしていた。
心を占めているのは、何日も前に彼女と交わした会話。
たとえ《契約》がなくなっても、自分が綺理を守りたいと思う気持ちに変わりはない。負い目が消えた今だからこそ、そう確信できる。——けれどその感情の源はなんだろう？
（大事な幼なじみだから、といっても、翔波のことは命をかけて守ろうとは思わないしな）
もっとも、償いという理由もないのに主人に身をなげうって守られたら、従者としては嫌だろう。だが綺理と翔波とで自分の抱いている感情が違う理由は、それだけではない気がする。
（あいつらはどちらも俺の一歳下だし、つきあいの長さは一年しか変わらない。政治的重さの違いは関係ない。男女差……が一番近いか？　だがか弱くなさは似たようなものだろう……）
答えは出ない。出なくてもまあいいかと思いはじめたとき、冬惺はふと綺理の髪結い紐に目を留めた。以前買ってやった蓬の組み紐を、彼女はいまだに使い続けている。
「……」
工夫して結ばれているので一見わからないが、ところどころ変色した箇所がある。それを見て感じた通りに、冬惺は行動した。馬を寄せ、手を伸ばして組み紐をするりとほどく。
「え？　ちょっと冬惺、なんでとるの！」
「かなり汚れているだろう。この泥汚れはもう落ちないぞ」

「……う。あの、ごめんね、大事にするって言ったのに」
「それはいい。だがこれはもう使うな。自分をみすぼらしく見せたいというなら別だが」
綺理の綺麗な髪には綺麗なものが似合う。そう思って組み紐をしまおうとすると、その手を綺理ががしっとつかんだ。
「ま、待って、返して！　えっと、ほら、剣の柄に巻くから！」
「それならまあ……。そんなに気に入ったのか？　つくづくおまえの審美眼は疑わしいな」
組み紐を返しながら、冬惺はこれをあげたときの綺理の嬉しそうな顔を思い出した。地方の小さな市だったからこんな物しかなかったが、品揃えのいい市ならもっと――。
「――王都に帰ったら、もっとおまえに似合うのを買ってやる」
触り心地のいい金髪を一房つまんで言うと、綺理はやっぱり嬉しそうな顔をした。今から楽しみでならないのか、顔を上気させて弾んだ声を出す。
「それじゃ私も冬惺に髪結い紐をあげたい！　ね、一緒に選んで交換しよ？」
「そうだな。王都に帰って少し落ち着いたら、また三人で市を回るか。なあ翔波――」
「悪いけどその日がいつであろうと僕は用事があって行けないことになってる。だから二人だけで行きなよ。二人だけで」
妙に強制力のある笑顔で返され、冬惺は黙った。いつから翔波は、身につける物は自分一人で選ぶ主義になったのだろうか。昔は嬉しそうに綺理に見立ててもらっていたくせに。

なにやら目で会話している綺理と翔波に、内心首を傾げていると、翔波が口を開いた。
「そういえば冬惺。今さらだから遠慮なく聞くけど、君は七年前そもそもなにを願おうとしていたんだい？　淵妖から僕らを守るっていうのは、真羅が現れたから思ったことだろう？」
「ああ……結局それは思い出せないままだ。なんだったんだろうな……」
そこに、翔波と相乗りしている真羅がからかうように声をかけた。
「少年。君はなにか不純なことを願おうとしていたから、思い出したくないだけではないのかね？　たとえば、キリの心が自分のものになりますように、とか」
瞬間。
冬惺は、自分の心臓がどくんとはねるのを聞いた。
「――それは俺の誇りにかけて絶っ対にありえない!!」
理由の知れない動揺を隠すように叫ぶ。そうだ。なにものかの力を借りて誰かの心を無理やり自分のものにしようとするなど、人としてあってはならない。自分がするはずがない。だから今心拍が乱れているのは、決して図星を指されたからではない。
ではなぜなのだろうか、と考えたとき、頭の隅でなにかがちかっと光った。さっきまで考えていた疑問の答えが、垣間見えたような気がした。
しかしその感覚はすぐに消え、冬惺はやはり「まあいいか」と忘れることにしたのだった。

一方、そんなやりとりを近くで聞いていた綺理のほうは、
「それは俺の誇りにかけて絶っ対にありえない!!」
（さ……最上級で否定された――――！）
落ちこんでいた。
そりゃ私だって冬惺がそんな願い事するとは思わないけど、でもなにも全力で否定しなくても、いやいやあくまで七年前の話なんだから……と、馬の背の上でぐるぐると考える。
だいたい冬惺が鈍すぎるのだと、つい恨みがましい視線を向けた綺理は、彼の様子がいつもと違うことに気がついた。
（……あ、あれ？　冬惺、なんか微妙に顔が赤くなってる？）
ひょっとしてこれは脈ありだろうか、と期待に胸がときめいた。
もちろん冬惺のことだから、思わせぶりな態度をしていても実はなにもない、ということは十分考えられる。それでも、いつになくうろたえたように前髪をかき上げる冬惺がなんだか可愛かったので、綺理は嬉しいようなくすぐったいような幸せな心地で彼を見つめていた。

「――で、結局のところ、冬惺のもともとの願い事ってなんだったのさ？」
「さてね。実のところ私もそこまでは読めなかったのだよ。だから案外、『淵妖から大切な人を守りたい』という願いとほとんど変わらないものだったかもしれないね。――と、そうだ」

小声で翔波と話していた真羅は、ふと翡翠の瞳を道の先に向け、冬惺を呼んだ。
「少年。一つ頼みたいことがあるのだが、よいかね？」

緑が切れ、視界が大きく開ける。
真昼の太陽を照り返して薄青に揺らめく泥の海が、見渡す限りに広がっていた。
「頼みって？　まさか、ろくでもないことじゃないだろうな」
淵海を一望する坂の上で馬から下りた三人は、崖の際に歩んでいく真羅を怪訝な顔で見た。
夏の風が吹きぬけ、金と銀が一房ずつ交じった真羅の黒髪をなびかせる。つかの間、淵海を見つめていた彼は、やがて薄色の結い紐を揺らして三人を振り返った。
「トウセイ、私の髪を切ってくれたまえ」
「それは――」
「後ろ髪を、引かれぬように」
うなじで結われた長い髪の束を軽く持ち上げ、真羅は歌うように言う。
「決して万宵の心に引きずられることがないように、決して淵海に引き戻されることがないように。改めて、淵海と決別するために」
淵海を背に立ち、強いまなざしでこちらを見上げてくる真羅に、冬惺はふっと息をつく。

冬惺が新調したばかりの太刀を抜こうとしたとき、翔波が彼の前にすっと手を出した。
「こっちを使いなよ。髪を切るにはちょうどいい」
差し出されたのは守り刀。冬惺は翔波とにやりと笑みを交わして受け取り、鞘を払う。
綺理と翔波が厳粛な気分で見守る中、冬惺は真羅の首の後ろに守り刀を差し入れた。
陽光に刃が閃き、つややかな黒髪が根元から一息に断ち切られる。
真羅は、軽くなった頭を一つ振った。落ちた結い紐を拾い上げ、綺理に向き直る。
「キリ、私も人間と同じ速度で髪を伸ばすようにしよう。だから君たちと時を重ねてこの髪が再び長くなったとき――、また、髪を結ってくれるかね？」
少し照れくさそうな微笑みに、綺理は満面の笑みで返した。
「うん！　約束する！」
約束。この翡翠の瞳の大淵妖と共に歩んでいく。彼と共に妖王からこの地上を守り抜く。
それが綺理たちの負った使命で、――きっと、真羅との新たな《契約》なのだろう。

冬惺が右手を大きく振りかぶり、心をからめ捕っていたすべての過去を振り捨てるように、黒い髪を淵海に投げ捨てる。
王都へと吹きゆく風に舞いながら、髪は細かな砂に変わり、そうして果てしなく広がるその海へ――世界の淵源の海へと吸いこまれていった。

あとがき

はじめましての方も、お久しぶりの方も、本書をお手にとっていただきありがとうございます。薙野ゆいらと申します。

今回お届けするのは、前作とは打って変わって漢字圏の世界の物語。某島国の某時代をひそかにベースにした架空の王国を舞台に、訳ありの幼なじみ三人組（時々＋α）が妖退治に乗り出すラブ&バトルファンタジー……といったところでしょうか。

勾玉や鏡、組み紐、伝承、秘伝の巻物、明王などなど、自分の好きなものを詰めこんだ自分的宝箱のようなお話ですが、気軽に楽しんでいただければ幸いです。

そうそう、明王といえば。

実は私は、高校時代、アジアンビューティーな仏像の数々にハートを射貫かれ、修学旅行の仏閣巡りの際には同好の友人たちと共に仏像に見とれていた人間だったりします。

そんな私の魂に火をつけたのが、打ち合わせが盛り上がった拍子に担当女史の漏らした「明王や菩薩に力を貸してもらっちゃうとか～」という一言。冗談交じりのそのアイディアに私が瞬時に食いつき、作中の某キャラになっております。

とはいえ、作中に登場する『明王』及びそれっぽい単語は、実在の宗教とはまったく関係ありません。あくまでオリジナルのものということで、ご了承くださいませ。

最後に、この本の刊行に携わってくださった方々への感謝を。

魅惑のイラストで本作を数倍華やかにしてくださった香坂ゆう様。素敵なキャラクターたちや美麗な装束・鎧に、ラフをいただくたびに大興奮で見入っております。特に綺理のかわいらしさと冬惺の恰好よさには、ときめきが止まりません……！　ありがとうございます！（そして、いろいろわがままを言ってすみません！）

いつも丁寧な助言と指導をしてくださる担当様。本作の少女小説度がなんとか保たれているのは、担当様の「もっとラブを！」コールのおかげな気がいたします。

そしてなによりも、この本を読んでくださった皆様、本当にありがとうございます！　ご意見ご感想などをお聞かせいただければ嬉しいです。

願わくば、またお目にかかれますように。

薙野ゆいら

「金蘭の王国 君とはじまりの約束を」の感想をお寄せください。
おたよりのあて先
〒102-8078　東京都千代田区富士見2-13-3
角川書店ビーンズ文庫編集部気付
「薙野ゆいら」先生・「香坂ゆう」先生
また、編集部へのご意見ご希望は、同じ住所で「ビーンズ文庫編集部」
までお寄せください。

BEANS BUNKO

金蘭の王国
君とはじまりの約束を
薙野ゆいら

角川ビーンズ文庫　BB62-4　15459

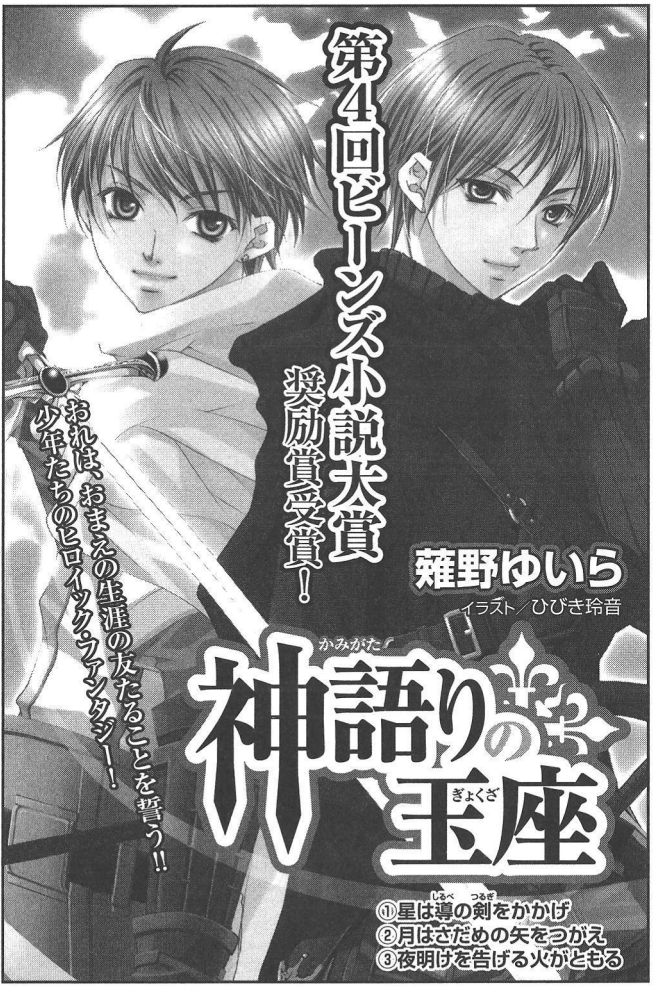
平成20年12月1日　初版発行

発行者――井上伸一郎
発行所――株式会社角川書店
東京都千代田区富士見2-13-3
電話/編集(03)3238-8506
〒102-8078
発売元――株式会社角川グループパブリッシング
東京都千代田区富士見2-13-3
電話/営業(03)3238-8521
〒102-8177
http://www.kadokawa.co.jp
印刷所――暁印刷　製本所――BBC
装幀者――micro fish

本書の無断複写・複製・転載を禁じます。
落丁・乱丁本は角川グループ受注センター読者係にお送りください。
送料は小社負担でお取り替えいたします。

ISBN978-4-04-452704-4 C0193 定価はカバーに明記してあります。

©Yuira NAGINO 2008 Printed in Japan


第4回ビーンズ小説大賞
奨励賞受賞！
おれは、おまえの生涯の友たることを誓う!!
少年たちのヒロイック・ファンタジー！
雁野ゆいら
イラスト／ひびき玲音
神語りの玉座
①星は導の剣をかかげ
②月はさだめの矢をつがえ
③夜明けを告げる火がともる

●角川ビーンズ文庫●



ミリセントと薔薇の約束

幽霊屋敷の優雅な執事

月本ナシオ

イラスト／椋本夏夜

触れた物の過去が見える特殊な力で鑑定士として活躍中のミリセントは、美貌の執事アンセルや超リアリストな貴族グレンらと共に、不思議な事件にかかわっていくことに――。華麗で優雅なミステリアス・ラブファンタジー!!

好評既刊

①幽霊屋敷の優雅な執事
②社交シーズンは魔法と共に

●角川ビーンズ文庫●

第8回 角川ビーンズ小説大賞 原稿大募集!

大幅アップ!

大賞 正賞のトロフィーならびに副賞300万円と応募原稿出版時の印税

角川ビーンズ文庫では、ヤングアダルト小説の新しい書き手を募集いたします。
ビーンズ文庫の作家として、また、次世代のヤングアダルト小説界を担う人材として世に送り出すために、「角川ビーンズ小説大賞」を設置します。

【募集作品】エンターテインメント性の強い、ファンタジックなストーリー。ただし、未発表のものに限ります。受賞作はビーンズ文庫で刊行いたします。
【応募資格】年齢・プロアマ不問。

【原稿枚数】400字詰め原稿用紙換算で、150枚以上300枚以内
【応募締切】2009年3月31日(当日消印有効)
【発　　表】2009年12月発表(予定)

【審査員】あさのあつこ　椹野道流　由羅カイリ (敬称略、順不同)

【応募の際の注意事項】
規定違反の作品は審査の対象となりません。

■原稿のはじめに表紙を付けて、以下の3項目を記入してください。
① 作品タイトル(フリガナ)
② ペンネーム(フリガナ)
③ 原稿枚数(ワープロ原稿の場合は400字詰め原稿用紙換算による枚数も必ず併記)

■2枚目に以下の7項目を記入してください。
① 作品タイトル(フリガナ)
② ペンネーム(フリガナ)
③ 氏名(フリガナ)
④ 郵便番号、住所(フリガナ)
⑤ 電話番号、メールアドレス
⑥ 年齢
⑦ 略歴(文芸賞応募歴含む)

■1200文字程度(原稿用紙3枚)のあらすじを添付してください。

■原稿には必ず通し番号を入れ、右上をバインダークリップでとじること。原稿が厚くなる場合は、2～3冊に分冊してもかまいません。その場合、必ず1つの封筒に入れてください。ひもやホチキスでとじるのは不可です。(台紙付きの400字詰め原稿用紙使用の場合は、原稿を1枚ずつ切り離してからとじてください)

■ワープロ原稿が望ましい。ワープロ原稿の場合は必ずフロッピーディスクまたはCD-R(ワープロ専用機の場合はファイル形式をテキストに限定。パソコンの場合はファイル形式をテキスト、MS Word、一太郎に限定)を添付し、そのラベルにタイトルとペンネームを明記すること。プリントアウトは必ずA4判の用紙で1ページにつき40文字×30行の書式で印刷すること。ただし、400字詰め原稿用紙にワープロ印刷は不可。感熱紙は字が読めなくなるので使用しないこと。

■手書き原稿の場合は、A4判の400字詰め原稿用紙を使用。鉛筆書きは不可です。

・同じ作品による他の文学賞への二重応募は認められません。
・入選作の出版権、映像化権を含む二次的利用権(著作権法第27条及び第28条の権利を含む)は角川書店に帰属します。
・応募原稿は返却いたしません。必要な方はコピーを取ってからご応募ください。
・ご提供いただきました情報は、選考および結果通知のために利用いたします。
くわしくは当社プライバシーポリシー
(http://www.kadokawa.co.jp/help/policy_kadokawa.html)をご覧ください。

【原稿の送り先】〒102-8078 東京都千代田区富士見2-13-3
(株)角川書店ビーンズ文庫編集部「第8回角川ビーンズ小説大賞」係
※なお、電話によるお問い合わせは受付できませんのでご遠慮ください。

9784044527044

ISBN978-4-04-452704-4
C0193 ¥476E

定価：本体476円（税別）

1920193004762

BEANS BUNKO

金蘭の王国
君とはじまりの約束を

雍野ゆいら

大貴族の姫君・綺理は、毒薬の調合が趣味（！）の元気な少女。親が決めた許婚である王弟・冬悝のことがひそかに気になっている…のだが、全然意識されていないのが悩みの種。そんな中、国北部で淵妖と呼ばれる妖の被害が続出。綺理は冬悝と、幼なじみの乾術師・翔波と共に淵妖退治の旅に出る。だが三人には幼い頃誤って謎の淵妖・真羅（今は美少年姿）と契約してしまったという秘密があって!?